

# 聴覚障害学生サポートネットワークの 構築をめざして

## 第 2 回アメリカ視察報告書



日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク  
PEPNet-Japan : The Postsecondary  
Education Programs Network of Japan



# はじめに

近年、わが国では一般の大学・短期大学に進学する聴覚障害者が増加し、情報保障を中心とした支援のニーズが大きく高まってきた。こうした状況を受けて、聴覚・視覚障害者のための高等教育機関である筑波技術短期大学（当時）が聴覚障害学生支援の分野で積極的に活動を行っている全国12の大学・支援組織に呼びかけ、2004年10月に「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）」が結成された。このネットワーク事業の一環として、「聴覚障害者のための国際大学連合（PEN-International）」と日本財団の全面的な援助を受け、アメリカにおける聴覚障害学生支援の実情をつぶさに視察する機会を作ることができた。

視察の期間、参加者、訪問先は次の通りである。

視察期間：平成17年3月13日（日）～24日（木）

参加者：大学・支援組織の担当者10名 日本財団1名 通訳者4名

訪問先： ロチェスター工科大学・国立ろう工科大学・北東地域技術支援センター（NETAC）

ニューヨーク市内の3つの大学（NETAC サイト）

アメリカでは全国を4つの地域に分けて「聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet）」が活動しており、その中の「北東地域技術支援センター（NETAC）」がロチェスター工科大学を構成する学部の1つである国立ろう工科大学に置かれている。今回の視察の前半はニューヨーク州ロチェスター市に滞在し、NETAC本部の活動とロチェスター工科大学で健聴学生と共に学ぶ聴覚障害学生の支援の状況について多くの専門家から情報を得ることができた。後半はニューヨーク市に移動し、NETACのサイトがあるニューヨーク大学、ラガーディア大学、ハンター大学を訪ね、支援担当者や聴覚障害学生と面談して実情や問題点を知ることができた。

視察全体を通して次のようなことが明らかになった。

- ・ ろう者、難聴者が障害を持たない人たちと共に学ぶインクルージョン、メインストリーミングの状況が一層進んでいる。
- ・ 「障害を持つアメリカ人に関する法律」（ADA）によって聴覚障害者の情報へのアクセシビリティが向上している。

セス権が保障されている。

- ・ 連邦政府の責任で多額の予算が確保されている。
- ・ 手話通訳やノートテイクだけでなく、学生の能力開発、カウンセリング、生活援助、就職援助など、幅広い支援が行われている。
- ・ 支援担当者が専門家として責任を持てる形で仕事をしている。専門家の養成、研修制度が確立されている。
- ・ 支援担当者はいずれも現状に満足しているのではなく、予算の獲得、支援内容の充実のために絶えず悩み、努力している。

12日間にわたり、未だ冬の季節が終わらないロチェスターの自然やニューヨークの活気ある人びとの動きに触れながら、数十人に及ぶ聴覚障害学生支援の専門家と面談し、施設・設備を見学し、学生との交流を行い、充実した時間を過ごすことができた。わが国の支援担当者が長期間行動を共にし、情報を交換し、「がんばろう」という情熱を共有できたことにも大きな意味があった。今回得られた知見を参加者の中に留めるのではなく、視察報告書の形で公にすることにより、わが国の聴覚障害学生支援の体制が一層前進することを願うものである。

今回の視察の実現に尽力をいただいた PEN-International とディレクターのジェームス・デカロ博士を初めとするスタッフの方々、NETAC関係者及び日本財団に厚くお礼申し上げます。

根本匡文（筑波技術大学）

## 第 1 部 ロチェスター工科大学 (RIT) の取り組み

### 第 1 章 ロチェスター工科大学 (RIT) の概要

### 第 2 章 ロチェスター工科大学 (RIT) による聴覚障害学生サポートサービス

アクセスサービス

アカデミックサポートサービス

カウンセリングサービス

学生生活

職業指導

### 第 3 章 聴覚障害学生支援を支える NTID の取り組み

手話通訳者養成

文字による聴覚障害学生支援 (C-print)

カウンセリングサービスとその理論

## 第 2 部 PEPNet (Postsecondary Education Network) の取り組み

### 第 1 章 PEPNet (Postsecondary Education Network) および NETAC の概要

### 第 2 章 個別大学の取り組み

ニューヨーク大学における聴覚障害学生サポートサービスの概要

ラガーディア大学における聴覚障害学生サポートサービスの概要

ハンター大学における聴覚障害学生サポートサービスの概要

ニューヨーク州 4 大学で学ぶ聴覚障害学生の声

## 付録

PEPNet パンフレット

NETAC パンフレット

全視察日程

ロチェスター工科大学の位置

ロチェスター工科大学構内地図



# 第1部 ロチェスター工科大学 (RIT) の取り組み

## 第1章 ロチェスター工科大学 (RIT) の概要

河野純大 (筑波技術大学産業技術学部助教授)

白澤麻弓 (筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター助手)

### 1. NTID と RIT

RIT(Rochester Institute of Technology:ロチェスター工科大学)は応用科学・工学・ビジネスなどの7つのカレッジを持つ私立大学である。これに対して NTID(National Technical Institute for the Deaf:国立聾工科大学)は、アメリカ連邦政府の援助による聴覚障害学生のための特別プログラムであり、RIT 内の1カレッジ

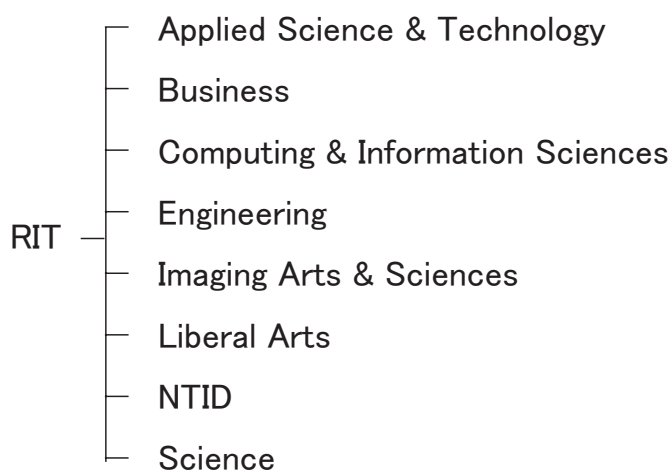


図1 RITの学部構成

ジとして位置づけられている。RIT 内には現在約1100名の聴覚障害学生が在籍しており、その約半数がNTIDに在籍している。NTIDには副(準)学士コース(2年)、学士コース(4年)、修士コース(2年)などのコースがあり、副(準)学士コースでは専任教員が手話を使いながら直接学生を指導している。また副学士の学位を取得後、RIT内の他の7学部へ編入することもでき、この場合はNTIDのサポートを受けながら学士の学位を取得することになる。さらに、学士コースで学ぶには基礎学力が不足している学生のための学士準備コースもあり、修士コース(ろうまたは難聴学生のための高等教育における科学修士)では聞こえない学生、聞こえる学生の両方が入学できることになっている。

### 2. RITにおける聴覚障害学生サポートサービス

米国の大学では在籍する障害学生への支援のために、学内型障害学生サポートセンターが設置され、手話通訳等の必要なサービスが提供されている例が多い(図2)。RITの場合、NTIDそのものがこのセンターにあたる機能を果たしているが、RIT内にはこの他にさらに4つのサテライト的なサポートセンターが設置されており、NTID以外の7つの学部に

在籍する聴覚障害学生のサポートを行っている（図 3）。この 4 つのサポートセンターは CBGS（Center for Baccalaureate and Graduate Studies）と呼ばれており、それぞれ専属の手話通訳コーディネーターやノートテイクコーディネーター、カウンセラー等が配置されていて、担当学部に通じる聴覚障害学生からの依頼を受けて表 1 に示すような各種サービスを提供している。

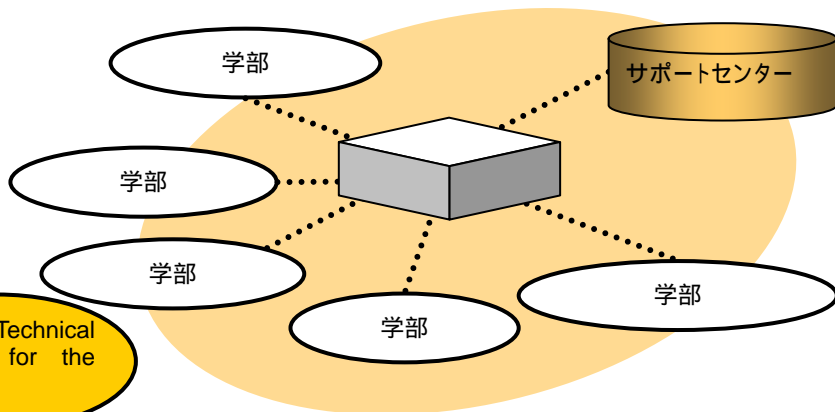


図 2 学内型障害学生サポートセンターの例

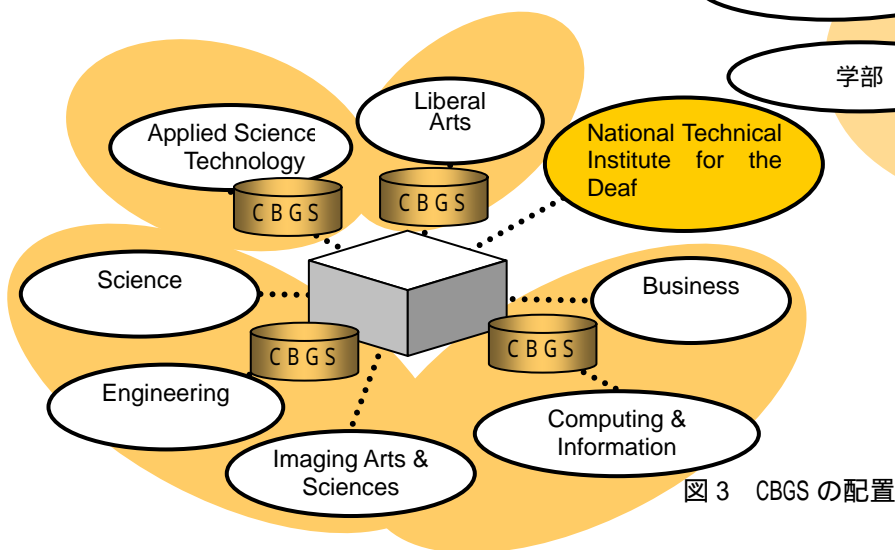


図 3 CBGS の配置

本視察では、こうした RIT 内の個々のサービスについて、それぞれ担当のコーディネーターから詳しい内容と現状についての説明を受けることができた。本項では、これらサービスの概要と RIT における聴覚障害学生支援を支える NTID の取り組みについて報告する。

表 1 CBGS が提供しているサービスの内容

サービス	概要	通訳者数	提供時間数	養成等
Interpreting 手話通訳	アメリカ手話通訳、対应手話通訳、口話通訳（キユード通訳を含む）触手話通訳など学生の好みに応じて派遣を行う。授業以外への派遣も可能。ただし、口話通訳は基本的に 1 年次のみ派遣で、複数の学生が同一の授業をとっていたり、通訳者が足りない場合には希望に添えないこともある。通訳依頼は履修登録の際に行い、オンラインで登録可能（通訳が付くかどうかオンラインで確認可）。	101 人（他に、フリーランス通訳者 / ろうの通訳者 / 通訳者養成コースの学生など）	94134 時間（供給率 97%） 講義:75710 講義外:10811 会議等:7613	大学の通訳者養成コースを修了した通訳者等をフルタイムで雇用している。技術の程度によって 4 段階に分けられており、平均収入は 31000\$/年



Notetaking ノートテイク	一般学生をノートテイク者として養成し、聴覚障害学生の要望にあわせて授業に派遣している。授業後ノートはCBGSからスキャンセンターに送られ、24時間以内(通常は1~2時間以内)にインターネット上にアップロードされるため、聴覚障害学生は必要なときに適宜アクセスして閲覧することが可能。ノートテイクは基本的にすでに保障を行う講義を取ったことがある学生が現在履修中の学生に依頼し、記述内容に間違いがないように授業担当教官もチェックを行うことが多い。	300~400人	55439時間 (うち5670時間は、NTIDの学生で重複障害のためにノートテイクが必要な学生へのサポート)	4時間の養成講座を受けた学生がノートテイク者として登録。今学期よりオンライントレーニングも開始。 \$6.42/h
C-printing パソコン通訳	NTIDが開発したパソコン通訳の方法で、キーボードを用いたタイプ方式と、音声認識を用いた音声入力方式の二通りがある。いずれも通常一人の通訳者が授業保障にあたる。数年前から本格的に導入されたばかりであるため、まだ提供数は少なく、手話や文字によるコミュニケーションを困難とする盲ろう学生に優先的に割り当てている。	10人程度	1596時間	オンラインによるトレーニング
Tutoring チュータリング	学生のコミュニケーション状態にあわせた学習指導を提供する。手話等のコミュニケーションが可能な教員その他、聴覚障害学生ですでに学士を取得した先輩によるチューターも行われている。学生に対して学業上の援助をするだけでなく、授業内で適切なサポートが行われているかもチェックし、不備がある場合はCBGSと協力して改善を求めていっている。		14487時間	
その他	Audiological services (補聴サービス)、Speech and language services (発音・言語訓練)、Mental health counseling and psychotherapy (心理カウンセリング、心理療法) Personal and career counseling and academic advising (個人相談、職業相談、就学相談) Student Life Team (学生生活チーム:新入生へのサポート、黒人などマイノリティグループへのサポート、リーダー養成など)、Financial aid (財政的援助)、Technological assistance (技術支援:字幕教材作成支援など)、Substance and Alcohol Intervention Services for the Deaf (薬物およびアルコール依存症の学生への援助)			

ここでいうノートテイクサービスとは、手話通訳等の情報保障手段と併用して授業内容の記録を取るためのノートを作成するものであり、日本で用いられている筆記通訳としてのノートテイクとは異なる。

## 第2章 ロチェスター工科大学 (RIT) による 聴覚障害学生サポートサービス

### . アクセスサービス

平井利明 (静岡福祉大学 社会福祉学部 福祉情報学科)

#### 1. RIT で学んでいる聴覚障害学生に対する通訳サービスシステムの提供

NETAC は、さまざまなアクセスサービスを行っている。そのアクセスサービスシステムの中で RIT におけるアクセスサービスシステムの体系は、次の図 1 のとおりである。

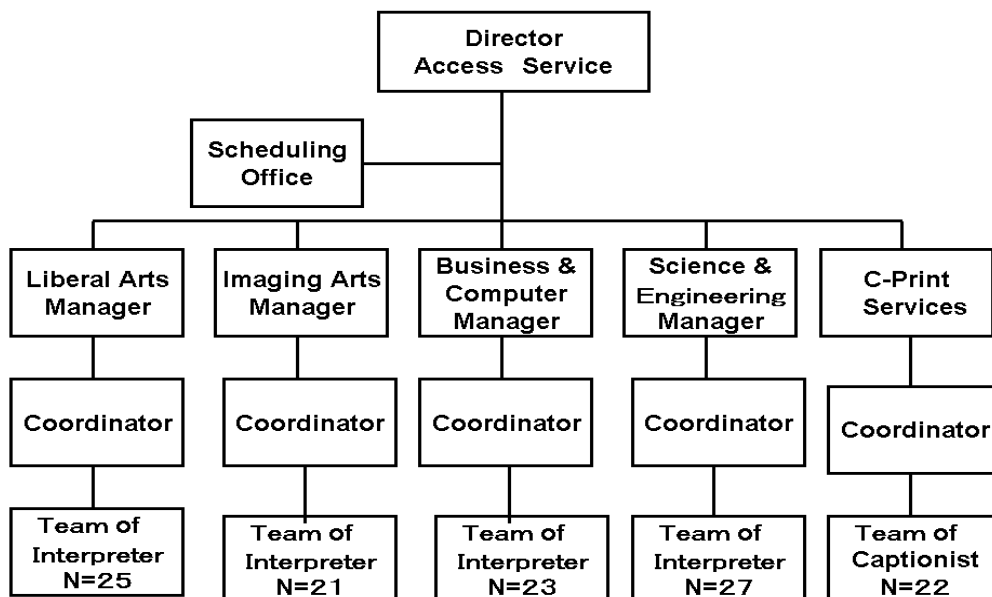


図1 アクセスサービス体系

この図において、C-Print サービスを除けば25年間かかわりをもってきている。図に示すように、一般教養、映像、ビジネス&コンピュータ、科学技術の各分野にはマネージャーがいる。そして、それぞれのセクションにはチームが作られている。そこには、マネージャーやコーディネータといった上司が存在している。ここにおけるコーディネータの役割は、リクエストを集めたり、評価をしたり、何を優先すべきかを決定したりする。一番下のチームインタプリタ (Team Interpreter) は、それぞれ通訳の所属する部門があり、そのそれぞれ所属する分野で活躍し、通訳を行っている。各分野、すなわち一般教養、映

像、ビジネス&コンピュータ、科学技術の各分野のそれぞれのコースの内容や語彙は、熟知している。

学生の要求はいろいろある。たとえば、図1における一番左側の一般教養で出されたものは、科学技術分野に関係したり、その逆もあったりする。このように一つの分野だけではなく、他の分野に情報がいくこともある。

## 2. 通訳サービスの現状

図2は、通訳リソースプールの現状である。全体の35%は、無所属通訳に依存している。したがって抱えている通訳が残りの65%となる。

斜線部分における通訳は、1週間のうち100人の通訳が活躍し、2,000時間の通訳サービスを行っている。図2における点線部分は、1,000時間であり、無所属の地域での通訳の仕事である。これは、学校が雇用している通訳者以外に外からとってくる通訳である。それが1,000時間である。1,000人の通訳者で使い果たしてしまい、さらに通訳の依頼があるときには外に頼む。こうしたリソースが外にあることは大変便利なことである。RITとしても無所属の通訳を頼りにしている。しかしながら、それでもまだ通訳者の数は、十分に満足できる状態ではない。最近では、ビデオリアルサービス(VRS)を使用している。

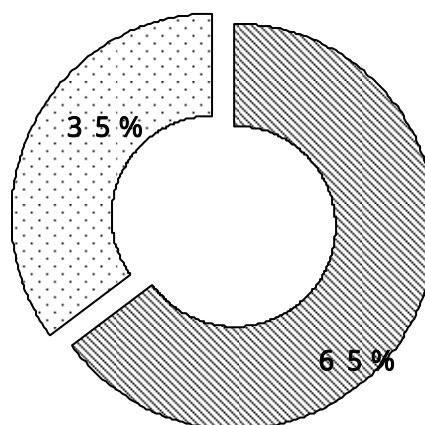


図2 通訳リソースプール

## 3. RITで学んでいる聴覚障害学生に対して、用意されている通訳サービス

RITで行われているメインの通訳サービスは、手話通訳である。サービスは、学生のニーズのもとで行われている。通訳の選択にあたり「あの人は好き」、「あの人は嫌い」という、学生の好き嫌いによって選択が行われることはない。

手話にも対応手話通訳というものがあり、それは主として英語で書いてある文を、口で英語に直して話す。話しながら、手では手話をおこなっている。対応手話は、口では英語をしゃべり、手ではASL(アメリカ手話)をやっている。この手話における文法は、英語の文法のままである。これはトランジットレタリズムといわれる。

学生のそれぞれの状況に応じて、一つの方法だけではなくその方向性を変えたりしている。言い換えれば、多くのろう学生のニーズにあうようにしている。通常 ASL (アメリカ手話)で行うが、これは ASL に慣れている学生であり、それによる通訳は、大丈夫である。この他学生によっては口話による通訳など、別な要求があれば、そうした通訳を用意することになる。

#### 4 . RIT で学んでいる学生に対する手話通訳以外のアクセスサービス

手話通訳サービスとして、ASL や対应手話通訳、口話通訳などがあつた。このほか RIT で学生に提供している通訳サービスには、「タクタイル」「クローズビジョン」「C-Print」などがある。

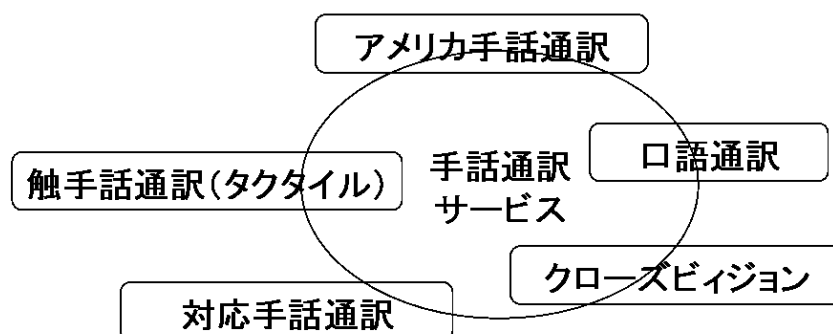


図3 さまざまな手話通訳サービス

「タクタイル」は、「キーを押した感触」を意味し、日本語で「触手話」に該当するものである。これは、盲ろう学生のために行う手話であり、盲ろう学生の手の上に、通訳が手を置いて行う手話、あるいは盲ろう学生が通訳の手の上で手話を行い、お互いにコミュニケーションをとる手話である。

「クローズビジョン」この手話は、視野の狭い弱視者のために行う小さくして行う手話である。

「C-Print」は、ASL を解さない、サインをしない学生にも対応できる方法である。C-Print は、ろうおよび難聴の学生のためのサポートサービスとして NTID が開発したシステムである。このシステムは、コンピュータ支援音声 / 文字変換システムであり、全米で多くのプログラムに採用され、成功を収めている。C-Print は、C-Print キャプショ

ニストと呼ばれるタイピストが教師の講義や学生の発言などをノートパソコンに入力する。入力された情報は、直ちに2台目のノートパソコンまたはモニターに表示され、授業中の学生が読むことができるようになっている。

このほか、学生によっては、時折さまざまな場面でキードスピーチを必要とし、その要求をする学生もいる。しかし、このサービスは、限定して行っている。

大学内には、いろいろな学生がおり、何がなかで必要でないかを考え、学生に対しては必要に応じてサービスを提供している。

#### 5. 聴覚障害学生の情報アクセスサービスへの要求方法と大学の対応

聴覚障害学生が、情報アクセスサービスを要求する方法として、3つがある。

第1番目としてコンピュータベースのウェブシステムがある。このウェブシステムは、コースのレジスタをおこなったりするものである。このコンピュータシステムは、ノートテイキングの依頼システムと同じもので、これで通訳の依頼ができる。

2番目にインテグレートクオータリレジストレーションである。これは、これは学生がクラスをとるときに、このクラスをとりたいですよという依頼と同時に通訳も依頼することができるというシステムである。それぞれの学期ごとにどのコースをとるか選択をする。

3番目には、スペシャルリクエストがある。授業以外の活動、たとえば課外学習などに対する依頼などがこれに該当する。

#### 6. 通訳者の労働時間等の身分保障

通訳者は、どこに所属していて、労働時間等の身分保障はどのようになっているのか。

まず、通訳の所属する部門は、コンピュータオペレーション部門である。コンピュータオペレーション部門は、通訳の業務のほかマルチメディアやコンピュータ関係アクセスサービスを行っている部門である。その部門に通訳は所属している。この部門に所属する前には、コンピュータ関係ではなくアカデミックプログラム部門にという部門に所属していた。現在は、所属部門が変わったことにたいして、該当部門においてよいのかの試験期間であり、これからどうなるのかわからない。

次に、通訳の身分保障である。学校に雇用されているフルタイムの通訳は、10ヶ月で契約している。フルタイムスタッフは、1週間で40時間を働くのが条件であり、その40時間のうち20時間は実際に手話を使って仕事をするのが条件である。20時間という

のは年々減ってきて現在の時間である。1986年には28時間が必要であったが、現在では20時間までに減ってきている。1980年代後期になって20時間になった。こうして減ってきた要因には、手話通訳の腱鞘炎などの発生を防ぐ、いわば手話通訳者の健康を守る意味で少なくなったと言える。しかしながらこの20時間は、学校の担当者の人たちから理解を得るのは難しい状況のようである。というのはフルタイムで40時間働かなければならないということで雇用されているながら、実際の労働が20時間だからである。したがってこの労働条件は、手話関係者以外の人たちから見れば、フェアではないと見られてしまう。このあたりは、理屈ではなかなか問題解決しない、難しい問題であると言える。給与面においても、他の学校と比べてもなかなか難しいものがあるようである。たとえば、「1時間手話通訳を担当した」と言っても、「実際に手話をしているのが1時間」の時もあり、「手話をほとんどしていなかった1時間」の時もある。こうした面は、他の学校と比べようがない部分がある。



図4 手話通訳養成教育の一場面

担当する時間を減らしてよかった面に、金銭問題もあるが、20時間に減らしたことによって通訳の健康状態がしっかり守られるようになったのはよいことであるという。通訳の分野は、まだまだ成長し、新しい分野である。25年前には、この通訳という仕事が残っているのかどうかであったが、25年たった今、通訳は大切な仕事として残っている。通訳になるために、通訳プログラムを通して通訳者になってきている経歴者もいる。現在RITで働いている通訳者は、平均して13年間働いている人たちである。この人たちが13年たって、今やっ

と通訳のプロフェッショナルとして認められ

るようになった。それまで経験も積んできている。通訳士レベルには4段階があるが、実際、一番上のレベルまでいくのには20年間かかるくらいのもになってきている。こうした難しさもあって、手話通訳士というものがだんだん認められてきていると言える。また、通訳の分野にも新たなジャンルがでてきている。それによって、通訳という職業が、

より魅力的なものになってきているようだ。それゆえ、現在も 13～14 人のフルタイム通訳を雇用できるようになってきている。

## 7. 外部の通訳者の利用と費用

RIT は、学校外から通訳士を雇用している。今、現在では 1 人だけ外からフリーの通訳士を雇用しているとのことである。通訳に関連して、NTID に関する予算であるが、他の学校に比べて恵まれているようである。それは、国から予算が直接 NTID に支払われているということである。実際、予算が多く NTID に支払われ、恩恵を受けるのは幸運であるが、しかし毎年毎年予算以上にその予算を使ってしまうという。というのは、メインストリームにいくろう学生が増えていくということがある。事実、毎年、国から支払われる以上にお金に費やしているのが現状であるとのことである。1 年間に通訳のためのいくら使われているのかというと、600 万ドル、日本円で 6 億円弱がその費用に使われている。非常に多額の金額である。通訳者への支払いは、学生が、NTID に所属している場合であれば、通訳費用は学校から支出される。NTID にいる学生は、入学条件を満たして NTID にはいつてきている。したがって入学した学生は、RIT と同じものとして扱われる。もちろん NTID に所属している人たちの専門分野は、RIT の分野に所属していることになる。したがって NTID からメインストリームに入った学生の通訳費用も、NTID が見ることになる。NTID は、特別な条件があり、国からお金がでることになっている。実際 NTID にいる学生は他の大学から比べものすごい数であり、RIT からお金を払うことは無理である。このような人数のこともあり、国から直接、ろう学生をサポートするお金がでることになる。しかし他の大学は、学校側が通訳に対してお金を支払わなければならない。たとえば、ニューヨーク大学などの他の大学は、学生が通訳を必要とした場合、大学が通訳に対してお金を支払わなければならないのである。NTID は、こうした状況からから考えるとアメリカ国内の中でも特別な学校であるということがわかる。

## 8. アクセスサービスの提供

アクセスサービスの提供、それは、学生からの依頼ではじまる。学生があまりにも多いため、同じクラスをとるろう学生を同じクラスにするように調整するようにしている。これをチャンネルングという。学校が始まる前の段階で、コンピュータなどを使ってろう学生がどのクラスに通訳を必要とするのかを調べる。そして、できるだけ同じ授業をとる人

たちが一緒のクラスになるように分けるよう調整を図っている。理想的には、ろう学生の希望とおり、どこにでも、いつの時間でも対応できることであるが、なかなか難しい面がありそうである。というのは、ろう学生や難聴学生には、見えないバリアがあり、必ずしも学生たち全員が、すべてのクラスに対してサービスを受けたり、アクセスをしたりするわけではない。たとえば、学部の中には同じ内容のコースが4つある。しかし、同じ内容であっても教える先生が違う。こうした場合、学生たちは「この先生がいい」「この先生にしたい」という要望が発生する。したがって内容が同じだからと言って必ずしもろう学生と一緒にできない。学生の専門分野が決まっている以上、「これをとりたいクラス」「これをとりたくないクラス」というのがある。学生の要望に合わせて、同じ内容のクラスでも、通訳をばらばらにして配属しなければいけないということもある。すべてのろう学生をひとつの、同じクラスにまとめることはなかなか難しいようである。ろう学生は、「この先生がいい」と選べれば、それにこしたことはない、しかしそこまで決定できない学生もいるため、学校側からお願いして、できるだけ一つのところに集まってもらうようし、通訳サービスをつける努力をしている。もちろんとれるクラスは、制限がある。

## 9. 学生のニーズとその対応、課題

ろう学生は、どのカリキュラム、どの分野でも専攻ができる。学生のニーズによっては、C-Print と通訳の両方のサービスを同時に提供することもある。

ある学生は ASL に堪能であるから通訳者を要望し、ある学生は ASL がまったくわからないため C-Print を要望することもある。学生の要望によってサービスが異なる。ろう学生といっても ASL がまったく役にたたないこともある。そうした学生は、C-Print に頼るという方法もある。もし学生が手話を理解できる場合は、C-Print をつける資格はない。手話ができる学生は、まず「手話通訳者」を使いなさいと提案する。現在の状況で、22人の学生は C-Print と使ってもよいと判断され、450人はだめであると言われているとのことである。それでも C-Print に対するニーズはどんどん増加傾向にある。C-Print にニーズが広がっている理由は、新たらしい技術に興味があるからである。新しい技術は、できるたびごとに使ってみたいという要望であり自然発生的なことである。

こうしたことに関して課題が発生する。

C-Print のニーズが大きくなってきていることは ASL ができない人が増えているということではない。通訳状況がかわってきている。今では高校で C-Print を使っている学生



もいる。高校時代に C-Print に慣れて NTID に入学してくる。そうした学生が増えているという状況もある。このことで C-Print の必要性が増えているということもある。そのほかに ASL に堪能な学生に加え、英語に堪能な学生がいる、そうした学生たちは、C-Print の方を望んでいる学生もいる。英語に堪能なろう学生は、何を実際に英語で言っているのか通訳者を介さないで、教師が口で言っていることは何なのかを聞きたいということから C-Print を好む。というのは、教師の言った言葉がそのまま変換される C-Print を好むということである。こうした通訳状況の変化の中、NTID も通訳環境の変化にうまく動じていかなければならない。C-Print の要望が多くなれば NTID も C-Print のサービスを提供し、通訳環境の変化にうまく対応していたいと思っている。NTID も通訳環境の変化に応じていかなければならない。もちろん学生が変わってくれば、NTID の教員たちのサービスも変わってくると言える。



図5 C-Print システムへの入力風景

こんな例を出して説明があった。かつて、手話のできない学生がいた。字幕もなく、口話通訳をしていた。20 年前あたりの話である。この時は、これでよかった。しかし現在、最大の課題は、新たらしいサービスが増えれば増えるほど、ろう者やろう者のコミュニティ、グループ、が「これが好き」「あれが好き」という。通訳者を好む人たち、C-Print を好む人たち、さまざまな通訳方法を要望し、それがだんだんと分かれてきている。それが問題となり、課題となってきている。今の状況は、ひとつのグループが多くに分かれる前に、手話を好む、そして対応手話を好むグループと、まったく手話のできないグループ、このため C-Print を使う 2 つの分野にするようにしている。口話通訳やキードスピーチ

というのは、クラスを選択によって必要である。もし水泳のクラスをとっている場合、コンピュータは使えない。こうした場合にはキードスピーチ、口話通訳が必要になることになり、必ずしも C-Print というものを必要とする学生はばかりではない。その時、その時で必要性が異なることも認識しなければならない。

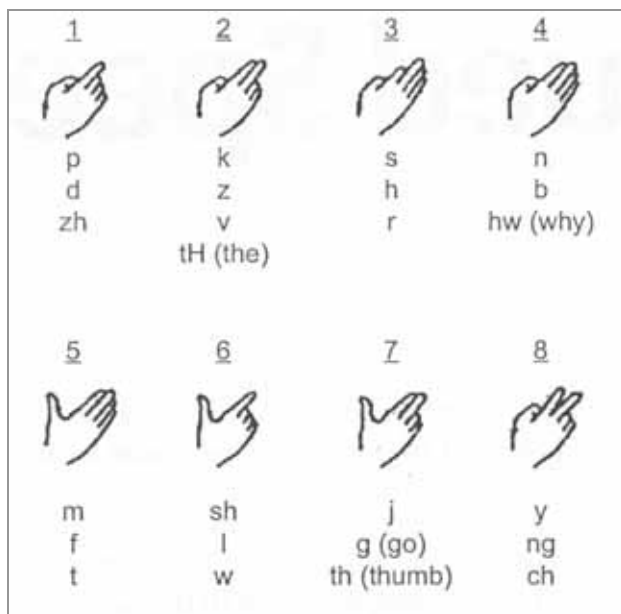


図6 キードスピーチで子音を表す言葉(NETAC Tipsheet より)

こうした状況の中で、もっとも大きな課題は、通訳者の数が不足であるという。学生が必要とする数に対応できないことである。難しいのは、何人の通訳者が実際に必要かを明確に答えられない、換算できない。依頼は来るけれども、実際に何人が必要な数なのか。ろうの学生たちは NTID に入り、メインストリームの教育をうけるようになってきている。通訳者が不足してきている事実は、ろう学生の成功に対する被害だと言えるのではないか。年々ろう学生が RIT に入学し、入学者数の増加によって、通訳者の必要性がさらに高まり、結果的に通訳者不足となってきている。加えて RIT は、学部を増やしたり、プログラムを増やしたりしており、それによって、NTID の問題や課題がさらに大きくなり、影響も大きくなっている。学生ニーズの変化、ろう学生の成功など環境変化によってサービスを变えていかなければならない現実を聞いた。

以上のことに関して、デカロ氏から次のようなコメントがあった。ここでは、要約を提示する。

「ろうの学生があまりにも多すぎてサービスをいくつか制限しなくてはいけない。

C-Print、通訳者の数の制限が必要になる。もし大学に 5,000 人いたら 5,000 人の好みに応じた対応することは難しい。ニューヨーク大学では 10 人しかろう学生がいない。したがってニューヨーク大学では 10 人に対応する教育が可能である。NTID にはろう学生が多く、少数のろう学生しかいない大学とは異なる。少人数の大学ではもし 5 人のろう学生が入学したら、5 人がそれぞれのサービスを受けることができるかもしれないが、5 人の友人しかキャンパス内で、できないということになる。NTID に入ると得るものも多いが、失うものもある。それは、ニューヨーク大学に入学しても同じことである。もちろん得るものもあるし、失うものもある。」

## 10 . 通訳者の評価と改善

評価という問題について、次のような見解を得た。評価は、2 つある。

評価の一つ目は、技術評価である。ビデオなどをみせて、通訳者の技術を見る。このことは別に新しいことでもなく、昔から通訳者に対して行っていることである。ビデオを見て、通訳したり、人の話しているのを見て手話に直したりする。その姿をみて、通訳者の問題点や改善点を探し、どこを直して行かなければならないかというテストである。

評価の2 つ目は、どのように質をあげていくのか。このことに関しては、通訳者を現場に立ち合わせ、他の通訳者たちがどのように仕事をしているのかを視察をしたり、見たりというのがあつた。大学には、1 年間、定期的な視察があり、1 年間の中でステップアップしていく順序がある。この年はこういうもの、次の年はこういうものと通訳者を育成していく。年ごとにステップアップの順序が組み込まれている。通訳者を育成していくプログラムをもっているのである。

質の向上に関して、この他に、スタッフとして雇用された人たちに特別の個別指導や、経験のある通訳者と一緒に働かせて先輩の通訳者から指導を受ける。こうしたサポートも行っている。その他に、プログラムの中にはコーディネータ、ワークショップや研修会を開催したり、手話通訳者を向上させるクラスを設けたりして、各通訳者の技術の向上に力をいれている。これはどこの大学にも言えることであるが、ろう者が少ない小さな大学においても言えることであるが、一番すごい影響力のあるよい方法というのは、メンタリング、すなわち先輩の通訳者に新しい通訳者がついていって一緒に仕事をする。そして経験のある通訳者からいろいろなこと学んだり、技術を学んだりすることである。これば若い通訳者を育成する一番効果のある、役にたつ、影響力のある方法であると思っている。

このほか、1年間定期的にコーディネータとともに視察があったりとか、ろう学生の意見を採り入れた質疑応答だったり、話し合いも行われる。

#### 11. アクセスサービスとしてのビデオリレーインタープリティング

ビデオリレーサービスは、だんだんと広がってきているサービスである。これはインターネットを利用したサービスである。たとえば、ろう、難聴者が、通訳者を通してコンタクトをとり、そして通訳者の仲介をへて聞こえる人と会話をする、コンピュータ上で通訳が行われる。これがビデオリレーインタープリティングサービスというものである。コンピュータのところでマイクを使って手話のできない人が話し、コンピュータを通して通訳者をスクリーンに映し出し、スピーカから声が聞こえて、手話通訳者がウェブカメラを使って手話通訳をし、それが今度はろう学生のスクリーンに映し出されるというサービスである。



図7 ビデオリレーインタープリティングシステム



図8 システムとカメラ、リンク装置等

1980年代ごろに使われたリレーサービスというものがあったが、これはビデオリレーサービスとは異なる。リレーサービスは TTY や電話を使い、電話にタイプライティングがついたようなものであった。現在は、これにかわるものとしてインターネットそしてウェブカメラを介しての手話通訳の方法が広がってきている。そしてビデオリレーサービスというのは、電話料金に含まれない。ろうの人たちにとってはお金を支払わない、無料でできるシステムである。したがって、かつての TTY テレタイプライタよりも、ろうの人たちにとっては使い勝手がよいものになってきている。

サービスは、実際にクラス内で使用されているのかというと、クラスでは使用されていない。ビデオリレーサービスは、クラスで使用するものではなく、ろう学生が外に対して

電話を使うときに使用するシステムであり、クラスとは別ものである。

なおビデオリレーインタプリティングサービスは、NTID ラーニングセンターの一角に設置されている。



図9 NTID ラーニングセンター

---

## ．アカデミックサポートサービス

平井利明（静岡福祉大学 社会福祉学部 福祉情報学科）

---

### 1．はじめに

アカデミックサポートサービスについて、ジム氏がプレゼンテーションを行った。その内容を以下に示す。

アカデミックサポートサービスは、学士プログラムの中で行われている。このプログラムにおいてアカデミックサポートサービスは、ノートテイキングの他に音声認識についての技術開発が進められている。音声認識が十分提供されるようになれば、さらにサポートサービスは、さらに発展すると思われる。音声認識の利点は、ノートテイクに比べより直接的な情報提供が学生にできることにある。しかし悪い点もある。音声認識は、話した内容がすべて情報となってしまう、不要な情報まで提供されることになり、情報が多すぎて困ることにもなる。ノートテイクの場合には、ノートテイカーが話す内容をまとめて提供するので、情報はその場の環境で与えられたすべてではない。しかし音声認識は、音声技術の駆使でその場で話した内容の音声情報が、デジタルあるいはアナログ情報としてその変換されてしまう。したがって多すぎる情報ということになる。10年後には、この技術どうなるのか。楽しみな面もある。



図1 アカデミックサポートサービスについて話すジム氏

### 2．アカデミックサポートサービスの組織

アカデミックサポートサービスには、いくつかの組織がある。この組織には、サポート

ファカルティというものがある。この組織は、ろうの学生をサポートする特別な指導者がいる部門である。そしてその部門の指導員は、人それぞれに専門的な分野をもっている。たとえばジムの所属する部門には3人の特別指導員がいる。一人はマーケティング、ひとりには会計、もう一人はマネージメントや国際ビジネスである。サポートサービスは、いくつかの部門をもち、それぞれが専門分野をもって成り立っている。それらの指導員は、NTID の中の指導員である。指導員は、ほとんど1対1、あるいは少人数でサポートを行っている。サポートサービスのためにリストがある。こうしたリストは、ノートテイクナーについての情報とともに、どこにろう学生がいるのかがわかるようになっている。指導員は、できるだけろう学生のサポートができるようにしている。ひとりの指導員は、2つあるいは3つとか、4つとか、5つとかの異なった授業を担当し、ろう学生の指導を行っている。

リストの中には、ノートテイクナーのリストのほか、ある学生に対するノートテイクナーは誰か、その指導員は誰かなどがわかるようになっている。指導員の役割には、アドバイスやカウンセリングもある。指導員は、実際にクラスを行っている先生とより協力的に行っていくことがあり、この点苦労ではあるが大切なことである。指導員も、実際に、ろう学生が受けている授業の教授と良い関係をもつことが大切となる。ろう学生を指導する人たちは、ろう学生の指導もあるが、実際にはクラスを教えている教授たちへの働きかけも行っている。そのサービスは、リエゾンサービスである。すなわちクラスを教えている教員たちへのサービス、働きかけの役割を担っている。

教員の中には、いままでろう学生と接したことがない教員もあり、ろう学生とどう接してよいのかわからない教員もいる。こうした教員に対して指導者は、働きかけをしていかなければいけない。もし教授や教員が、ろう学生をどのように教えたらよいのかわからなければ、オンライン上にクラスアクトというサイトがある。このサイトにアクセスして、サポートファカルティ部門の人たちとコンタクトをとることが可能である。

その他にも分野がいろいろある。教え方やコミュニケーションの取り方などができるようになっている。これによって指導員が教員を指導するようになっている。指導にあたっては、インフォメーションシートがあり、NTID もオンラインシステムでファカルティ部門に対して情報を提供するようになっている。もちろんこの情報は、ろうを担当する NTID の教員だけではなく世界中からアクセスがあり、ろう学生への教育の情報を提供している。PEPNet の人たちもこのウェブサイトを協力して、小冊子、ガイドブックを作り日本や中

国、ロシアなど世界などへ提供する事業を行うようにしている。

### 3. ベンチマーク結果とアカデミックサポートサービス

ベンチマーク結果を次に示す。

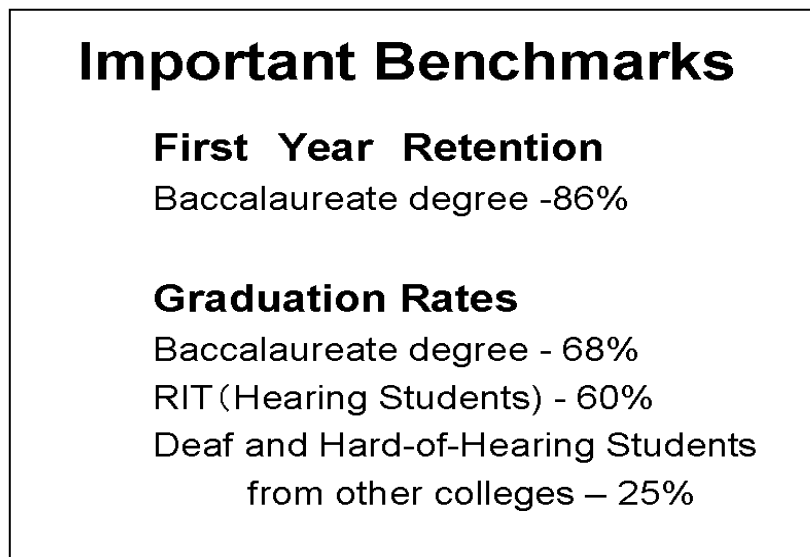


図2 ベンチマーク結果

このベンチマーク結果から、NTID から 86% の学生が学士をとるために学業の継続をしていることがわかる。そして 68% のろう学生は学士をもってしっかり卒業している。健聴学生は、このデータ結果から言えば卒業が 60% である。卒業は、ろう学生の方が率から言って高い。他の大学からのろう・難聴学生の卒業率は 25% である。RIT からは、多くの学生が卒業している。これは誇りであると言える。この数字は、アカデミックサポートサービスサポートが、学生にうまく反映されている証拠である。どのように RIT に入学できるのか。RIT に入学できる条件は、ろう学生も健聴学生も同じである。全国一斉のテストがありその結果で入学ができる。入学には、高校時代にとった成績表なども関係する。その他に高校からの推薦書などを見て、学生にあった学部配置することもある。

### 4. 学生の入学レベルとアカデミックサポートプログラム

学生の入学レベルは 3 つある。それは学士レベル、準学士レベル、学士コースに編入のための AAS (編入学) コースである。

入学した学生の中には、夏に特別なコースに参加をすることが必要な学生もいる。入学



許可を得た学生は RIT のこの 3 つのいずれかに配属されるようになっている。たとえばアメリカには ACT 試験と SAT 試験の 2 つの試験がある。そのうちの一つが採用される。RIT では、ろう学生の筆記能力に関しては、記述に関する筆記試験がある。その点数によってレベルが決まり、ライティングクラスに入ったりする。また、ろう学生の数学の能力についても調べられる。ろう学生の力に見合った配属がされる。RIT 内にはビジネススクールがある。RIT のビジネススクールに入るにしても、その条件に見合った条件がなければならない。学生は入学許可が得られたら、自分の専門学部に入るが、またその中で学力レベルにあったクラスに配属されていく。学士取得のプログラムで入学してくる学生には、オリエンテーションがある。このオリエンテーション時にろう学生は、特別指導の教員に会う機会がある。またその時にろう学生に対してアカデミックサポートサービスについて情報を提供がなされる。同時にろう学生のとるべきクラスや卒業までに必要なプロセスについても話をする。もちろん学生は、学生個々によって 1 年間のスケジュールは異なる。学生のスケジュールと指導員のサービスとがどのようにマッチするのかについても学生に話をする。たとえば、金融関係のコースに 4 つセクションがあるとき、どの教授がろう学生を教えることができるかを見る。そして学生と指導サービスが合致した一つを選ぶ。4 つのコースのうちの一つを決めた場合、ろう学生にそのクラスをとるように勧める。その理由は、先生に対して、サポートが行なわれているからである。金融関係のクラスは春、冬、秋クラスの 3 学期がある。指導員たちは、学生のために 2 つの学期を選ぶかもしれない。たとえば秋と冬、そしてあとの 1 学期は別なクラスや先生を選ぶかもしれない。したがって指導教員たちがどれを選ぶかをろう学生に伝え、どのクラス受講をとっていけばよいかを指導する。3 つの学期のすべてを選ぶことが可能ではないかということに関して、NTID や RIT にいる多くの学生に対して 3 学期のすべてを行うことは、なかなかできない。この大学はろう学生が多いが、他の大学はろう学生が 3 人とか 4 人とかで少ない。したがって少人数であればそのようなことに関して問題はない。RIT のようにろう学生の多い学校は、アカデミックサポート部門の人たちがより働かなければならないし、やらなければならないことが多くなる。ろう学生とサポート部門の指導員たちとで、このようなことを話し合い、ろう学生たちは 4 つか 5 つのコースをとることになる。アカデミックサポート部門の指導員は、手紙や e-mail などを通して、「私が指導員をしていますよ」ということをろう学生に伝え、ろう学生にサポート部門にくるように促している。また指導員も学生がくるのを待っているのではなく、学生がいるクラスに出向いていくこともある。そうす

ることで私たちが学生に対してしっかりしたサービスを提供していることを、知らせている。

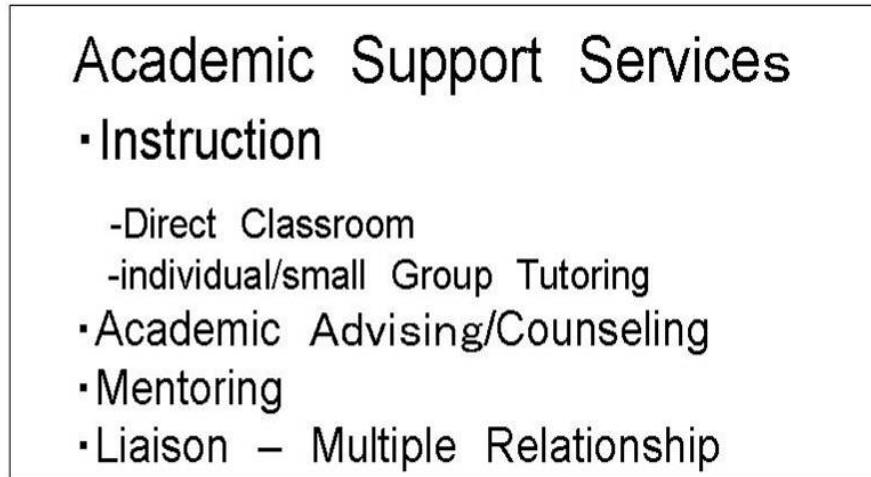


図3 アカデミックサービスの内容

また「チュータをしていますよ」ということを示すこともやっている、チュータは、ボランティアのようなもので、ろう学生にとって強制力はない。無理にも学生は指導員のところに行く必要はないのである。もし学生がサポート指導員たちのところに来た場合、そこでは、どのような宿題がでるのかを提供したり、コースにおける試験などや模擬テストを提供したりしている。このような提供はするが、授業内容を教えたり、指導したりすることはしない。コースに出てしっかり学習する責任は、学生にある。当然のことながら、学生に問題の答えを教えたりすることはない。責任は、学生にも教員にもある、アカデミックサポート部門にもある。学生たちは勉強する義務があり、アカデミックサポート指導部門はルールにしたがった指導をしていかなければならない。学生の中には異なった期待をもつ者がいないということはない。私たちが学生たちに行っていることは、学生によりよい学び方、どのように学ぶかを教えるのであって、答えをすぐに求めるような指導はしない。学生によりよい学習能力を身につけることで、学生たちが答えをすぐに求めるようなことはさせない。私たちが提供するものは、私たちがどのようにによりよい学習能力をいかに身につけるにかであり、どのように答えを出すのかではない。私たちの指名は、プロセスを教えるのが機能であり、答えを出すことではないと認識している。

## 5. リエゾンプログラムと学生への対応

コースの中には、参加点数システムというものがある。このシステムは、授業中に一番多く発言をした人にはポイントを与えるというものである。クラス内での発言だけではなく、学生が指導員に出向くことでもポイントを得ることができるようになっている。したがってこのシステムは、クラス内の学生とクラス外のチュータとの意識・協力によって行っている。アカデミックサポート指導者の仕事は、ろう学生に学習に関する情報を提供することであり、またろう学生たちがキャンパス内外で使える情報を提供することなどである。たとえば、ろう学生の中には、「こうしたことを知っていますか？」と答えを求めてくることがある。この時、アカデミックサポートスタッフは「あの先生にこうしたことを聞きましたか」、「他の先生に聞きましたか？」など質問をして、なるべく他の先生の意見を聞くように指導している。もしその学生が聞いていませんと言ったら、「あの先生に聞いて来なさい」と他に先生を指名し聞きにいかせることを促したりする。難しいのは、どこでどう判断を下すかである。アカデミックサポートスタッフが答えを出していい部分なのか、もし他のところで情報の提供ができるのであればアカデミックサポートスタッフたちは情報を出してはいけない。そのあたりのバランスが難しい。学生たちには、アカデミックサポート指導員たちが情報を与えないかわりに、自分の力で情報を見つけることができるようにしてほしい。アカデミックサポートスタッフたちは、学生たちには情報を提供するけれども、アカデミックサポートスタッフをあまりたよりにして欲しくないという希望である。学生たちの自主性に任せたいという方針である。アカデミックサポートスタッフは、学生をサポートしたいと思っているが、それ以上により学生たちには、より独立性、自主性を育ててほしいと思っている。自主性、独立心を促すというバランスが、ろう学生にチャレンジさせる部分である。チャレンジは大切である。

## 6. アカデミックサポート部門と教師への対応

コースを教えている教員たちに対してもアカデミックサポートスタッフは同じような期待をしている。たとえば、一つのクラスがあり、ろうの学生がたった一人だけ健聴学生の中にいるとすると、教師の中にはろう学生に対する教育は、自分に責任があるのではなく、アカデミックサポート部門に責任があると思ってしまう。しかし実際は、そうではない。ろう学生に対してアカデミックサポート部門は、サポートサービスはするが、実際にはろう学生を教える教育の責任は、アカデミックサポートのスタッフではなくクラスの教員で

ある。したがってその責任もその教員にある。教師の中には、ろう学生に対してどうしたらいいのかという質問をする教員がいる。アカデミックサポート部門は、こうして聞いてくる教師に対して、健聴学生に対してはどのようにしているのかを聞くようにしている。ろう学生のコースを担当している教師たちは、「こうして」、「このようにして」と答えてくる。結論としては、「聞こえる学生と同様にろう学生を考えたらどうですか」という提案をする。アカデミックサポート部門としては、コースを教える教師は、健聴学生もろう学生も同じレベルで受け入れることを期待している。ただアカデミックサポート部門は、ろう学生にとって、アカデミックサポート部門は、大切なバックアップ者であるという機能をもって存在している。ろう学生に対して言っていることと同じことを、教員にも言っている。教員も、アカデミックサポート部門を、頼りにして欲しくないという希望がある。教員にも、ろう学生と同様に教えることに対してより自主性や独自性をもってもらいたいと願う。もちろん教師の中には、ろう学生をすぐ受け入れることができる人もいれば、抵抗をもって受け入れない人もいる。世の中にはいろいろな人がいるからこれは仕方ないことである。

## 7. アカデミックサポート部門の使命

アカデミックサポート部門に関するポリシーや規律は、学校にあり、担当者が決めることはできない。この部門における情報提供に関しても、提供できるものとできないものがある。ただ、こうしたことはやっではいけないなどと経験にまかせてやっていることもある。この部門の仕事は、なかなか難しい面もある。ろう学生と健聴学生に対するアカデミックサポートサービスのボードに関しては、学校側が責任をもっている。そのボードに対してアカデミックサポート部門のスタッフが判断を下すことはできない。

学生が受けるアカデミックサポートサービスは、年ごとに少なくなっている。同じようなことが教員についても言える。ろう学生に対して、はじめのうちはいろいろな情報提供サービスを行っていくが、年数や回を重ねるごとにだんだんとサービスを受ける回数は少なくなってくるのが現状である。

---

## ・カウンセリングサービス

平井利明（静岡福祉大学 社会福祉学部 福祉情報学科）

---

### 1. メインストリームにおけるカウンセラー部門の概要

メインストリームに在籍する学生の諸問題についてカウンセラーのアナ氏がプレゼンテーションを行った。彼女は、カウンセラーとして、主として、イメージアートで授業を受講しているろう学生を対象にカウンセラーを行っている一人である。



図1 メインストリームに在籍する学生のカウンセリングについて話すアナ氏

メインストリームにおけるカウンセラーは、専攻している学部によって異なっている。カウンセラーは、ろう学生を支援するサポートプログラムチームの一部として協力的に働いている。またカウンセラーの所属は、ビジネス&コンピュータ学部でノートテイキングや通訳のサービスを提供しているところである。この部門は、学長的な人もいるし、チェアパーソン、アドバイザー、チューターがそれぞれの決まった学部にいる。そのほかにノートテイカーをコーディネートする人が一人いる。通訳者は、他の学部と一緒に働いているが、ここでは一人であり一緒ではない。カウンセリングは、1対1で行う。カウンセリングは、学習面や職業面、そして新入学生と2年生がどのように専攻を決めていくのかなども行う。カウンセリングは、特定の学部にも所属し、例えばイメージアートの先生方のカウンセリングをしたりする。

## 2. メインストリームに所属している学生の問題点

図2は、メインストリームに所属している学生の直面する問題をあげたものである。

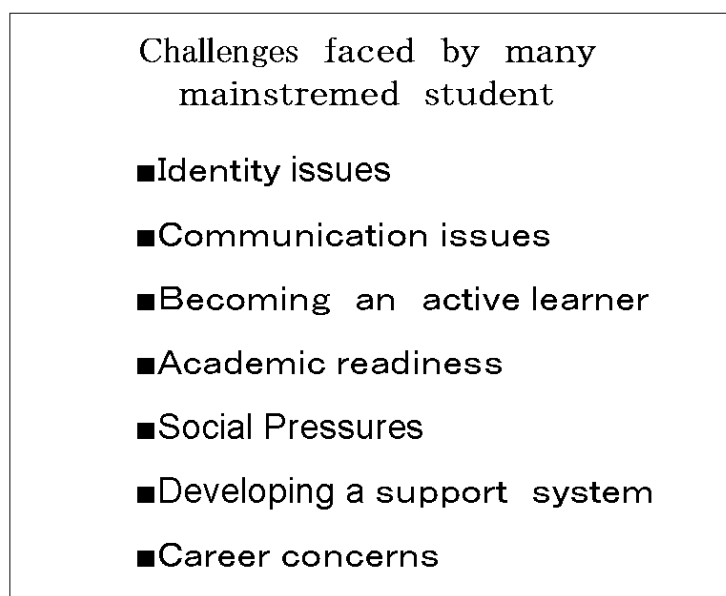


図2 学生が直面する問題

メインストリームに在籍する学生は、さまざまな問題を抱えている。ここでは、それらの問題について説明がなされた。なお説明にあたっては、在籍する学籍も、私たちの研修会場に同席している。

学生が直面する問題には、いくつかがある。はじめにアイデンティティである、アイデンティティとは、いったい自分は誰なのかといったものである。またコミュニケーションの問題もある。そしてどのようにしたら積極性のある学習者になっていくのか、学習に対してどのように準備をしていったらよいのか。学生たちは、環境からくるプレッシャもある。さらに学生たちは、自分自身の中で自分をサポートしていく自分をいかに作っていくのかなどがある。そして職業についての心配ごとや考えなければならないことがある。新入学生のほとんどは、考え方が若い。このため入学した段階では、自分では何になりたいのかわかっているつもりでいる。しかし学生生活を通してだんだんと年を重ねるにしたがって自分は将来何になりたいのかわからなくなってくる。中でも多くの学生は、アイデンティティの問題を抱えている。メインストリームにいる学生の中には、自分がどのグループに属しているのかわからない者もいる。たとえば、自分はろうのグループに所属しているのか、健聴学生のグループに属しているのか、あるいは口話を使う特定のグループに

所属しているのかなどである。こうしたことが、新入生に多くみられる。

### 3．在学生の話

直面する諸問題に関して、学校から見たものではなく、在学している学生について直接、この諸問題について質問し、答えてもらう形式をとった。同席したのは、クリストファという学生で4年生である。専攻は、パブリックポリシーである。彼は、最初にこの大学に入ってきたとき、デザインに興味があった。彼を担当したアナ氏は、彼の情報が入ったファイルをもっており、他の専門に移ってから彼に関わりをもっている。彼は、自分の育ってきた経験について話した。以下は、その体験談である。

「私の育った環境というのは、聞こえる環境の中で、ろうプログラムをとっている学生もいる環境の中にいた。ここのプログラムは、どのように話をしたら良いのかなどのスピーチセラピーなどがあった。このプログラムで、どのようにろうの人たちと話をし、助けていったら良いのかなどを学んだ。入学して、ろうプログラムのある学校に入った。そのプログラムを行っているろう学校は、自分の家から遠かった。しかし両親がいつも疲れている私を見て、大変だと思い、その学校のろうプログラムをやめるように私に促し、そしてメインストリームに移らせた。メインストリームの学校では、自分一人だけがろうの学生であった。メインストリームにいる間、すなわち、大学に行く前、いっさい通訳者や一人のノートテイクもいなかった。ずっと口話で授業を受けてきた。私は、常にひとりぼっちであった。もっとも苦労したのは、まわりに手話ができる人が誰もいなかったことである。このため私自身も「話す」ことを学ばなければならなかった。私自身、自分が小さな時は話すことができなかったけれど、メインストリームの学校で、スピーチの言葉もだんだんと力がついてきた。しかし大学生になるころには、ろうの世界に戻っていきたく感じていた。RITを選んだのは、その理由である。なぜならRITの環境は、聞こえる人とろうの人の両方がいる環境だったからである。ギャローデッド大学のように、ろう者だけの大学があることも知っていた。しかしギャローデッド大学で学習したいとは思わなかった。それというのは、私はずっと健聴学生と一緒に育ってきており、健聴学生と離れたくなかったということもある。ここに来てからすぐ、単語の手話を覚えた。まわりの人たちは、はじめ、私がろうではなく難聴学生だと思っていた。しかしろうだとわかったのは、補聴器をして聞こえてはいるが、私が難聴の人よりも人が話していることが理解ができなかったからである。また、私はずっと口話で育ってきたため、私がずっと難聴である

と思っていた人たちが多かったようである。現在は補聴器をしている。もし、補聴器をはずしたらまったく聞こえない。したがって、私は自分だろうであると思っているし、それが自分のアイデンティティだと思っている。この大学では、多くのろう学生と遊んだり、つきあったりしている。私が思うのに、難聴学生は、主に聞こえる人たちのグループと一緒に交流をしているように感じる。私は、ろう学生とも交流するし、健聴学生とも交流している。なぜなら、私はずっと聞こえる人たちのいる環境で育ってきているからである。



図3 アイデンティティについて話す学生クリstoff

多くのメインストリームにいる学生たちは、自分がどこのグループにいるのかわからない人がある。ろうのグループでもないし、難聴のグループでもない。その間を歩いている人が多く見受けられる。

ほかの問題は、まわりの人たちが、ろうである自分のことをどう思っているのか、ということである。自分の立場がろうというグループで見られているのか、自分はどう個人としてみられているのか。そのような問題も学生たちの中にはある。その他、起こり得る問題として、自分がろうの人たちとのコミュニケーションでうまくいっているのか、ろうの人たちから自分がどう見られているのかなどもある。

自分のアイデンティティを確立するとき、手話を使うとか、口話で話すことの問題についてであるが、私が高校時代のころ、健聴学生と話しているとき、私は、相手の口をよみとることができたが、自身自分の言いたいことをはっきり伝えることができないこともあった。たとえば、話し手が、ぐるりと背中を向けてしまうと、相手が何を言っているのかわからなかった。これは口をよみとれないから当然のことである。しかし手話を使うようになり、コミュニケーションの問題も徐々に解決するようになった。手話を使うように



なってコミュニケーションの問題も解決した。私は RIT が好きです。この大学における学習では、手話を知らない人でもいろいろと私に教えてくれる。ただ外部の人たちにこういったことを、どうやって伝えていくのが、重要な問題であり、この重要性を知らせることは大切なことである。」

クリストファの場合、はじめこの学校にきて手話ができなかったので ASL (アメリカ手話) を使っていた。このため学生たちからは、彼は、ろうグループに所属していないと思われていた。彼はこの学校に入り、学校に入りたての新入学生のころ、彼の友達というのは、ろう者であるけれども話すことができる、口話で話す人たちと交流をしていた。そのうちに手話、すなわち ASL (アメリカ手話) を使う人たちとも交流をするようになった。

他に起こりうる問題は、先生が自分をどのようにみているのか、思っているのか、自分に対してさまざまなことができないのではないかと疑っているのではないかと、などという問題である。

メインストリームにおいて次に起きる問題は、コミュニケーションの問題である。同じメインストリームのクラスにいて、ろう学生は、他の聞こえる学生とは少し壁がある。このため、自分は違ったグループにいるのではないかと、実際に聞こえる人たちのグループにおいてコミュニケーションで参加できているのか、そのような問題もある。もちろん、クラスの中でのコミュニケーションは、ろう学生の方がうまくいく。それは、コミュニケーションが簡単であるからである。しかしろう学生は、時には聞こえる人と仕事をしたい、活動をしたいと思っている。しかしどうしてもろうということ、話すコミュニケーションがバリアになってしまい、できないことがある。健聴学生の中には、ろう学生を敬遠してしまう人がいる。彼らは手話をつかうことができないため、ろう者を嫌うのである。

これは、彼の好むトピックである。彼のとっている学部、エンジニアの学部には、多くのろうの学生が多くいる。このため、通訳者を簡単に得ることができる。しかし私のいる学部であるパブリックポリシーというところには、一人しかろう学生がいない。このため通訳者もカバーできないでいる。たとえば、パブリックポリシーにおける学習の基本的な授業、これは、パブリックポリシーの分析の仕方のベーシックな部分である。しかしここには、ろう者は、一人しかいない。この大学には、11,000 人もろう者がいる。しかし通訳者がこれらの学生のすべての分野をカバーできるかというそれはできない。大切なのは、通訳者は、その学部の特殊語彙や専門用語を知っていなければならないし、専門

分野の知識がなければならない。たとえば、通訳者がアート関係の通訳者であって、経済関係の通訳をすることになったときには、それはできない。このため、こうした場合、この単語は手話ではどう表すのか聞いて通訳しなければならない。したがって通訳者は、特定の得意な分野がなければならないのである。

ノートテイキングは、重要である。あるところでは、彼の経験では2時間、ノンストップの講義があり、その時依頼したノートテイカーが書いたのはたったの2ページだったということがあった。それに対して、ノートテイクを依頼したろう学生はすごく驚いた。そして、いったいノートテイカーに何があったのかコーディネータに話したことがある。ノートテイカーは、こうしたことではその質が大切である。ノートテイカーは、教員と学生が何を話して、学生が教員に何を質問したのかをしっかりと聞き、ノートテイクしなければならない。ノートテイクは、試験にも関係してくる。

いろいろと問題があったと思われるが、クリストファは、カウンセラーのところに行った。その時にカウンセリングがどのように回答をしてくれたのか。どのように助けてくれたのか、クリストファやろう学生にとって問題となる。この件に関して、カウンセラーのところに行ったときの状況について説明した。カウンセラーは、「ああいうことはやったの?」「こういうことはしたの?」ということ聞いてきた。学生がカウンセラーのところに行ったとき、ろう学生とカウンセラーが何かしっくりいかないときに、カウンセラーは、たとえばチュータとか、別のサービスのところを紹介したり、あるいは学生のニーズにあう場所を紹介したりする。それは、学生が相談にいったカウンセラーが回答を出せなかったり、手助けができなかったりしたときである。他のカウンセラーのところいき、話をしたりしても、ろう学生がもってきた問題をすべて解決できるわけではない。

ところで、メインストリームから RIT に入った学生と、NTID のろう学生と違ったカウンセラーがいるのかということであるが、カウンセラーは、RIT と NTID とでは、カウンセリングの内容が異なる。NTID に着目したカウンセラー、そしてもう一方は NTID をのぞいたカウンセラーである。ただ、NTID に属している学生、NTID 以外に属している学生など両方ともに関わっている者もいる。アナ氏は、その一人である。

## ・ 学生生活

平井利明（静岡福祉大学 社会福祉学部 福祉情報学科）

### 1. はじめに

学生生活については、ダイアナ氏とドクターローゼンイールド氏が行うプレゼンテーションを行うとともに、ろう担当のディレクタのウエンディ氏、学生生活チームのディレクタであるケリー氏、学生生活チームの一員として活動しているダイアナ氏が出席し、プレゼンテーションに加わった。

学生生活支援プログラムでは、メインストリームのろう学生が、キャンパスの中でどのように生活しているのか、そしてその時に起こりうる問題に対してどのように取り組んでいるのかが話題であった。話題は、メインストリームの学生だけではなく、NTIDに所属しているろう学生にも関係している。



図1 プレゼンテーションを行ったスタッフ

### 2. ドミトリーとドミトリーにおけるろう学生生活問題

メインストリームのドミトリーにおいてろう学生は60%、残りが健聴学生の40%である。学生生活活動プログラムにはミーティングや学生生活規則遵守の活動、ドミトリーにいる学生の支援などがある。ろうの人も私も同じような仕事に携わっている人がいる。女性を対象にした活動で、たとえば女性に対するセクシャルハラスメントなどがある。教育におけるディスカッションでは、違いを明らかにするということがある。活動には、学

生がクラスのなかだけではなく、学外でも多くの利益の支援を受けることができるようにすることも包含されている。

何がメインストリームのろう学生に必要とされるのか。それは、ろうの学生に必要とされるものは、健聴学生に必要とされるものとまったく同じものである。多少の違いはある。ろう学生にとっては、よりチャレンジしなければならないことがある。キャンパス内ではいろいろなコミュニケーションが使われている。ASL を使う人、ASL 使い声を使わない人、ASL をまったく知らない人、そしてろう者であっても手話を知らない人、こうした人たちのコミュニケーションの多様性は、チャレンジとなっている部分であり、一つの問題である。健聴学生と類似した問題点は、どのように学校生活になれてくるのかである。たとえばこれまで家から学校に通っていた生活と、家での生活とドミトリーの生活は違う。その場における生活の変化である。高校時代には両親が自宅でいろいろやってくれている。このため自分では何かをしなければならないということにはなかった。しかし大学に入ること、自分ですべてをやっていかなければならない。ここに問題が発生する。学生の中には、いつホームワークをやっているのかわからない者もいる。時間をどのように使ったらよいかかわからない学生もあり、学生生活支援室の助けが必要である。その他交友関係をどう作っていったらよいか、ルームメイトとどのように関係をもていったらよいか、同じフロアにすんでいる人たちとどのようにいい関係を作っていったらいいのか、チームワークをどのように保っていったらよいかなどでさまざまである。さらに学生の中には何を食べたらいいのか。何を作ったらよいかかわからない。1週間ずっと、ハンバーガーやフライドポテトを食べたりしていやになっている学生も中にはいる。このような問題は、ろう学生でも健聴学生でも両方に起こる問題である。ろう学生だけに限って言えば、どのように他の学生と交友関係を保っていったらよいか、ろう学生どうしや健聴学生とコミュニケーションをどのようにとっていったらよいか問題となったりする。最大の課題は、ろう学生の中には殻に閉じこもってしまう学生がいることである。高校時代も通訳者を通してしかコミュニケーションしてこなかった学生である。このため他人とのコミュニケーションがないため自分自身を殻の中に閉じ込めてしまうのである。ろう学生の中にはずっと両親やアドボケータやアドバイザー、カウンセラーなど、自分のかわりになって自分を主張してくれていた人たちがいた。しかし大学に入ってきて自分ひとりなり、孤独感を感じてしまう者がいるのも事実である。大学生活では、自分自身がろう者であることを主張していかなければならないし、ろう者としての自分の権限を主張していかなければ

ばならない。このことは、ろう学生にとってはチャレンジなことである。

ドミトリーでは学生のスタッフも雇用している。スタッフ中にはろう学生もいる。ドミトリーの中でミ・ティングを行う場合には、コミュニケーションで少し時間がかかったりする。スタッフは、全員手話ができる。ろう学生に話している時と健聴の人と話をする時とでは伝え方やコミュニケーションの仕方がちょっと異なる。正確に、明確に伝えるという点で時間がかかってしまう。ドミトリーでは、学生の個人個人にあったニーズを見いだしていくのも大切な仕事である。なぜなら学生が育ってきた環境はそれぞれ異なり、それぞれにあったやり方があり、学生からのニーズがある。それぞれに合ったやり方が大切である。

ドミトリーの学生生活でかかえる問題は、学生がドミトリーのルールにしたがわない行動をとる学生が中にいるということである。これはアメリカだけではなく、国際的な問題である。学生生活プログラムの目的は、平穏な生活ができることである。学校を卒業した後、職業にも役立つようなことを寮生活で身につけていってほしいと願っている。このために学生生活プログラムがある。幾人かのろう学生の中には、かつてろう学校にいた人と一緒になって行動する。そうした学生たちは、ろう学校にいたという関係から友人関係ができていく。そうしたことは、友人関係を作ろうと積極的な行動である。友人関係を支援するためにも学生生活支援プログラムがあり、コーディネートも行っている。学生生活支援プログラムは、現在うまくいっている。

学生生活でも悪い面がある。学生の中には、孤立した中で育ってきている者もいる。こうしたろう学生は、ろう者にとって大切な情報、有益な情報をこのために失ってきているのである。健聴者であったならば、いろいろな情報を得てきているけれども、ろうであるがために情報を得ていないのである。こうした場合、たとえば、ろう学生が健聴学生と交友関係をもっていれば、得られる情報は多くあると思われる。しかし孤立した中で育ってきた学生は、交友関係をもてない、なくしてしまってきている、それが問題となる。学校生活プログラムで望むものは、多くのろう学生が健聴学生と友人関係などをもつこと、ろう学生と健聴学生が交友することである。交友関係をもつことによって、学生たちが今まで逃してきた情報をこれから得てもらいたいと望んでいる。学生たちをコントロールし、学生生活がうまくいき、同人に成績も悪くならなようにする。これも学生生活支援プログラムの仕事である。

### 3. ドミトリーにおけるろう学生と健聴学生との関係

ドミトリーは、12階あり、半分に区切っている。その内のいくつかの階は健聴学生のためのもので、いくつかの階はろう学生だけのためである。したがってあるフロアは、ろう者の学生だけであったり、いくつかのフロアは健聴学生だけだったりする。ろう学生と健聴学生と一緒に住んでいるフロアもある。ろう学生と健聴学生とを分けているのは、学生にとっての学生生活の心地よさというのがある。ろう学生の中には、ろう者だけで一緒に生活したいという者もいる。また今まで育ってきた環境が、健聴者の学校であるメインストリームの中で育ってきている人もいる。ろう学生にとってそれぞれ育ってきた生活環境が異なっているため分けている。ろう学生には、ろう学生のルームメイトがいる。健聴学生には健聴学生のルームメイトがいる。どうしてろう学生にろう学生のルームメイトと一緒にさせるのか、あるいは健聴学生と健聴学生のルームメイトをなぜ一緒にさせるのか。何年前、ろう学生と健聴学生と一緒にしていた時期があった。というのはろう者と健聴者とを差別をしないためである。しかしその後、学生たちからフィードバックがあり、お互いが嫌いだったということがあった。ろう学生とろう学生であってもお互いがうまくいかなかったというケースも多い。今は、学生からのリクエストがなければろう学生はろう学生をルームメイトとしている。希望すればろう学生は、健聴学生と一緒にの部屋でルームメイトをもつことができるし、またその反対に健聴学生がろう学生のルームメイトをもつこともできる。しかしろう学生が大学に入学することで家族から離れてしまい、さらに健聴学生とコミュニケーションの問題をもつことはろう学生にとってチャレンジとなってしまう。このためこのチャレンジを少なくするという意味で、ろう学生と健聴学生をできるだけ一緒にしないようにしている。もし少人数のろう学生に関してマネジメントであればこのようなことは考えない。おそらく、ろう学生の少ない他の大学であれば、このようならう学生と健聴学生を分けることなはしないと思われる。

### 4. ドミトリーにおけるスタッフと学生生活プログラム活動

ドミトリーには27人のスタッフがいる。そのうち60%がろうで、40%が健聴である。すなわちスタッフのうち17人がろうスタッフで10人が健聴スタッフである。学生を担当するスタッフの比率は次のようになる。

Hearing	学生	スタッフ
	34	: 1
DEAF	学生	スタッフ
	24	: 1

学生生活プログラムで、現在行っている活動のひとつは、学生どうしをマッチさせることである。自分と同じような環境で育った学生を探したり、自分が尊敬できたり、真似たり、比較できたりする学生で、その人から学びとることができるような学生をマッチさせることである。これによってリーダーシップももった人間に育つことを期待している。また他の部門で必要があれば、そうした学生たちを紹介し、訪ねてきた人たちのニーズに応じられるようなマッチアップを作りだしていく。

学生同士のマッチアップがなぜ大切なのか。同じ環境で育ってきた学生と一緒にさせることはすごく大事なことである。それはよい結果を得るものとなっている。たとえば、スペイン系のろうの学生がいるとする。この時、私たちがその学生を促してスペイン系の学生どうしと一緒にするようにする。新入学生たちは、入学して間もないころは交流関係を築くのが難しい。同じバックグラウンドで育ってきた人たちを私たちが仲介し、一緒にさせることで、スムーズなコミュニケーションができるようになる。そして交友関係が築けるようになる。これもプログラムのひとつの支援である。

お互いにどのようにサポートしながらサービスを行っているのか。大切なことは、それぞれの学生をそれぞれのデパート、すなわち学生の問題を解決するためのさまざまな部署に追いやってしまうことではなく、学生個々、お互いに違ったサービスをここのスタッフが与えていくことである。そしてスタッフがお互いに協力しあってサービスを与えていくことが大切なことである。個々独立して、たとえば××の仕事は　　さん担当といったようにサービスを個々別々に行ってしまうと、スタッフはその分野のスペシャリストになってしまう。そうするとそうしたサービス必要としていない学生たちは、学生生活支援部門にこなくなってしまう。スタッフがお互いに協力してやっていたら、スタッフがお互いに何をやっているのかもわかる、必要であれば学生をあっちの部門からこっちの部門にこさせ、サービスをすることが可能となる。たとえばキャンパスの中に女性センタがある。この女性センタで新しいディレクタを探しているときがある。この場合女性センタで働いている人たちだけでディレクタを探すのではなく、他の部署でも探すように互いに協力関係

をもっている。他の人の時間を使ってディレクタを探すというのは大変恐縮であるが、新しくディレクタとなる人は、ろう者に関して直面する知識がなければならない。ろう学生を担当する適切な人を捜すためには、ろうを理解している人であり、これから協力関係が必要となる。適切な人材を選択には、ろうに関係しているサービスができる協力関係が大切である。

## 5. ドミトリーについて

学生たちは、どのようにドミトリーで生活をしているのか。学生たちの中には RIT で契約しているホテルで生活している者もいる。特別な家で、スペシャルハウスとかインタナショナルハウスと呼ばれている家で生活している者もいる。その他にもグループが滞在できるような家も提供している。その他にもキャンパス内にアパート、キャンパス外にアパートがある。スタッフメンバは寮に滞在し、できるだけ学生を監視するようにしている。学生生活を見守るには多くの監視が必要である。スタッフはキャンパス内にあるアパートにも住んでいる。ただキャンパス外に住んでいる学生の監視をしてない。

スペシャルハウスというものは、同じ興味のある、同じ学部の人たちが集まって生活しているハウスである。たとえばコンピュータ関係であれば、同じ学部に所属している学生たちが借りて生活できるような場所であり、家である。またエンジニアを専攻している学生たちが一緒に滞在できるような家である。

RIT インターナショナル（以降 RIT インを記述）は、RIT が学生に提供している建物でホテルとまったく同じである。一部屋に 2 人で学生が生活する。ホテルは、学校から 3 マイルくらい離れている。アパートが足りないとか、部屋が小さいからという理由でホテルに滞在したいという学生もいる。この RIT インは、大きな部屋があり、プールもある。このためこのホテルを好んで利用する学生もいる。RIT には 15,000 人の学生が生活しており、キャンパス内のアパートとドミトリーでは学生が宿泊・滞在するには足りないというのが現状である。かつて学生たちは、キャンパス外でアパートを借りることをしなかった。数年前にある男性が私たちにホテルを寄付してくれた。それが RIT インである。今では RIT インをコンファレンスに使ったり、学生の宿泊する設備に使ったりしている。RIT インは、学生の生活場所のオプションとなっていると言える。

ところで RIT に入学するろう学生に、大学はドミトリーで生活することを薦めているのかということである。ドミトリーで生活するのは、必然的なものとなっている。新入学生



の中で 10 マイル以内で生活している学生たちは、ドミトリーで生活する必要はない。しかし 10 マイル以上離れたところに住んでいる学生たちは、ドミトリーで生活しなければならない。ドミトリーで生活することを強制している理由は、1 年生から寮生活でさまざまなことを学ぶことができ、ここで学ぶことによって卒業につながると信じている。このための措置であるとも言える。



図2 RIT におけるドミトリーについての歓談風景

## 6. ドミトリーでの憂える問題

ドミトリーではいくつかの憂える問題がある。そのワースト1は麻薬や薬、アルコールである。次は、セクシャルハラスメント、これは悪質メールを送ったり、いじめたりすることである。たとえば仲間の学習の邪魔をしたりすることもこの範疇である。3 番目は、「うつ」になってしまうことである。「うつ」によって授業にも出なくなってしまう。自信をなくしてしまう学生もいる。成功しようとする前向きな気力を無くしてしまったりする。そのような学生の兆候があらわれたら、すぐ学生に働きかけるようにしている。もし学生のような兆候が何回か見られるようであれば、スタッフから学生生活支援室に報告するようになっている。カウンセラーが問題学生のところに電話をかけ、出向き、カウンセリングするようになっている。

## 7. ろう学生と健聴学生がよい関係をもつための活動

ろう学生と健聴学生との間でトラブルが起きたとき、健聴学生に対して障害に対する理

解を図る、あるいは健聴学生に障害理解の啓蒙という点である。現在は、学生からの希望がない限りろう学生と健聴学生を一緒の部屋にしないようにしている。フロアによっては、ろう学生の二人のルームメイトが住んでおり、隣に健聴学生が二人のルームメイトが住んでいるということもあり得る。ろう学生と健聴学生とトラブルが発生しないように、オリエンテーションではビデオを見せている。そしてろう学生と健聴学生の生活がどのように違うのか、ドミトリーの生活がどのように違うのかをビデオを通して知らせて理解を図っている。そのビデオであるが「2つの世界」という。ビデオの中では、ろう学生と健聴学生が同じキャンパスで大勢、学生生活を送っている。ビデオの中で、ある健聴女子学生が「はじめてこのRITで授業を受けたとき、先生のご講義を見ずに、通訳者をみていた」などというエピソードも盛り込まれている。もちろん健聴学生の中にはRITにきてはじめてろう者がこの世の中にいることを知り、そしてコミュニケーション手段としての手話を知り、それに興味をもち、そこから手話を習いはじめる学生たちもいる。また、ろう学生に対してなんら意識もせずに、手話やその他の通訳手段にも興味をもたないま生活をしている学生もいる。ろう学生と健聴学生のお互いの文化の違いや学生生活の違いを知るオリエンテーションは、学生たちには、必ず行われなければならないことである。

オリエンテーションは、実際の授業が始まる1週間前に強制的に行っている。オリエンテーションでは、すでに前述の「2つの世界」というビデオを見せたり、学生どうしが住んでいるフロアでミーティングを行ったりする。新入学生がとらなければならないコースの中には、ろう者の紹介をしたり、ろう者の学生生活やろう文化を知らせたりすることがある。強制的なオリエンテーションは、9月の入学の時期におこなっているが、冬学期、春学期に入ってくる学生については、人数が少ないため、このようなオリエンテーションは行っていないのが実情である。

ろう学生と健聴学生との関係においては、毎週水曜日にろう学生が健聴学生に手話を教えるなどの活動をしている。この活動は、学校の授業単位にはならない。ろう学生は、手話を健聴学生に教えるためのトレーニングを行っており、学校側はろう学生が健聴学生に手話を教えることに対してお金を払っている、手話を教えるろう学生にとっては、教えることでリーダーシップ育成に役立っている。また健聴学生にとっても、ろう学生を理解するよい機会と経験となっている。なお、ろう学生が手話を教えるプログラムは、大学が用意しているものではない。しかし教え方のトレーニングは行っている。

---

## ・職業指導

平井利明（静岡福祉大学 社会福祉学部 福祉情報学科）

---

### 1．はじめに

NTID における職業指導サービスについて、ジョン氏とリンダ氏の2名がプレゼンテーションを行った。ジョン氏とリンダ氏は、職業アドバイザーである。ジョン氏は、コンピュータエンジニアの学生と一緒に働いており、NTID でコーディネータの仕事もしている。リンダ氏は、NTID でカウンセラーをやっており、NTID のコンピュータを専攻している学生のアドバイスを行っている。その他ビジネス関係の仕事やコーディネータの仕事もやっており、そこでは報告書作成や統計処理などを主に行っている。



図1 プレゼンテーションを行うジョン氏とリンダ氏

### 2．職業指導における学生サポート・面談

職業指導では、学生と1対1のアドバイスを行ったり、履歴書の書き方を指導したり、ワークショップの提供とその活用の仕方を教えたり、ウェブサイト上に必要な情報の提示もしている。

まず学生へのアドバイスは、秋に入学する以前の夏に学生と会う。そこではカウンセラーの仕事をする。職業指導担当者は、新入学生とその両親とも会って話をする。そのときに話しをして、学生が就職指導担当部門と協力的に動くことができるのかを話しあう。話し合う内容は、以下のようなことである。

- ・学生がどのような職業につきたいのか
- ・どこの地域で働きたいのか

- ・職業につくにあたってコミュニケーションについてどのような問題が発生するのか
- ・職業についた場合の滞在場所について
- ・さらに学生と話すことで大切な事項として次のようなことがある。
- ・学生自身がろう学生であることを認識して、自分をどのように主張できるか、
- ・職場における人間関係の中で活躍できるのか

学生は、一人ひとり性格、生まれ育った環境など違っている。また学生一人ひとりが必要としているものが異なる。ただ大学として一人ひとりにあったサービスを提供しようとしている。このため方針として、個人に重点を置いている。またさらに学生と話す内容に、学生は職場で直面する問題をどのように解決していったらよいのか、職場でどのような質疑応答に対応したらよいのかなどについても話をする。こうしたことは、職業指導部門担当経験のある先輩としてアドバイスを行っている。

### 3．職業指導部と指導を担当する自分について

この部は NTID に所属している。人数は、8 人である。何人かは、この部に所属するとともに特定の学部の専門に所属している。たとえば、専門分野であれば美術関係であったり、コンピュータや科学関係などの特別な分野に携わったりしている。NTID には 1,200 名のろう学生がいる。一人のカウンセラーは、100 人程度の学生を担当している。プレゼンテーションを行ったジョンは、RIT の卒業生であり、マスタの学位もとっている。彼が学生時代、この職業指導サービスを使いはじめたのは卒業前 2 年であった。卒業近くなってから残りの 2 年でこのサービスを活用したのはちょっと残念なことであったという。というのは、学士レベルで会社を探すことは大変なチャレンジであったということである。健聴学生である他の学生たちは、自立的であり、多くのことにチャレンジしている。ろう学生の彼にとって何がチャレンジかというと、ろう学生がアイデンティティをもち、職業意識をどうもっていくのかであった。それは健聴学生くらべるとチャレンジなことである。チャレンジは、健聴学生とろう学生とは違う。彼は、5 年かけて学士を取得したという。この職業指導サービスを利用していればもっと早く職業につけたと思っている。このサービスを使わなかったために 5 年もかけてしまったという。

例えば、もしこのサービスを受けていれば、いろいろな人たちからの助けを得られたし、職業を探すにあたって、会社とどのようにコミュニケーションをとったらよいのかに関して、答えることができたのではないかと思われる。このサービスを利用していれば、自

分がろうであることを主張して、どのようにコミュニケーションをとっていくのかを企業等に説明ができたという。このサービスを知ってからさまざまな面で助けられたとのことである。別の例として、企業からのインタビューを受けた際に、どのような援助が必要であるのかを問われた。職業指導サポートサービスにきて、その問いに関してどのように答えればよいかの解答を得た。もしこのような NTID のサービスがなかったら、彼は現在ここにはいなかったのではないかという。彼がどのようにして仕事を見つけたかという、投資関係の仕事をもつ人が NTID に来ており、その時にインタビューを受け、仕事を得ることができたのだと。

ところで CO-OP についてである。CO-OP の意味は、学生個々が選んだ関係分野の仕事を見つけるのを手伝うことである。RIT では 10 週間の体験学習が授業で課せられている。この間、学生たちは、スーパーバイザの監視下であり、定期的に職業指導部門のメンバーが、学生たちが体験学習している企業に訪問し、職場でどのように働いているのかをチェックをする。学生が RIT に在籍している間に、多くの学生は、2 ~ 3 の別な CO-OP が必要になることもある。

CO-OP は、次のような点で学生にとって有益である。

- (1) RIT で学んでいることが素晴らしいことであるのかどうかを見極めることができる。
- (2) 体験学習によって職業を選択する段階でこの経験が生きる。この経験を履歴書にも書くことができる。

CO-OP は、学生が自由に選択できるサービスではなく、ほとんどの RIT の学生が CO-OP を履修することが義務づけられている。これを履修することは、学生にとってよい経験を積むことになるし、重要な機会でもある。

NTID の CO-OP のプログラムを使って、彼は、最初の職業を得た。彼は、クリデンシヤルという会社に就職した。そこで 3 年間経済アナリストとして働いた。どうしてこの会社に入ったのか。はじめはお金がすべてであると思っていたが、実際そうではないことがわかり職業をかえた。そして RIT の大学院に入学した。18 ヶ月間 NTID で働く機会があった。NTID の中で働く中で考え方が変わり、雇用主と学生がどのようにわたりあっているのがよいのかという教育をしたい、それに関係する職業を得たいと思った。それで現在、この職場にいる。この職場にも直面している課題もあるが、良い点もある。

#### 4 . プレゼンターであるジョン自身の話

初対面で言葉を話すので、私は、ジョンが健聴者であると間違ってしまうほど会話が自然であった。しかし通訳者が私たちとジョンとの間に介することで、彼がろう者であると理解した。彼個人についての話を聞くことができたので、ここに掲載する。

「私の聴力は、左80デシベル、右85デシベルである。どのようにアイデンティティを確立したのか。私は、生まれた後、はしかに罹りろう者になった。両親は、2歳になるまで私がろうであることに気づかなかった。私がろうであることがどのようにしてわかったのか。私には妹がいる。妹と一緒におもちゃを使って遊んでいた。その時、犬がほえていた。その声で妹は後ろを振り返ったが、私は何も反応がなく遊び続けていた。そこで両親は、私がおかしいのに気づいた。父親は「ジョンがおかしい。耳が聞こえないのでは」と心配した。しかし母親は、「問題ないよ。ジョンはなんてたって男なんだから、男の子は言葉を話すのは遅いし、言葉なんて後で覚えるもんだよ。」とって父親の言葉にとりあわなかった。



図2 ろうの自分について話すジョン氏

母は、私がろうであることを認めたくなかったし、夫が自分の子供がろうであることの疑いに納得しなかった。そこである時、父親はある実験を私にした。私と妹はリビングルームで遊んでいた。そして父親は、別の寝室ですごく固い床の上に立った。父親は、トレイの上いくつかのコップ載せて、その場所にもっていき、そしてトレイを思い切り強く床に叩きつけて、落とした。部屋の床はすごく堅く、叩きつけたらすごい音がしたはずである。私は何も聞こえなかった。しかし妹は聞こえた。このことで母は、私がろうであることに納得した。母は、新聞で聴覚欠損が多く扱う医者を探し、そこに私を連れていき、

そこで聴覚のテストを受けさせた。ここで私の両親は、2つの選択をせまられた。一つは話すこと、一つは手話である。両親は、私が話すことを選択した。

ろう者であるからコミュニケーションは、ASL(アメリカ式手話)か話すかの選択である。話すこと、話せるようになることは、とても大変な作業であった。ろうの私にとって話すことを勉強することは本当に、すごく大変なことであった。何年何年もかかって話すことを身につけていき、話し方を学んでいった。ご存知のように映画館に行けば、ろうであっても音がでていることはわかる。しかし聞こえないため映画の内容を理解することは難しい。聴力デシベルは左耳が80、右耳が85である。右耳に補聴器をつけても、映画の音声は聞こえない。このレベルでは補聴器をつけても理解できないのである。もし私の聴力はどうなのかと聞かれたら、深刻な聴力障害であり、全く聞こえない状態に近い。この意味では厳しい状態の聴力である。私は、現在通訳者が話していることは聞こえる。しかし聞こえるだけで何を言っているのか意味がわからない。これが現在の私です。」

#### 5. 履歴書とカバーレターについて

カバーレターは、履歴書と一緒に添付して会社にする文書である。履歴書に書いてあることを補足するためのものである。カバーレターの内容は、会社の求人情報をどこでみつけたのか、インタビューに出かけることができるのかなど書いて会社にする。職業指導部門では、履歴書とカバーレターの書き方について学生に対して指導サービスを行っている。時には履歴書やカバーレターの書き間違いやスペルの間違いのチェックをしたりもする。また言葉の使い方についても指摘し、間違いを訂正する。このようなことは、日本において学生に対して行っていることと同じである。職業指導部では、このようなサービスをしたり、学生の手助けをしたりしている。学生たちが書いた履歴書やカバーレターに、もし間違いがあると会社側は雇用しないということがわかっている。したがって、正しく間違いなく書くことが大切なことであると認識している。

また面接の時の技術についても指導している。面接は、「練習」、「練習」、「練習」。ただそれだけである。何回でも練習を行う。本番を想定して模擬面接も行う。模擬面接では、通訳者をつけて行う面接と、通訳者をつけない面接の2つの方法で行っている。模擬面接の方法はいろいろとある。たとえば1対1で行ったり、時にはコンピュータを利用して行ったり、あるいはウェブカメラを使って行ったり、ビデオリレーシステムを使って行うこともある。

職業指導部では、学生のために仕事をみつけることはしない。学生と企業の中立的な立場で考えている。この大学の職業指導部は、学生と企業との間に位置している。職業を見つげるためのトレーニングを行うのが役割である。CO-OP は、インターシッ的に行う。それでは CO-OP における仕事はどのように見つけるのかというと、大学とアメリカ国内の企業と提携して、学生は、学校と提携している企業に行く。

職業指導部は、学生に就職先の斡旋はしないが、学生が自ら仕事をみつける手段や方法を教えることがサービスである。学生が就職をさがすにあたり提携している企業のリストがある。またかつて学生が就職した企業のリストがある。こうしたリストを学生に提示する。しかし学校側が学生のために自ら動いたり、会社に出向いたりはない。学生が自ら自立心をもって行動すれば、サービス料を減らすことができる。そうすれば学費も安くなる。学生には、自ら独立的に行動できることを期待している。

ところでCO-OPプログラムとインターンシッププログラムとの違いはどこにあるのか。ほとんど同じことである。しかし多くの場合、インターンシップの場合は学生に支払う報酬は無料ということで企業と提携している。CO-OP は有料でトレーニングができる。報酬という点を除けば実施している内容は、同じである。職業指導部の担当者は、企業と学生との間にたち、もし学生と企業がうまく出会えばそれ以上学生たちを指導することはしない。あくまでも仲介役に徹している。このため面接において「練習」、「練習」、「練習」と何回でも回を重ねて行うことが重要である。学生がいい面接をしなかったら、会社は学生を採用しないのであるから。

## 6 . 面接指導ビデオについて

面接指導にあたっては、ビデオを用意している。というよりも学生が実際に模擬面接をしているところをビデオで録画し、録画したビデオを見て、どこが悪いのかを学生と職業指導部の担当者と研究するように仕組みになっている。これによってインタビューの仕方や指導の仕方を教える。面接指導にあたっては、会社と学生、それに通訳者を交えた模擬面接である。ビデオからの分析は、どこが学生の面接で間違っているのか、改善しなければならないのかという点である。

ビデオの一場面から私達に行ったプレゼンテーションを以下に示す。

会社の面接試験の最後で「他になにか質問がありますか？」に対して、多くの学生は「他に質問はありません」と答えてしまう。あるいは質問してはいけない質問を会社側にした



りする。実際に学生に面接が終わったときに聞くと、間違った答えはしていない、間違った質問はしていないという。しかしビデオで録画して見せることで、面接で誤った答えをしていたり、間違った接し方をしたりしていることが発見できる。ビデオにとっておくことが学生に提示する確実な証拠となる。



図3 模擬面接のプレゼンテーション



図4 模擬面接録画面

ビデオの一場面を次に示す。

面接官：「職業に関して柔軟ですね。他の人と仕事をするときあなたはチームワークをどう思いますか？」

面接学生：「私は、協力的であると思っています。それに私は前向き志向です。コミュニケーションについても積極的に取り組んでいます。」

面接官：「私の会社にはろうの職員がいないのですが。コミュニケーションに問題はないでしょうか？」

面接学生：「私は口話ができます。私は忍耐力があるので、筆談によることも大丈夫だと思います。それに E-mail アドレスも持っているので、会社の人たちとメールのやりとりもできます。ですから私がろうであることが、私がこの会社で働くことに問題がないと思います。」

面接官：「どれだけの給与をのぞんでいますか？あななの希望するポジションはどこですか。」

面接学生：「あまりお金は関しては関心がありません。」

インタビューを行っているビデオの登場人物は NTID の職員である。質問は簡単な質問ではない。あえて難しい質問を与えて学生に答えさせている。ビデオテープで模擬面接が

終わったあと、学生はビデオをみながら良い点、悪い点、ボディランゲージの仕方などの分析を行う。この練習が本番に向けて役立つものとなる。模擬試験では、職業指導部の担当者たちは、学生には多くの間違いをしてもらいたいと思っている。間違えることは悪いことではない。模擬面接で多くを間違えると本番の面接で多くの間違いをしなくなる。本番の面接では、間違っただけで済む。ビデオ録画による面接指導は、最善の方法としている。

## 7. ワークショップについて

学生たちが仕事を探すことに関してもワークショップを提供している。CO-OP を体験した学生が、何が大変だったのかその体験を話す。体験学習をした学生たちがパネルディスカッションを行うのである。CO-OP で何が役立ち、何が役立たなかったのかなどパネルディスカッションで討議をするのである。

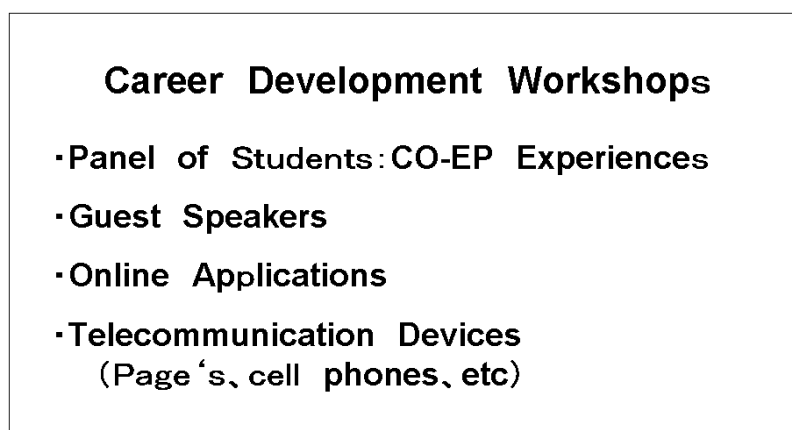


図5 提示された職業開発のワークショップ

またゲストスピーカーを学内によび、講演を依頼している。多くの会社が今、オンラインをつかって求人募集をしている。オンラインでの求人活動の機会は1回しかチャンスがない。1回しかない求人募集のチャンスをいかに逃さないようするか学生に指導する。そのためにこのチャンスを大切にするための最善のサービスを行う。その他、ワークショップではテレコミュニケーションについても指導する機会を与えている。あらゆるテレコミュニケーションの使い方、利用のしかたを教える。これは、すべての学生がすべてのテレコミュニケーションの方法を知っているわけではないためである。

大学では、HP で2つのカテゴリーを提示している。仕事をさがしている人と雇用主である。HP で学生たちは、仕事を探す「JOBSEEKER」を見る。さまざまなトピックが提

示される。WEB の中には、アメリカ国内の求人情報のサイトがあり、このサイトは人気である。学内のサイトには、3つのエリアがある。一つのエリアであるオンキャンパスは、企業が学校に出向いて求人活動を行うものである。2番目のエリアは、履歴書提出の要求である。たとえばカリフォルニアにある企業が、ニューヨークまで来て求人活動することは大変なことである。わざわざ学校に来たりしない。このため企業は、学生たちの履歴書を集める。集めた履歴書の中から数人を選び、電話やメールをつかってインタビューを行う。最後のエリアは、求人募集というお知らせの欄である。たとえば、企業が学校に出向いて面接を行うという情報を提示する。

プレゼンテーションで終始強調されたことは、学生に仕事を見つけあげるというサービスをしないことであった。学生の自主性に任せ、学校側はリソースを提供するだけであるということである。学生は、自主性に任せられ、自らリソースから自分にあったものを取り込んでいくということである。

HP では、雇用主に対しての HP である。この HP でろう学生と面接するのがはじめてという企業では、面接をどのようにしたら良いのか尋ねてくる。こうした時、ろう学生との面接に関するウェブサイトの場所を教えている。その HP には、ろう学生との面接の方法が書かれている。これらはリソースであり、学生を支援するための情報である。

面接のとき通訳者であるが、時と場合による。NTID に企業がくる場合には NTID が通訳者を準備する。学生が企業に行くようであれば、企業が通訳者を用意するのが責任である。このような場合、学生が企業に対してどのように通訳者をさがすのかを検討したりする。これも学生を育てる教育の一環である。企業が通訳者を提供できない場合は、別な方法で面接手段を考える。



図6 インターネット上に掲載している NTID の職業サービス

## 第3章 聴覚障害学生支援を支える NTID の取り組み

### ・手話通訳者養成

茂木京子（群馬大学障害学生支援室職員）

以下は、NTID における手話通訳者養成担当者からの話を基に構成したものである。

#### 経過

NTID で情報保障が開始された当初から、通訳者不足は明らかであった。そこで 1968 年、世界で初めて大学内で手話通訳者養成を始めた。当初は教育現場向けの通訳者養成だったが、地域の通訳者不足も受け、今では冠婚葬祭・医療・司法・職業・政治などあらゆる場面に対応できる通訳者を養成するカリキュラムになっている。

#### 手話通訳に対する誤解

手話学習者に多い誤解としては、「手話は簡単に覚えられる」「ろう者は皆、善人だ」「手話を覚えさえすれば必然的に手話通訳も出来る力がつく」などがある。NTID でも、まずはこの認識を変える事から始める。

また、手話技術を向上させることこそが重要であると考えられがちだが、そもそも第二言語（習得言語）は、第一言語以上には伸びない。つまり、英語能力如何によって ASL（アメリカ手話）がどの程度習得できるかが左右される。まずは第一言語の能力が問われるのである。

さらに、『手話通訳』とは単に言葉だけを表面的に訳すだけだと思われがちであるが、実際には意図を捉え、文化の違いを考慮した通訳をすることになる。加えて、通訳者としての責任感、人間性も重要である。こうした多くの事を習得しなければならないことからすれば、手話通訳の仕事は高度な能力を要求される専門職であると評価されるべきなのである。

#### 通訳者としてのスキル

手話ができる事と手話通訳ができる事は違う。手話通訳作業の殆どは「同時通訳」で

ある。英語も ASL (アメリカ手話) もどちらも出来ることが前提条件となり、その上さらに瞬時に二つの言語を行き来しなくてはならない。しかもそれは、表面的に訳しただけでは通訳とは言えない。慣用句や熟語表現など文法構造の違いを踏まえ、発言の意図を捉え、文化の違いを考慮し、場面に応じた翻訳が求められる(具体例を表 1 に挙げる)。そのため、英語と ASL は切り離して考えるよう常に強調して指導している。

また、通訳者はゼネラリストである事が要求される。通訳時の立ち位置や服装、立ち振る舞いといった通訳者としての基本はもちろん、通訳対象者の様々な年齢や生育環境を踏まえた「通訳技術」、突然の事故や病気など、あらゆる場面に対応できる「状況判断能力」、守秘義務など情報に関する「管理能力」、日頃から現場関係者との人間関係を保つなどの「人間性」を備えていなければならない。その上、これらは常日頃の不断の努力を積み重ねることなくして維持できるものではない。そうした努力を続けるための忍耐さえも要求されてくるのである。

これらを在学中に養うために、3 学年の 3 学期(春期)には演習があり、4 学年の 2 学期(冬期)には、メンター(指導教官)の指導の下、まるまる 3 ヶ月間インターンとして実際に働くなど実践的なカリキュラムが組まれている。

#### NTID の環境

1 学年の 1 学期(秋期)に ASL 4 (表 2) から始まること(第一回報告書 P 4 9 参照)からも分かるように、入学の時点で ASL 1 ~ 3 レベルの技術は習得しているのが前提である。とはいえ、入学が認められても技術を十分に習得していない者もいる。しかし、NTID には実習室(第一回報告書 P 9 参照)や単語収録 CD-ROM、1,000 本以上のビデオライブラリーなど、自己研鑽環境が充実しているため、彼らも入学後に十分な復習が出来る。もちろん、これらの設備は短期間(1 年間)での ASL 4 ~ 6 習得や、その後の通訳演習などにも大いに役立っている。

また、より実践的な手話を学ぶには規定のカリキュラムだけでは充分ではない。そのため手話で話す人々で構成されている「デフコミュニティ」に、自ら入り込んで学ぶことを推奨している。敢えて手話能力がある程度ついた 2 年目以降に推奨するところが NTID の特徴である(アメリカの他の養成機関では 1 年目に推奨する事が多い)。具体的にデフコミュニティとは、ろう者が働く職場、ろう者の交流会、ろう学校、デフクラブ(ろう者が集まるバー、ここでウェイターをする)、RIT 内のサークル(チューターをする)などで

ある。ロチェスターにもこうしたデフコミュニティがあるが、規模が大きく、6,000人以上で形成される最大級のコミュニティである。ここに入り込み、ろう者と直接触れ合う事で、ただ手話を学ぶだけの学生の立場ではなく1人の人間として現状を体感し、ろう者が求めるものを直接感じ取ることができる。また、ろう者から手話を教わる代わりに、デフコミュニティに何かを返すというような、ろう者とのギブアンドテイクの関係も体験させる事が可能となっている。

クラス編成は、生徒10人に対して1人の指導教員が付くなどきめ細やかな指導がなされている。これだけの環境であるにもかかわらず、RITの三分の一という低額な学費であることや、さらには就職率95%という数字も大きな魅力であろう。

#### 教職員向け手話指導

NTIDの方針として、手話を習得せずに就任した教員に関しては、1年間手話習得が課せられる。1学期(秋期)は手話習得のみに集中し、2学期(冬期)から授業を見学できるようになり、3学期(春期)になってようやく授業ができる。実際には、教職員の殆どがNTIDの卒業生であるため、手話も当然できる。

#### 今後の役割

現在、アメリカにおける手話通訳の75%は教育場面で行われている(NTID,2005)。これまで、NTIDでは高等教育における情報保障の担い手の養成に焦点を当ててきた。しかし、増えつづけるメインストリーミングにより、今後は中等・初等教育現場における情報保障の需要増加が見込まれている。さらに、ADA法が1990年に制定されて15年、各方面に浸透され、教育以外の場面でもますます手話通訳の需要は高まっていく事が予想される。そうした需要に応えるべき存在として、NTIDのような質の高い安定した通訳者養成システムが高く評価されてきたのであり、今後ますます発展していくことが予想される。

『May I help you?』		
使用する場面	意味	手話表現
物を落としてしまった人に対して言う場合	あなたが落としたの？ 拾おうか？	/want/me/help/you/want/?/
教員が大学の講義中に私語に夢中になっている学生に注意する場合	話を終わらせなさい (私語は慎みなさい)	/two/of/you/finish/
教員が大学の講義中に私語に夢中になっている学生に注意する場合	どうしました？どんな 症状なのですか？	/you/here/for/for/?/

表1 「May I help you?」の翻訳例

ASL 1	手話文法の基礎、日常会話Ⅰ（家族・職業など）、質問の方法など。読み取りを重視。
ASL 2	手話文法の発展Ⅰ（特に「問」）、日常会話Ⅱ（天気・時間など）、質疑応答など。読み取りに加え、表現も。
ASL 3	手話文法の発展Ⅱ（CL (classifier) など）。また、将来的に不測の事態に対応すべく、突然出されたテーマで話をした自分の手話表現を撮影され評価を受ける。手話表現に重きをおきつつ、これまでの総括的な内容となる。
ASL 4	ここから通訳技術に入る。一つの英語がもつ複数の意味に応じた翻訳（「Run」⇒『（人が）走る』と『（水が）流れる』など）。また、時事トピックを題材にした会話や専門的な分野の語彙も増やすなど手話のレベルアップも。
ASL 5	非手指動作（表情、体の動きなど）Ⅰ、フォーマルとインフォーマルな表現の区別など（人前に慣れる訓練も）。また、「ルール（運転・ゲームなど）」「事故（車・落馬など）」など様々なトピックの手話による説明能力訓練も。
ASL 6	非手指動作Ⅱ、方言の表現など。「恥をかいた経験」「こども向けの本の読み聞かせ」「慣用句、熟語表現」などの手話表現。グループでリサーチして発表するなど共同作業も。特に表現重視。

\*各コースごとにテストがあり、それをパスしないと次の段階には進めない。

表2 NTIDにおけるアメリカ手話（ASL）習得段階

---

## ．文字による聴覚障害学生支援（C-print）

三好茂樹（筑波技術短期大学障害者高等教育センター助教授）

---

### 1．C-Print とは

C-Print とは、NTID( National Technical Institute for the Deaf )で開発され、全米で広く利用されている音声-文字変換プログラムである。このプログラムをろう・難聴学生のいる教室で情報保障手段として使用するのが、C-Print キャプショニストである。キャプショニストはC-Print を使い教師の音声を文字に変換し、ろう・難聴学生に提示する。

近年、このプログラムには、音声認識の機能を取り入れており、従来の略記入力に加え、2種類の入力方法を利用できる。C-Print システムでは、教師の発話速度等の原因で、状況によっては要約しなければならないこともあるために、発話内容をそのまま文字にするのではなく要約をすることもある。この要約過程は通訳のプロセスと似ており、発話内容から不要なところを除いたり、重複を避けたりもする。作成された文章は、授業の後、学生が見ることもできる。また、視覚障害者用に、リアルタイムに点字キーボードに送ることもできる。

### 2.しくみと方法

略語入力の規則では、“blk” と入力すると変換結果として “black” が表示されるという具合に、音韻論を基にして作られている。また、キャプショニストはこの規則に従わず、通常の入力方法で文字を入力することもできる。

音声認識を使う場合にはマスク付きのマイクを使う。2つの音声認識エンジン(IBM社のVia Voiceには現在対応しており、Dragon Naturally Speaking へ対応させるためのソフトウェアは開発中)を利用することができ、教師の音声をキャプショニストが復唱することで、文字を作成する。各音声認識プログラムの最初の音声登録に要する時間は以前のものよりは早くなっており、Via Voice ならば2時間、Dragon Naturally Speaking ならばおよそ1時間程度である。



写真1 PEPNET-Japanメンバーと開発担当のパム氏



認識率の問題、編集のしやすさ、文法上の問題(カンマやピリオドがあるかどうかなど)音声認識ソフトウェアに対する音声登録の問題、教室のノイズ環境の問題などのために、復唱という間接的な音声認識を行っている。音声認識を使うときには、コントロールされた環境下で使用し、周囲からの影響を受けないようにする。例えば、ノイズに対してはマスク付きマイクで対応する。音声認識技術は、現在も進歩し続けているが、現在の段階そして教育現場では、キャプショニストを通じた間接的な入力の方法が好まれる。

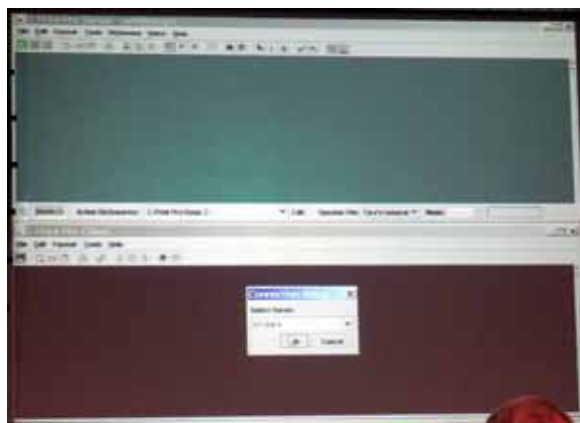


写真2 C-Print 概観

C-Print を使うのにふさわしい環境というのは講義である。グループ討論や講義中に数式や記号が出てくる講義は対応が難しい。グループ討論では、参加者が順番に発話するようにし、声が重ならないようにするというように、やり方を工夫することで、C-Print の使用が可能となる。数学とか科学で C-Print を使う場合、専門用語や数式というより難しい問題が生じる。

### 3 . トレーニング方法

C-Print キャプショニストは、様々なトレーニングを受ける。略記入力の方法、要約技術や授業終了後の文章編集技術といったトレーニングである。よって、C-Print システムは、テクノロジーとテクノロジーを使う人で構成されていると言える。

略記入力のトレーニングには、4 ~ 5 週間必要である。音声認識を用いた入力方法の習得は、略記入力より多少難しい。その理由としては、他人の声を聴きながら、自分で発話し、しかも発話している自分の声がマスクのために聞こえないという認知的な問題が挙げられる。よって、トレーニングでは主に、聴きながら話すというところに時間がかかる。

現在のところ、ほとんどのキャプショニストは略記入力システムを使っており、NTID では、両方の入力ができる方が良いと考え、音声認識の方を利用しているキャプショニストにも略記入力の習得も勧めている。

### 4 . C-Print のシステム構成

C-Print は文字入力用のサーバー P C と学生用のクライアント P C で構成されている。サーバー P C とクライアント P C はローカルネットワーク (LAN) で接続している。TCP/IP 通信で文字情報の送受信を行う。サーバー P C には、略記入力用のプログラムや音声認識プログラムが搭載されており、C-Print キャプショニストはどちらかを選択し、教師の音声を聴取し、それを文字に変換する。変換された文字列は、学生用のクライアント P C に送られ、ろう・難聴学生に提示される。C-Print は、現在のところ他のプログラムと通信させることはできないが、現在、C-Print のプラグインとして開発中である。

## 5 . C-Print 学生用クライアントの各種機能

### ノートテイキングツール

サーバー P C から送られてきた文字を提示する文字表示エリアの脇に、ろう・難聴学生自身でノートを取ることができるエリアが用意されている。学生は使いやすいように、色や大きさなどカスタマイズ可能で、以下のオプションも用意されている。

- 1 . 送られてきた文字をハイライト
- 2 . 送られてきた文字をコピーし、自分のノートにペースト
- 3 . 自分のノートに文字を打ち込む

自分の入力したノートなどにはハイパーリンクのように関連性を持たされており、講義の後、何をしたのかがわかるようになっている。

保存方法は以下の 3 種類が用意されている。

- 1 . C-Print から送られてきた文章のみ保存
- 2 . 自分が入力などした文章のみ保存
- 3 . 両方保存

### チャット機能

C-Print キャプショニストと文字チャットが可能であり、キャプショニストに質問することもできる。また、このチャット画面を使って教員に質問することもできる。声を使いたくないろう・難聴学生には良いオプションである。

このチャット機能を用いて、ろう・難聴学生が教師に質問することもできる。その手順は以下のとおりである。

まず、ろう・難聴学生が質問がある場合、本人が挙手をして教師に質問があるという意味表示をする。次に、予めキャプショニストに文字チャットを利用して送っておいた質問

内容を、キャプショニストが読み上げます。

## 6 . C-Print キャプショニスト養成用のオンライントレーニング

C-Print キャプショニスト養成用のオンライントレーニングは以下のような構成になっている。

モジュール1 C-Print に関する紹介

モジュール2 略記入力、独自にできるトレーニング(タイピングのトレーニング)、  
語彙の暗記・入力テストなど

例 「objkt」 「object」 「plstk」 「plastic」など

モジュール3 要約技能

モジュール4 授業終了後のテキスト編集技能

モジュール5 倫理的な知識

モジュール6 音声認識

上記のトレーニングモジュールは基本的なものであって、それ以上のスキル向上をNTIDでは促している。

オンライントレーニングに含まれている音声認識の項目では、Via Voiceをどう使うかということが多くの部分を占めている。これはマニュアルに記載されている内容と同等のものである。

オンライントレーニングを終えたキャプショニストたちは、皆もっとプロフェッショナルとしてのトレーニングを望んでおり、現在、そのための新たなトレーニングを開発している。ここ2、3ヶ月の間、NTIDでは、今ある資格の他に専門分野毎にきちんとトレーニングを受けたという資格も出していかなければならないだろうという議論が進んでいる。

## 7 . キャプショニストの資格

NTIDが所属しているRITには、20から21人のC-Printキャプショニストがいる。アメリカ全体では、今までに、500人以上をトレーニングしている。どの程度の技術力があるのかを確かめるためのキャプショニストの認定資格も設け

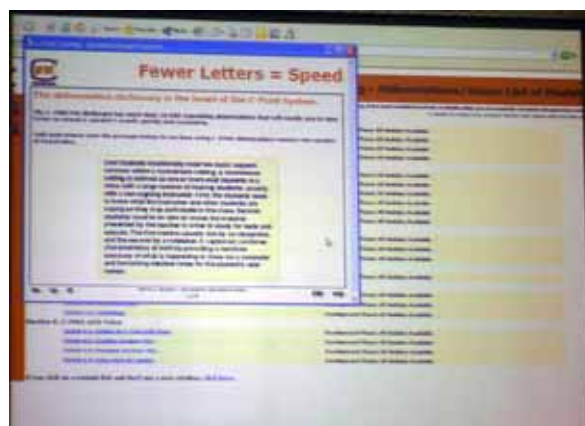


写真3 C-Print オンライントレーニング概観

られている。入力スキルと担当する講義の専門領域の知識が必要ではあるが、ここではまだキャプショニストとして訓練していても、授業で教えられる中身について専門性を高めるためのトレーニングというのは、まだやっていない。キャプショニストの資格レベルは、レベル1とレベル2の2つの資格レベルがある。レベル1というのは、主にリベラルアーツ系の中身で、短時間に多くの説明が凝縮されて話される授業ではなく、ペースとしてもゆっくり目のものである。

## 8 . C-Print キャプショニストの収入

C-Print キャプショニストの収入については、まず基本的にどこで働いているかによる。1日に8時間もとおしてできるわけでもなく、しかも、事前準備等にも時間が必要であることもあり、このようなことも含めて金銭的な請求ができるのかということも関係してくる。例えば、ニューヨークのような大都市であれば、仕事が多くあるので、仕事を得ることが容易でありが、遠隔地の小さな町であれば、仕事が頻繁にあるわけではないので、そういう意味では遠隔の字幕提示システムというものは可能性があるのかも知れない。C-Print キャプショニストの中には、フリーランスのキャプショニストがいて、夜間開講される講義などに対応してもらうこともある。R I Tで雇用しているC-Print キャプショニストに優先的に仕事を配分し、不足した場合には、その不足分を外部から調達している。

---

## ．カウンセリングサービスとその理論

平井利明（静岡福祉大学 社会福祉学部 福祉情報学科）

---

### 1．はじめに

「CBGS が提供しているサポートでカウンセリングサービスは、大きな位置を占めている。RIT には、健聴学生を含めて学内全体の心理カウンセリングを扱うカウンセリングセンターが設置されている。各 CBGS 内に 1 名のカウンセラーが配置され、NTID 内にもカウンセリング部門があるなど、至るところに様々な種類のカウンセリング部門が設けられている。聴覚障害学生に対応するカウンセラーはもちろん手話での対応が可能であるが、CBGS や NTID のみでなく、学内全体向けに設置されているカウンセラーセンターにも手話カウンセラーが 2 名配属されて手話による対応が可能である。

RIT に在籍する聴覚障害学生に対するカウンセリングは、主に CBGS 内のカウンセラーが担当するが、心理カウンセリングなど精神的な問題を扱う内容の場合は、中央のカウンセリングセンターを紹介することが多いため、こちらで扱う内容は、家庭内の問題や人間関係トラブル、学業上の問題等が中心であるとのことである。とくに学業上の問題については、チュータやその他の情報保障サービスとも大きく関わってくるため、実際にはカウンセラーを中心に、CBGS スタッフ全体で問題解決にあたることも多いとの話であった。」  
(引用：聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして 第 1 回アメリカ視察報告書 ロチェスター工科大学における聴覚障害学生サポートサービスの概要 白澤真弓著)

### 2．学生個々の段階的な成長論理概念

カウンセリングサービスは、メインストリームから入学してくるろう学生たちの支援をどうしていったらいいのかという問題である。ここでは、在籍するろう学生たちに対するカウンセリングモデルについて焦点をあてての話があった。そのモデルは、RIT におけるろう学生たちに対するカウンセリングの方針ともいべきものであった。カウンセリングの方針というのは、学生たちに対する成長論理である。以下、その論理は以下のようなものであった。

それぞれの学生たちは、疎外感を感じることなく、一人ひとりがどこかのグループに所属している。学生たちは、人々や環境から影響を受けている。また学生たちは、人々、すなわち家族や友人などから影響を相互に受けている。(図 1 参照)はじめに学生たちである

彼、彼女があり、彼らの健康状態がある(Biological)。そして成功していくための要素が、中心にある。

次に大切なものは、心理面 (Psychological) である。体が健康であっても、ストレスを受けて問題を生じれば心理面に影響をする。

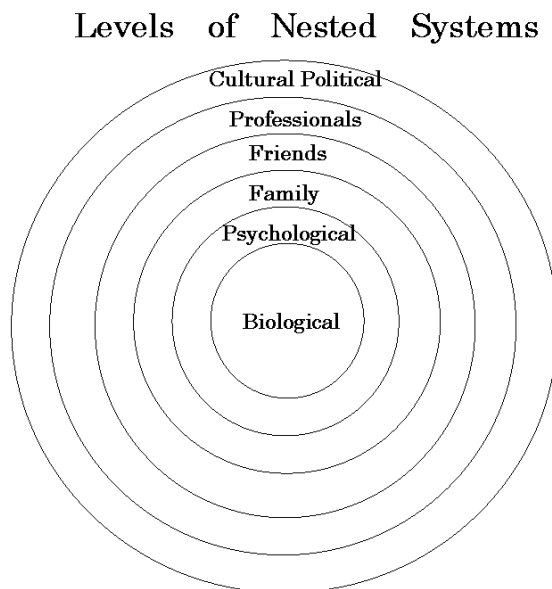


図1 成長過程のネスティングの構造

次に家族 (Family) である。学生たちは、NTID におり、そのうちの何人かは家族と離れて暮らしている。しかし離れていても、家族からの影響を受けている。20 年以上前とくらべ、大きな変化は技術の変化である。ページャや e-mail、ポケベル、コンピュータがあり、それらを使ってコミュニケーションを行っている。家族と遠くはなれていても、こうした媒体を利用して家族と連絡をとっている。このため家族の影響は大きい。とりわけ 18 歳から 22 歳の学生たちは、友人関係を主としている。学生たちは、家族と離れて暮らしているため、関係をより友人に求めていく傾向がある。

次は、教員 (Professionals) との関係である。学生たちは、それぞれのやり方で教員との関係を築きあげていく。学生によっては、ラボやクラスで、一人の先生と 3 時間も 4 時間も何時間も一緒にいることで、いろいろな話をする。そうしたことで、教員とより強い関係を作っていく。

最後に、カルチュラルポリティカル (Cultural Political) である。これは、学生たちたちを取りまく町や国、州、世界と学生たちとの関係となる。これらのことをもとに、何が

学生たちの中で問題となっているのかをより深くみていく。

まさにこの図のように、一人ひとりはいろいろなグループに所属していき、身体的なものから、認知的なもの、そして学生生活が進むにつれて、だんだんと世界が広がっていくことがわかる。

このような構造は、各ネスティングを因果関係サークルでも示すことができる。これを図2に示す。

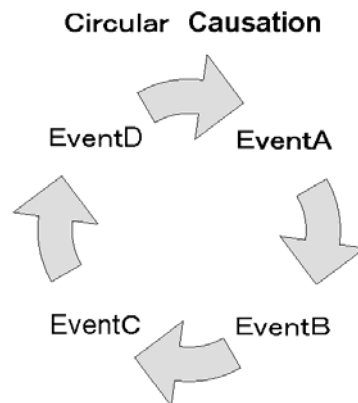


図2 因果関係の循環

### 3. カウンセリング理論とそのゴール

カウンセリング理論を一步先にすすめたプレゼンテーションが行われた。以下は、その理論について述べたものである。

## Counseling Theory and Goals

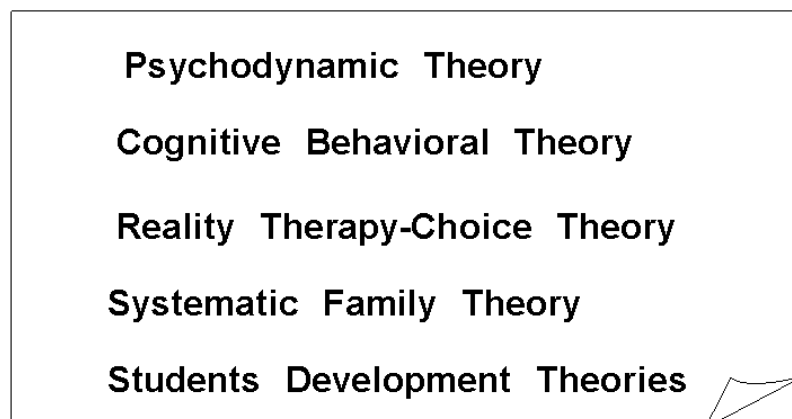


図3 カウンセリング理論

学生のカウンセリングにあたり、学生たちの内省的な心理面、すなわち学生たちが秘めている問題に関して、その学生たちが育ってきた環境、バックグラウンドについて理解するということが大事である。

学生たちの成長過程には、それぞれのステージがあり、そのステージにおいて学生たちの人格の発達、そして学生たちの心理面プロセスがある。学生たちの内面の問題を解決していくためには、心の構造を知ることが大切である。このことは、大切なことである。そして、このアプローチは長く時間がかかるものである。時間、それは年単位である。しかしながら学生たちに対してそれほど多くの時間をとることはできない。しかしながらこうしたアプローチは、学生たちに対して有効に働いている。カウンセラーを通して自分のアイデンティティを確立したり、自分の行動に悪いところがあれば直していったりする。たとえば、時間の管理である。カウンセラーは、学生たちにどう時間をコントロールしていったらよいのかをアドバイスしたりする。そしてカウンセラーは、学生たちに学生生活で成功するためのスキルを教えていく。過去に関して理解していくことは、特別に必要はない。

現実理論について焦点をあててみる。これは、主に学生たちが自分自身をどのように受け入れていくのかである。そして、学生たちが、どのようにストレスを自分で扱っていくのかということを示している。そして自分自身の周りに選択の余地があるのかということである。これらに関して知っていくことである。

またシステムティック理論もある。この理論は、家族をシステムとしてとらえた理論である。個人と他人との関係を調べていき、この中で学生たちを知っていくものである。この大学に入ってきて問題のある新入学生たちは、誰とも関係をもたないで自分一人で悩んでいることが多い。カウンセラーの仕事は、こうした一人で寂しい思いをしている学生たちに、いろいろなことを教えていくことでもある。

#### 4. チッカリングのモデル

学生を理解する上において、参考となるのがアーサー・チッカリングのモデルである。ここでは、ろう学生がアイデンティティを確立するために必要な理論として紹介があった。

アーサー・チッカリングは、リサーチで有名な人である。彼は、どのように学生たちがアイデンティティを確立していくのかの手順を調べた人である。彼は、アイデンティティを確立していくためには7つのステージがあることを提示している。これらのステージは



すべての人が通るステージである。以下にそのステージの概要を示す。

## Identify Development-Chickering

### 7Vectols

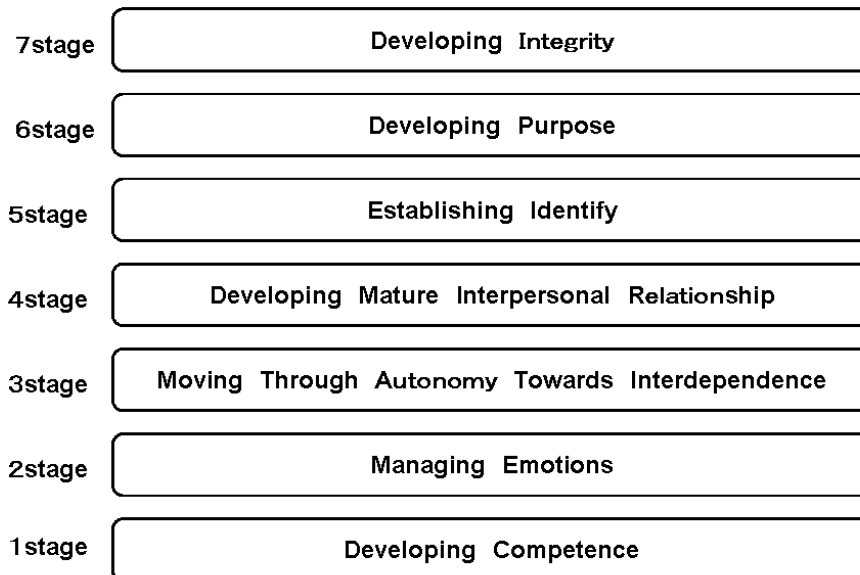


図4 チッカリングの7つのステージ

#### 第1ステージ

最初のステージは、新入生の成長の能力開発である。それには、まず自信をつける。つまり自信をつけることは、技術を身につけることである。その技術には、知的な技術や物理的な技術、対人能力技術がある。これらの技術によって得た自信によって困難なことに対する挑戦心や持続力、そして学生個々の能力を高めることになる。



図5 カウンセリング理論を話す Robb E Adams Ph.D

## 第2のステージ

このステージは、感情と行動をコントロールすることである。学生たちの中には、自分をコントロールできない者がいる。このような学生は、先生と会って感情を抑えることができない。このため、その学生は怒鳴ってしまったりする。彼の感情は、正しいものである。ただ、その学生は感情を抑えることができないということである。コントロールは、怒りや抑圧、あるいは対立である。

## 第3のステージ

このステージは、自主性から相互依存への移動である。学生たちは、自分自身について知っており、自分自身をたよりにし、自分自身でやっていける。つまり単なる独立心や自立心をつないでいくことだけでなく、時と場合によって人に頼ることもいいということ、そうしたステージである。つまり必ずしも自分自信でやっていかなければいけないということではなく、時と場合は人に頼る技術、たとえばチュータを頼ったり、自分一人でお金を稼ぐのではなく、奨学金をもらったりとかそのようなことである。

## 第4ステージ

このステージは、上級生や後輩などとの人間関係も意味し、成長した人間関係、成熟した人間関係である。学生たちは概してステレオタイプであり、許容度が少ない。しかし成長により、学生個々の相違を受け入れるようになり、成長した親密な人間関係を高めていくだけの容量をもつようになる。そして学生は、他の学生、同僚や先輩、後輩の意見に共感したり、感情移入したりし、ステレオタイプの意見を言い出すことを控えるようになる。他の人を理解し、価値を認め、コミュニケーションを図る。

## 第5ステージ

このステージは、アイデンティティの確立である。このアイデンティティは、上級生や後輩との関係も確立する。第4ステージで成熟した人間関係を身につけ、次に自分自身のアイデンティティを確立していく。すべてのステージは、アイデンティティ確立に大切である。しかしこのステージというのは、よりアイデンティティ確立に重要となる。ろう学生たちの中には、いろいろなコミュニケーションを好む者がいる。ろう学生のそれぞれのバックグラウンドは異なっている。ろう学生たちの中には、家族がろうである者もいる。

そうした人たちは、ろう学校で育ってきている。また学生自身がろう学生であっても、そうした学生たちの中には親が健聴者でその学生がメインストリームの学校で学習し育ってきている人もいる。つまり、ろう学生と言っても、人それぞれが異なる。ということは、人それぞれがそれぞれのアイデンティティをもっているということである。つまり自分の将来、目的に対して考え方を向上していく、そういうステージである。

#### 第6ステージ

このステージは、自分の将来、目的に対して考え方を向上していくステージである。学生たちは、学術関係、仕事、趣味娯楽、結婚、職業、生活スタイルなどに関係し、目的と方向性を独自で考え始める。そしてそのために計画をたて、優先順位を決定していく。中でも主要な要素は、趣味娯楽、職業計画、将来の生活スタイルである。

#### 第7ステージ

最後のステージは、成長の完全性であり、他の人々によって課されない個人が作り出し、していくもので、倫理的で、道徳的な基礎を発芽させるものである。学生たちは、自分の価値を認め、社会的な責任の大きさを確認する。社会状況の変化を客観的に観察し、その変化の複雑さをも受け入れる能力をもち、自己を改良していく。

### 5. キャリアディベロプメントと理論モデル

ろう学生や難聴学生たちは、将来何をしたいのかわからない学生たちもいる。どのようにすれば、良い職業を選択でき、よい人生を送ることができるかを考えることが難しい学生たちが大勢いるということである。このためキャリアディベロプメントとして、NTIDでは、ジョン・L・ホルランドの理論を採用している。

このジョン・L・ホルランドの理論は、6つのカテゴリーに振り分けられるとしている。概要は、ある特定の職種に所属している人たちは、特殊な感情表現をもっている。職場によって人間は、異なる感情表現をもっている。つまり環境が、人の性格に影響を与えるということである。環境が職場であれば、職場が個人に影響を与えるということである。職業で成功している人は、職場で自分の能力や自分の価値を見出せている人たちである。ジョン・L・ホルランドが出した答えというのは、もし人が環境とマッチすれば、自分自身の価値を上げ、それによって能力に自信をもち、それが成功につながるというものである。

成功の秘訣は、ひとつの仕事を続け、そして仕事に対して満足感を得ているかということである。そのため仕事に一所懸命取り組むことができるというものである。

6つの性格のタイプと理論をここに提示する。この理論は、ホルランドの六角形理論と呼ばれる。

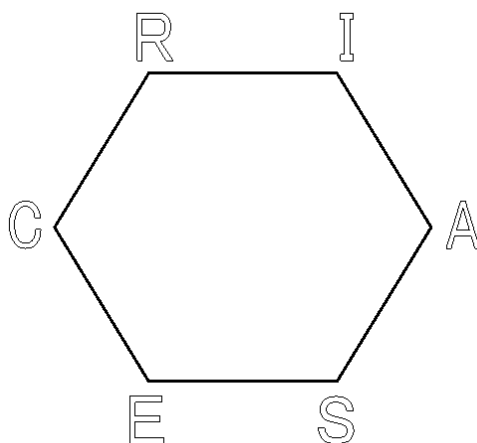


図6 ホルランドの六角形

NTID は、この図を使っていろいろな職業にふりわけて学生たちに見せている。これを使って学生たちの興味ある職業分野をさがさせる。たとえば学生たちの筆記技術能を知るのに、このような図を使って知ることができる。

#### Realistic タイプ

最初のタイプは、体を使ったタイプである。六角形のRは現実的タイプを表す Realistic の頭文字をとったものである。このタイプに属する人は、物、道具、機械、などを扱うことを好み、明確で秩序的、組織的な操作をとまなう活動を好む。このため手先が器用であり、組立や修理などにかかわる職業を望んでいる。仕事としては、手作業や機械作業、農作業、電気関係、技術関係の仕事に向いていると言える。したがってこれらのスキルは水道・ガスなどの鉛管工、飛行機のエンジニア、電気エンジニア、機械操縦などである。

#### Investigative タイプ

次のタイプは、問題解決をするのが得意なタイプである。六角形のIは、研究的タイプを表す Investigative である。このタイプに属する人は、科学者などは数学的なもので解決する。このタイプは、数学、物理、生物学などに興味関心がある。性格的には好奇心が強く学究肌で自立的であり、独立志向が強い。こうしたことから科学者、物理学者、数学者、コンピュータ技術者、電気技術者などに多い。

#### Artistic タイプ

3つめのタイプは、より芸術的な環境に置かれている人たちのタイプである。六角形のAは芸術的タイプの Artistic である。このタイプは、創造的であり、慣習にとらわれない。繊細で感受性が強く、独創的で発想が豊かで自由である。したがって創造的な才能を活かす芸術や演劇、言語系の職業に向いている。

#### Social タイプ

4つ目のタイプは、社会的な面で人を助ける人の性格のタイプである。六角形のSは、社会的タイプの Social である。人に仕え、教える、手伝うなどに関連する活動であり、教育関係の仕事、カウンセリング、看護、保育などの職業に多い。

#### Enterprising タイプ

次に、六角形のEは、企業的タイプの Enterprising である。会社でリーダー的な役割をもつ性格のタイプである。したがってリーダーシップをとり、人を導いたり、組織目標を達成したり、経済的利益を目的としたりする活動を好むタイプである。職業としては、管理職やセールなどといった職業の人たちが多い。

#### Conventional タイプ

最後のタイプは、コンベンショナルと言われるものである。六角形のCは、習慣的タイプ Conventional である。ビジネスに関連したことで、情報を、体系的にまとめ、整理する活動を好むタイプである。データ管理やファイル管理、経理、事務といった職業である。

以上がジョン・L・ホルランドの理論であり、すべての職業は6のカテゴリーに入ると考えたものである。

NTID では、この理論の他に、コンピュータを使って能力を知ることができるようなものも用意している。能力に応じてさまざまなテストを行う。コンピュータプログラムを使っての職業適性検査は、より深く知ることができるため、コンピュータを使っての検査を学生たちは好んでいる。コンピュータを使って学生たちがテストを受けると、そのレポートが出てくる。そのレポートによって、学生たちは、自分がモデルにおけるどの部分に所属しているのかを知ることができる。このモデルというのは、ワールド・オブ・ワーク・マップと言われるものでジョン・L・ホルランドのモデルと類似している。身体的な仕事をする人たち、リアリスティックな仕事をする人たちなど、その性格により図中でそれが示される。この図によって、自分がどの職業に近いかわかることができる。また自分の興味ある分野と自分の価値観というものを調べることもできる。またレポートからコンピュータによって自分自身の分析をすることができる。このように、コンピュータ診断に

よって学生たち個々は、異なる職業分野に振り分けられ、自分の適性にあった仕事を調べることができるようになっている。またこの分析結果から、その仕事に必要な教育を調べることができる。



職業選択のモデル図  
ホランドのモデルと同様に6つに分けられている。

図7 職業選択の World of Work Map

このようにカウンセリングでもさまざまな方法を、学生たちに提供している。カウンセリングは、ほとんどの場合1対1である。時には、グループで行うこともある。たとえばカウンセラーが教室に出向き、学生たちと話し合うこともある。たとえば夜や夕方に行われる特別授業でのカウンセリングである。また、入学生たちのオリエンテーションに出向いて指導をしたり、カウンセリングを行ったりしている。オリエンテーションやフレッシュセミナーなどにおける学生たちへのアドバイスには、2つのコースがある。一つは、フレッシュマンセミナーで新入学生たちは必ずとらなければならないコースである。どんな風にして大学生活を過ごしていくのか、そして学業をどのように進めていくのかについてである。さらに学内にあるリソースをどのようにアクセスしていくのかについても話をしていく。入学してはじめての1年間は、いろいろな問題が発生するが、それに対してどのように対処していくのか、他のクラスの学生たちとの関係作りについての情報も提供していく。たとえば、大学生活は、入学してから同じクラスでずっとやっていくことであり、その人間関係を2年間の間に築いていくことなどである。

もう一つのコースは、学生たちのキャリアについて話すコースである。カウンセリング室にくる学生たちは、まだどの学科に所属したらいいのかわからない学生たちもいる。

そういう学生たちのお手伝いをしたりする。たとえばどの学科に属したらいいのを見つける手伝いや、自分にふさわしい学科選びなどである。

その他、キャリアディシジョンメイキングというワークショップがあり、このワークショップは、自分の仕事を決定するためのものである。カウンセラー室を訪れる学生たちの半分は、自分の専攻分野を変えることを希望する人たちである。このため、彼らが専攻を変えるとき、学習に対するアドバイスやどのようなクラスをとっていったらいいのかのアドバイスをしたり、その他に将来どのような職業につきたいかの相談にのったりする。このためカウンセリング部門は、アカデミックデパートメントという学部とも近い関係にあり、共同作業して学生にサービスを提供している。

カウンセラーはどのように決定されるのかというと、大学内にアカデミックデパートメントがあり、そこで決める。学部の専攻によってその学部にあったカウンセラーが用意されている。たとえばある学生の専門が映像に関する専門であれば、映像に関係した教師が担当する。したがってカウンセラーを担当する教師のカウンセリングを受けるのは、その学部の学生たちである。それぞれカウンセリングを受ける学生たちは専攻学科が違うことから、ビジネスであればビジネス専攻のカウンセラーが担当する、というようにカウンセリングも、学部学科に関係した教員となっている。

このカウンセリングシステムは、ろう学生たちだけのためのものである。健聴学生たちのシステムは、別に用意されている。カウンセラーは、NTID にいるろう学生たちにカウンセラーのサービスと学業上におけるアドバイスを与えるサービスを行っている。他の7つの学部にあるろう学生たちは、異なるアカデミックアドバイスを受けることになっている。

# PEPNet(The Postsecondary Education Programs Network)の取り組み

## PEPNet(The Postsecondary Education Programs Network)および NETAC の概要

松崎文（宮城県・仙台市聴覚障害学生情報保障支援センター代表）

白澤麻弓（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター助手）

### 1. はじめに

アメリカでは、障害者教育法（Individuals with Disabilities Education Act）によって 3～21 才の障害児・者の教育を受ける権利が保障されており、同時に ADA 法（Americans with Disabilities Act）によって高等教育機関を含む公的施設における障害者差別が禁止されていることは承知の事実であると思われる。

こうした法的措置を受け、高等教育機関における聴覚障害学生の機会均等を保障するために行われている取り組みが、本稿で紹介する PEPNet（The Postsecondary Education Programs Network）である。PEPNet とは、長年先進校において培われてきたサポートのノウハウを、全米の各大学・短大全体へ広め、アメリカにおける聴覚障害学生サポートをより充実させることを目的に設立された、4つの地域センターで構成されるネットワークで、米国教育省と特殊教育局の援助により運営されている（須藤, 2001）。実は米国教育省は、4つの地域センターを設立した際、それぞれのセンターが独立して運営するものと思っていた。しかし、地域センター的役割を担う関係者から4地域が共同して動くことが提案され、現在のネットワーク形態になった。PEPNet の各地域センターの運営や各サイトの活動にかかる費用は、すべて4つの地域センターに投じられた連邦政府からの補助金によって成り立っている。各センター年間100万ドル（約1億2000万円）全体で400万ドル（約4億8000万円）にも上る。PEPNet 全体のための予算（例えば PEPNet 全米大会の実施など）は、各地域センターが連邦政府の補助金から5000ドル（約60万円）ずつ出し合って必要経費をまかなっている。

1996年に5年契約で開始され、現在は5年間で500万ドルの助成を受けている（現



在 2 期目の 4 年目)。ちなみに、PEPNet は、当初大学にだけ提供してきたが、それだけでなく中学校や高校などにもサービスが必要なことに気づき、今は大学周辺の機関にもサポートしている。以下、PEPNet の組織体制及び活動内容について報告する。

## 2 . PEPNet の組織と活動

PEPNet は全米をカバーする高等教育機関のネットワークであるが、活動をスムーズにするために、日常的な活動は図 1 に示すような 4 区域に分かれて行われている。それぞれの区域内では、長年充実したサポートサービスを提供してきた大学を中核大学として指定し、ここに地域センターを置いて全体を統括する形となっている(表 1)。同時に、区域全体をカバーするためのサイトが各区域内に置かれており、統括する地域の大学に対して各種アドバイスやサポートサービスを提供している。サイトの多くは聴覚障害学生の受け入れに実績のある大学の障害学生支援センター内に設置されているが、この形態や運営方法については各区域の地域センターに任せられているとのことで、現時点では州ごとにサイトを置いている区域と、数カ所のサイトで区域全体をカバーしている所に分かれていた。

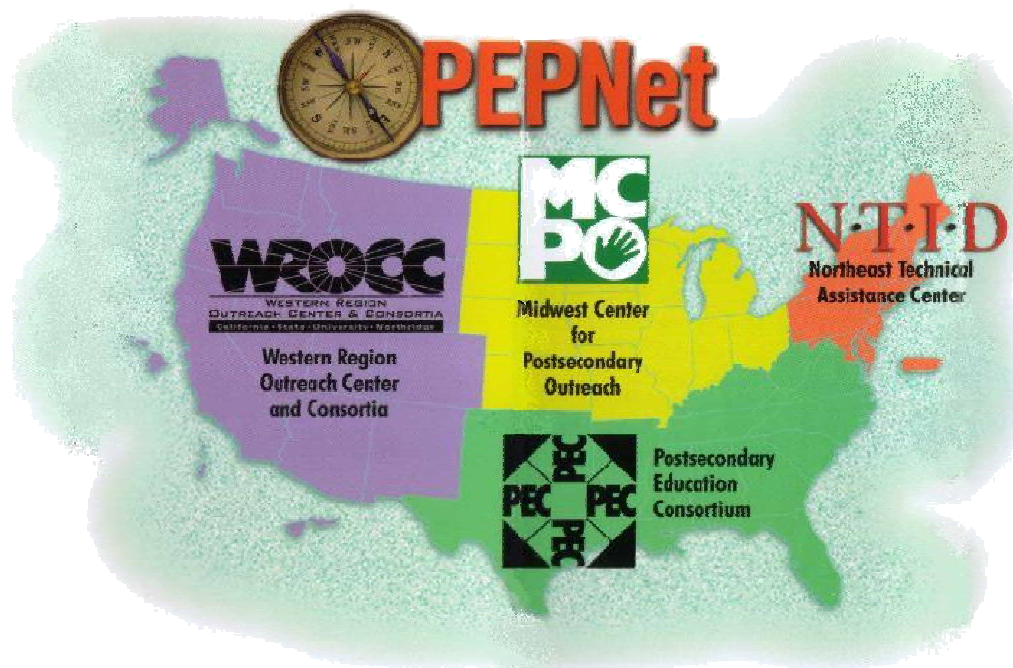


図 1 PEPNet の組織図

表1 PEPNet を構成する4つの地域センター

	中西部	西部	北東部	南部
地域センター				
正式名称	Midwest Center for Postsecondary Outreach	Western Region The Western Region Outreach Center and Consortia	Northeast Technical Assistance Center	Postsecondary Education Consortium
拠点校	セントポール工科大学	カリフォルニア州立大学ノースリッジ校	ロチェスター工科大学	テネシー大学
	拠点校の他に3つのサイトを設置	拠点校の他に2つのサイトを設置	各州ごとにサイトを設置	各州ごとにサイトを設置
管轄地域	アイオワ、イリノイ、インディアナ、カンザス、オハイオ、ミシガン、ミネソタ、ミズーリ、ネブラスカ、ノースダコタ、サウスダコタ、ウイスコンシン	アラスカ、アメリカ領サモア地域、アリゾナ、カリフォルニア、コロラド、グアム、ハワイ、アイダホ、モンタナ、ネバダ、ニューメキシコ、北マリアナ諸島、オレゴン、ユタ、ワシントン、ワイオミング	コネチカット、デラウェア、コロンビア特別区、メイン、マサチューセッツ、ニューハンプシャー、ニュージャージー、ニューヨーク、ペンシルバニア、プエルトリコ、ロードアイランド、バーモント	アラバマ、アーカンソー、フロリダ、ジョージア、ケンタッキー、ルイジアナ、ミシシッピ、ノースカロライナ、オクラホマ、サウスカロライナ、テネシー、テキサス、バージニア、バージン群島、ウエストバージニア

区域内の各サイトと地域センター、および4つの地域センター同士はメーリングリスト等を利用して密に連絡が取られていたり4つのセンターは年に数回集まって協議しているとのことで、4区域に分かれているとはいえサポートに必要な知識や情報は共同で蓄積されていっているとの印象を受けた。特に、PEPNet内の各地域センターやサイトによって作成された資料が一元的に管理されているリソースセンター（図2；実物はCSUNのNCOD内に設置）の情報は非常に豊富であり、これを見る限りでもPEPNetという形で全米をネットワークで結んだ価値が大きいことがうかがえる。また、4つの地域センターでは、養成カリキュラムの開発や資料の収集・蓄積等、聴覚障害学生サポートをより充実させるために必要な研究開発を、お互いに分担して重点的に行うなど、非常に効率的に活

動を展開している点は我が国でも学ぶべき所が大きいと思われた。

この他、2年に1度開催される全米大会についても、各地域センターの持ち回りで行われていた。今回視察した大会は、北東部を統括するNETACの主催で行われていたが、全米各地から高等教育機関で聴覚障害学生サポートサービスを担っているサービスコーディネーターや通訳者、カウンセラー、聴覚障害学生、ろう教育関係者、聴覚障害児を持つ両親など、数多くの関係者が訪れ、8会場で50件を超えるセッションが繰り広げられる様子は圧巻としか言いようがなかった。

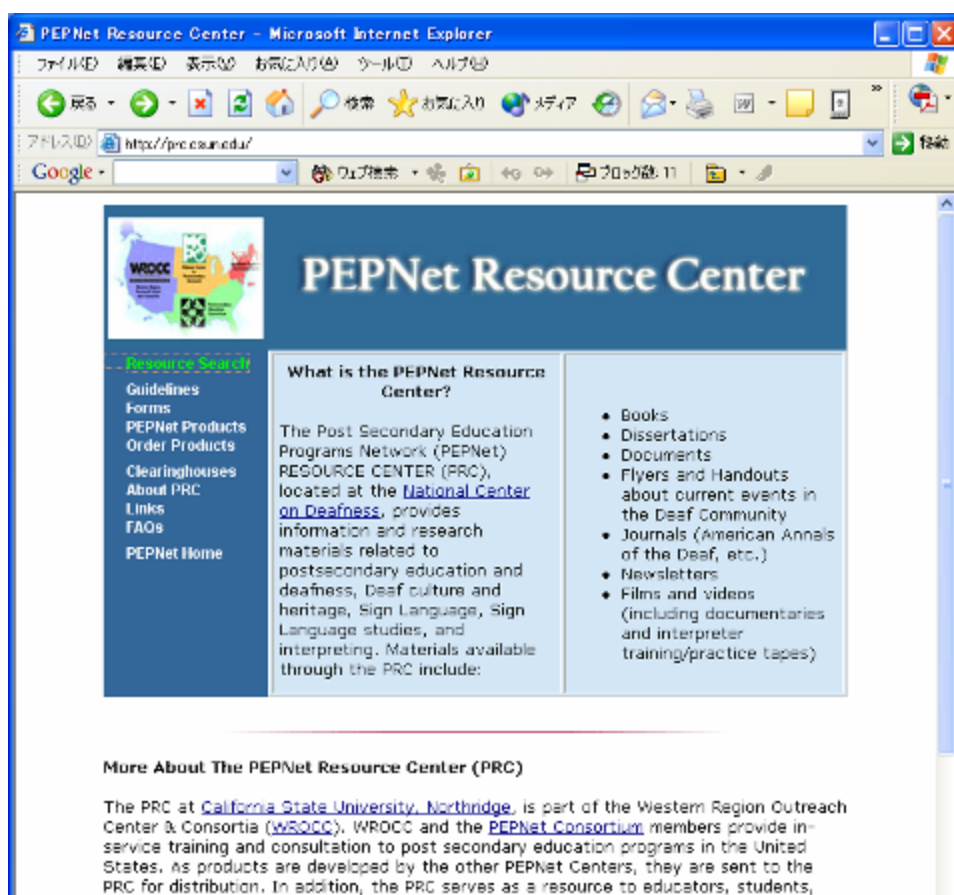


図 2 PEPNet リソースセンターホームページ

3500 種類を超える冊子が紹介されており、その多くが無料でダウンロードできる



図 3 PEPNet 全米大会の様子

### 3. 地域センターの活動 NETAC の取り組みを中心に

全米全域で行われている PEPNet の活動とは別に、大学の問い合わせに対して対応するといった日々の活動は、各地域センターおよびこのサイトによって行われている。

そのうち米国北東部地域にある NTID に設置されている地域センター-NETAC を紹介する（図 4）。NETAC のミッションは、聴覚障害学生の大学入学数を増やし、在籍率および卒業率を高めていくことであるとしている。そのミッションを達成するために、以下の 3 点の活動を展開している。

第一に、聴覚障害学生に対して、大学に入る機会を増やし、高等教育環境に適応できるようにトランジッションのサポートを行う。第二に、教職員に対して、聴覚障害学生のニーズや実態を理解し、どのように関わっていくのかを情報提供・指導・助言を行う。また教員がちょっとした工夫で聴覚障害学生も参加しやすいクラスを作ることができるように援助する。その際、NTID が開発した ClassAct など活用している（ClassAct については「聴覚障害学生のエンパワメント」の  頁を参照）。第三に、聴覚障害学生サポートに関する Material を開発し、大学のニーズやリクエストに応じてサイトコーディネーターや大学教職員に提供する。ただし、NETAC は、直

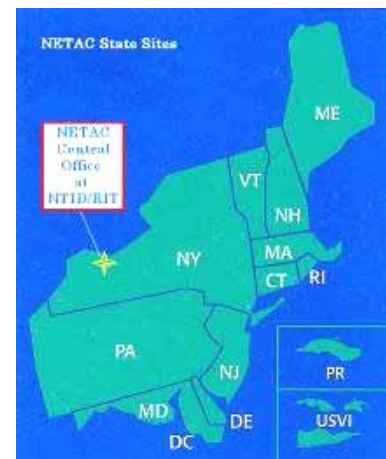


図 4 NETAC サイト

接聴覚障害学生をサポートするのではなく、むしろ大学で聴覚障害学生サポートを行っている者（例えば支援スタッフ、教職員）を支援する。その理由は、聴覚障害学生への直接的なサポートはあくまでも大学が主体的に行うものであるのだから、だと。

NETAC は、地域センターと大学の支援担当者との相互連携・情報交換のネットワークを円滑化させるために、各州ごとにサイトをおいている。そこで勤務するサイトコーディネーターが、州内のサポートサービスに関する相談に応じたり、大学教職員やノートテイク、手話通訳者、聴覚障害学生等を対象としたワークショップを開催するなどのサービスを提供している。表 2 に NETAC スタッフおよびサイトコーディネーターが提供している各々のサービスの内容を示す。

表 2 NETAC が提供しているサービスの内容

サービス内容	概要
コンサルティング	聴覚障害学生サポート体制を整えようとする大学に対するアセスメント、情報提供、アドバイス、通訳者の紹介、聴覚障害学生へのカウンセリング等の実施。
各種相談への対応（One to One Consultation）	通訳サービスや聴覚障害学生サポートに関する問い合わせに対する情報提供。（年間約 900 件）大学がはじめて聴覚障害学生を受け入れ、通訳の提供方法がわからないとき、サイトコーディネーターが大学を訪問して担当者と相談し、解決策、支援に関わるアイデアや情報を提供する。
ワークショップ・トレーニングの開催	通訳者養成のためのワークショップや聴覚障害学生のためのトランジッションプログラムの開催、教職員のための障害理解 FD、サービスコーディネーターを対象とした養成プログラムの実施など。（年間約 200 件）
プログラムの開発・提供	ノートテイクや C-Print オペレーター養成のためのオンライントレーニングプログラムの開発。聴覚障害学生のためのトランジッションプログラムの開発。
教材、資料の作成・提供	Tip シートをはじめとする教職員啓発のための資料作成、オンラインによる配布。聴覚障害学生のエンパワメントのためのビデオ教材の作成など。
サイトコーディネーター、サービス提供者に対する情報提供	ニュースレターの発行・メーリングリストの運営等を通じた情報提供。

ちなみに、当初は基本的に大学を支援対象にしていたが、現在は中等教育レベルの機関にもサポートを行いはじめている。それは、中等教育レベルで十分なサポートを受けてこなかった学生が大学に入学することが困難であることが示され、PEPN e t からの報告・フィードバックによって連邦政府も中等教育でのサポートを求めるようになっている。ただし、中等教育レベルでのサポートよりも高等教育支援の発展向上を一番の目標として取

り組む姿勢は基本的に変わらない。

### 3 - 1 . NETAC センターオフィスの役割

NETAC センターオフィスには、現在 5 名のフルタイム、数名のパートタイムスタッフが集結して、高等教育支援の発展に寄与している。ディレクター( マネージメント統括)、プロジェクトディレクターおよびその補佐を務めるプロジェクトアシスタント( NETAC サイトコーディネーター養成指導に関わる全ての業務を担当)、テクニカルスタッフ( サーバ運営やデータベース構築)、プロジェクトアソシエート( ニュースレターの発行など)、スタッフアシスタント( 事務関連、会計)、C-print スタッフ( アウトリーチトレーニングの補佐)。

NETAC センターの役割は、大きなリソースセンターであり、かつサイトコーディネーターをコーディネートするセンターでもある。NETAC センターは、サイトコーディネーターに対してリソースを提供する。サイトコーディネーターは州にとってのリソースとなっており、問題解決者であり、アドバイザーになっている。また、問題解決を行う過程で出てきた課題、成果およびアイデア( 提案) を NETAC オフィスにフィードバックしてもらい、これを受けて NETAC がさらにリソース開発を行い、その開発したリソースをサイトコーディネーターにフィードバックする。そのリソースとは、聴覚障害学生支援に関わるマテリアルやノウハウである。マテリアルの代表的なものとして、1 つは、聴覚障害や支援技術に関わるテーマ 1 つひとつを 1 枚のシートに簡潔にまとめた Tip シートである。聴覚障害学生への教育、教員、サービス提供者などいろんな目的で活用している。2 つ目は、Faculty Handbook で、教職員に対してたくさんのインタビューを行い、その中からいい事例を取り上げてハンドブックとしてまとめた。3 つ目は、Exhibit Materials で、展示用資料、例えばパンフレットやサインなどがある。

さらに、NETAC の Web 上にデータベースが設置されており、これまでにサポート関係でかわりをもったコンタクトパーソンのリストが掲載されている(現在は 25 名ほど登録されている)。このデータベースがあれば、支援関係者やサイトコーディネーターはいつでもどこからでも、何らかのテーマや問題解決のノウハウについて参考になりそうな人材を紹介できる。データベースにアクセスした問い合わせや要望を見ると、NETAC でこれから作るべきマテリアルが何なのかがよくわかる。

以上のように、NETAC センターオフィスは、各州のサイトコーディネーターと協同し

て、聴覚障害学生支援に関わるリソースの提案・開発・提供・フィードバックの4段階を循環的に行っており、また一方で、支援現場で有効であったマテリアルやノウハウはセンターのデータベースに蓄積させて外部発信しているのである。

### 3 - 2 . サイトコーディネーターの役割

サイトコーディネーターは、NETAC センターオフィスと各州にある大学とをつなげる“かなめ”としての役割を担っている。

サイトコーディネーターの仕事は、大学との間で聴覚障害学生支援に関わるパートナー関係を築き、大きく2つの段階にわけて各段階でさまざまな支援を行うことである。2段階とは、初めて聴覚障害学生を受け入れる大学に対してコンサルタントサービスを行う段階と、現行している支援現場の状態にあわせてサービスを提供していく段階とがある。

まず、最初に行うコンサルタントサービスの業務内容について紹介する。まず Best practices を行う。最初に、大学がどの程度聴覚障害学生サポートのことを知っているのかを把握する。次に、はじめて聴覚障害学生を受け入れる大学に対して、通訳者の確保の仕方や活用の仕方を伝えたり、サポートの質をより高いものにするためのモデルやサポートプログラムを紹介するマテリアルを提供した。

次に、現行している支援現場の状況に合わせてサービスを提供していく段階では、次のマテリアルを提供する。1) Newsletter。イベント情報、新しいトピック、Web 情報等。紙媒体だけでなく、メール、Web でも配布可。大学支援担当者がこれまでに入手したニュースレターを元に、NETAC へ連絡してくることがよくある。2) Online Training。ノートテイカー養成、聴覚障害学生にどう関わるかを指導したりする。3) Illustration of Success。聴覚障害学生にロールモデルを示す。就職して成功している聴覚障害学生の様子を見せるなど。

我々に NETAC の組織を説明してくれたスタッフのひとり、「こうしたマテリアルがあれば人が集まってくる(その意味でマテリアル開発・発信は非常に重要であるといえる)。だが一方で、NETAC スタッフが来ることを大学が嫌うという現状もある。なぜなら、大学が今までやってきたことに対して、あれこれ言われるのが嫌であるし、はじめて聴覚障害学生を受け入れてまだ何もできないので、サービスを強制されるみたいで敬遠されるからである。」と実態をもらしていた。この NETAC の理念・方針と大学の理念・方針が異なるためにサービス体制構築へ進められないという問題は、サイトコーディネーターにと



っても最も難しい問題である。そこで、サイトコーディネーターは、何かを一方向的に指導するのではなく、大学もしくは両者間での問題を解決するための関係作りに努めていることを最優先することになっている。お互いのやり方を尊重しあえる関係を作ることで、大学からプロのサイトコーディネーターとして認められるのではないかと思う。

ここで、サイトコーディネーターにとって本質的で重要な仕事とは何かを考えたとき、周りの人が持っている問題を的確に把握し、それにぴったりとはまるシンプルで使いやすい良質の材料を提供していくことである。もし、材料のない領域に関する質問があったときには、それに対応できそうな専門家を探して解決する必要がある。問題を解決してあげれば、大学側は NETAC の重要性をわかってもらえる。また、Peer の存在があれば同じ問題を持っている人たちの集まりをひらくことで、お互いに解決していけることもある。センターオフィススタッフは、「NETAC とは、聴覚障害学生サポートに対して大きな関心を持っている人の集まりであり、あるいは、『ここがよくわからないから教えてほしい』と言える人の集まりである」と言っていたが、サイトコーディネーターは、そうした人々のつながりを作り、支援ネットワークを広げていくプロフェッショナルistといえるだろう。

それでは、以上のような重要な役割と責務を担うサイトコーディネーターを一体だれが担当するのだろうか。

### 3 - 3 . サイトコーディネーターはどうやって選ばれたのか？

まず初めに NETAC オフィススタッフが各州を訪問し、障害学生サポートに経験のある人を探した。その結果、聴覚障害学生に多く関わってきた人が選ばれた。その人たちの多くは以前から障害学生オフィスで勤務していた。一方、大学内に設置されている障害学生オフィスにいる一人の職員を選出する場合、他のいろんな障害を扱っているものの聴覚障害については知らない人もいたが、NETAC オフィススタッフなど関係者と共同で聴覚障害学生サポートについて勉強してもらった。

こうしてサイトコーディネーターが決定された後は、派遣先の大学と契約（1年契約、毎年更新）を結んだ。サイトコーディネーターの大部分は既に大学内で他の仕事を持っていたので、勤務時間の何割かを NETAC の仕事に費やし、残りを大学の仕事に費やすなどの形とし、その割合にあわせて NETAC から給与保障を行っている。この契約は、大学と



NETAC の契約になっていて、個人契約とは異なっている。つまり、大学職員として大学に所属しながら、一方で NETAC の仕事をしている（NETAC が彼らのサービスを買っている形）。契約は毎年更新され、NETAC オフィスがそれぞれのサイトに対して毎年、次年度に向けた Basic plan を提示し、それを受け取ったサイトコーディネーターがこのプランをベースとして各自独自にやりたい内容を加えて計画を立てる。同時に、次年度の目的を達成するための予算案を提示する。その後、NETAC オフィスで提示された内容を吟味し、翌年の契約を結ぶ。サイトコーディネーターの置かれている大学からは、オフィススペースや電話代など基本的な設備だけを提供している。このように NETAC オフィスとサイトコーディネーターは、お互いに助け合う形で NETAC の運営にあたっているが、そもそも給与などの予算は連邦政府から来ているので、サイトコーディネーターが契約を履行しなかった場合には NETAC から契約を解消することもできるなど非常にきちんとした形での雇用契約になっている。ちなみに、サイトコーディネーター業務にかかる予算（特に給与）は、州内の大学数によって異なるが、平均して 40000 ドル程度（円換算すると 450 万円程）になる。

### 3 - 4 .「NETAC」のネットワークはどのように発展していったのか？

PEPNet が発足した当初は、いかにして PEPNet の存在、特に米国北東部においては NETAC の存在を各大学に知らせていくことが非常に大きな課題だった。それは、地域に PEPNet の存在意義を周知させ、かつ地域センターオフィスやサイトコーディネーターとよきパートナー関係を築いていくうえでクリアしなければならない重要課題であった。

そこで NETAC の場合、地域内の関係者・関係機関とのネットワークの構築・拡大に向けて次のようなプロセスで取り組んできた。

まず、既存の聴覚障害関係・障害学生支援関係の機関・団体とコンタクトをとった。例えば、障害学生関係の会議等に出向いて行って、NETAC の存在や概要を伝えていった。多くの大学は、さまざまな障害学生を受け入れているので、聴覚障害学生だけを対象にした大会には出席していないことがある。そこで NETAC は、障害学生全般を対象にした大会（例えば AHEAD）やイベントに出向いて NETAC の宣伝を行った。その宣伝を行う中で、関係者から相談されて名刺をもらったら、その裏にその人が抱えている問題を書いておいて、センターオフィスに帰ってから先方に必要な情報を送った。

また、サイトコーディネーターで担いきれない活動については、専門家の力を借りて講

演やワークショップをひらいたり、マテリアルの開発に手伝ってもらった。例えば、Access programのようなワークショップをひらいて、聴覚補償(例えばFMシステム、ループシステムなど)について説明するプログラムを、聴覚補償関係の専門家の援助で開発した。その他ノートテイク、C-print、CART、通信教育など特定領域に関する質問に対してコーディネーターが充分かつ適切に回答できない場合は、その質問者と、その道の専門家の間を取り持って対応する。ちなみに当初は、通訳や字幕に関する質問が最も多かった。

最初の段階でネットワークを構築する際に留意したことは、サイトコーディネーターが質問者や関係者に常に何もかも指示しようとするのと彼らとの関係が悪くなるので、専門家を連れてきて説明してもらおうようにする。とりわけ、ろうの専門家(特にPh.D.を持っている者)が来てくれたならば、大学関係者にとって最善のモデルになる。しかも、ろうの専門家の話は、通訳を通して聞くことになるので、大学関係者にとって通訳の使い方も同時に学ぶことができるのである。

さらに現在、NETACは、ネットワークの拡大・定着化をめざして以下の活動をしている。実にさまざまな方略をとって取り組んでいることから、NETACスタッフ、サイトコーディネーター、大学担当者など全員で情報をまんべんなく共有し、聴覚障害学生支援の水準をより高めていこうという理念や姿勢がきちんと具現化されていることがわかるだろう(表3参照)。

表3 NETACにおけるネットワークの定着化を目的とした活動

Advisory groups (専門検討会)	年4回、障害学生支援サービス提供者やカウンセラーなどを集めてサービスの内容について検討する。NTIDで作成された新しいマテリアルについて検討し合ったり、個々のニーズについて話をしたりする。
ニュースレター	NETAC ニュースレター(章末参照)と州内のニュースレターの2種類作成し、各州に配布している。
メーリングリストの活用	MLを作って情報交換をする。 PEPNet ML:聴覚障害学生サポートについての議論をするML。一人が質問すると、全米各地から答えが返ってきて、みんなでその内容を勉強することができる。 州内のML:イベントのアナウンスをする)
ワークショップ	NETAC公式のワークショップ、トレーニング、講演会などをひらく。テーマは、「聴覚障害学生に開かれた大学を作るために」「聴覚障害学生のリテラシー向上のために」などがある。
SCS研修	各地域で研修会を行う。
フォローアップ	一度情報を送った人に対して、その後必要な情報が入ったら随時情報を提供していく。

### 3 - 5 . NETAC はなぜ成功を収めているのか？

我々に PEPNet および NETAC の概要を説明した NETAC オフィススタッフは、最後に NETAC が成功を収めている主な要因をいくつかあげてくれた。

第一にサイトコーディネーターの資質である。NETAC が雇用した多くのサイトコーディネーターは聴覚障害学生と長く関わってきており、なおかつそれぞれの州の事情をよく知っている。例えば、どこに聴覚障害に関してどのような専門の人がいるかを知っているように。サイトコーディネーターの資質には次の 3 点が挙げられる。1) 障害学生関係の勤務経験を持つ、2) その障害関係のうち聴覚障害学生関連の実績をもっていること、3) 聴覚障害に関する専門的な指導を受け、彼らのニーズを把握し、彼らの視点で物事を考えられること、である。ちなみに、サイトコーディネーターのほとんどは BA、MA 取得者であり、PhD を持っている人は一人だけである。それでも、こちら側に聴覚障害学生サポート関係の専門的知識と実績があれば有名な大学の先生たちとも張り合っていける。その意味では、人と上手く関わる人を選んでいくことが重要であり、サイトコーディネーターになる者がどれほどいい人であるかが仕事の質を決めることになる。また、センターオフィスのスタッフたちも優れた資質をもっていることもみのがせない。

第二に、米国では伝統ある大学が障害のある学生にいろんなサービスをすでに提供してきた土壌がある。北東部では、NTID には多数のろう関係の専門家がいて、あらゆる質問・問題に対応することができる。

第三に、米国には ADA がある。20 年前には聴覚障害学生はごく限られた大学にしか入っていなかったが、ADA ができて以来、他のいろんな大学に聴覚障害学生の進学が広がっていったのである。

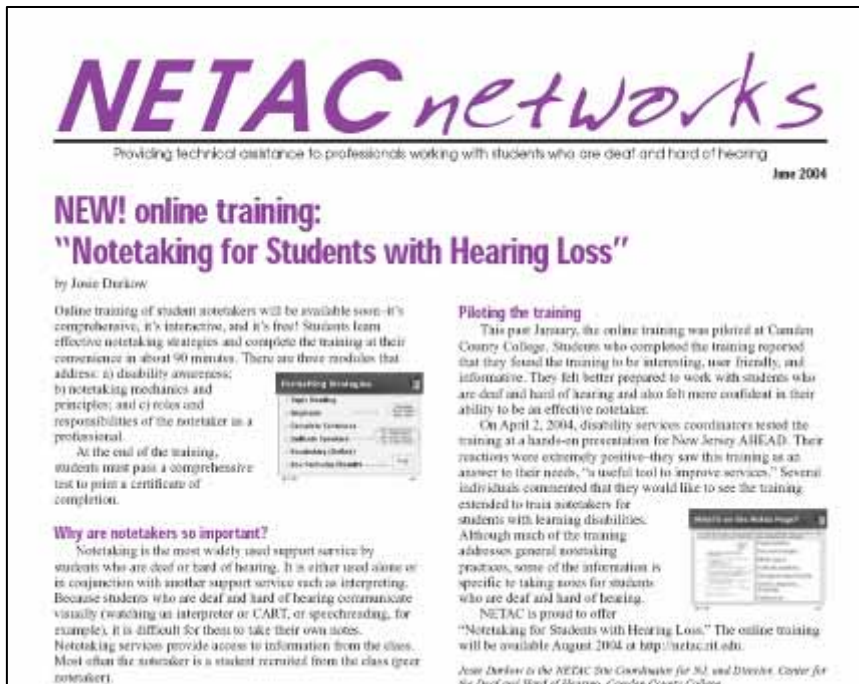


図5 NITACのニューズレター

<http://www.netac.rit.edu/publication/newsletter/>

各種ワークショップの案内等が掲載されており、活動の様子がよくわかる

#### 注・参考文献

- 1) NTID (2003) FY2002 Annual report. NTID.
- 2) 須藤正彦・大沼直紀・小林正幸・荒木勉・橋本公克・松藤みどり(2001) アメリカの聴覚障害者の高等教育機関における教育組織と教育内容・方法に関する比較研究. 筑波技術短期大学 テクノレポート, 8, .
- 3) NETAC (2004) Northeast Technical Assistance Center. NETAC.
- 4) NETAC <http://www.netac.rit.edu/index.html>
- 5) NETAC (2004) Northeast Technical Assistance Center Annual report. NETAC
- 6) PEPNet (2004) Post Secondary Education Programs Network. PEPNet.
- 7) PEPNet <http://www.pepnet.org/>

## 第2章 個別大学の取り組み

### ・ニューヨーク大学における聴覚障害学生へのサポートサービスの概要

菊池真里（群馬大学）

#### 1. 大学の概要

ニューヨーク大学（以降、NYU）はニューヨーク市にあり、日本内の大学のキャンパスのように学部棟や大学の施設が一箇所に集まっているのではなく、建物があちこちに散在して建てられていた。壁には NYU と書かれた紫色の旗がたくさんはためいていた。



写真1. ニューヨーク大学の建物の外観

#### 1) 基本データ

ニューヨーク大学(NYU)は学部と大学院があり、それぞれ7つの学科で構成されている。2500以上の学科(学部)があり、160プログラムが提供されている。

設立：1831（昭和6）年4月18日

場所・住所：アメリカ合衆国ニューヨーク州ニューヨーク市

形態：私立大学

#### 2. 全体 / 聴覚障害学生の全学年在籍数

##### 1) 学生数

NYUの学生総数は39,408人である。

その他、割合については表1を参照。

学生数（2004年度秋学期）		
	%	数
学部	51.30%	20,212
大学院	40.30%	15,884
その他	8.40%	3,312
合計（学生総数）	100.00%	39,408

表1. ニューヨーク大学における学生数

##### 2) 障害学生

NYUの学生総数 39,000人(2004年度秋学期)の学生のうち、障害学生数は、障害学生全体: 755名、聴覚障害学生 12名(ろう 6名、難聴 6名)。割合にして、全学生数の約 2%が障害をもつ学生である。

1998年入学した学生で、学部を卒業して学士を取り、大学院まで進んだ学生(6年間在籍)の卒業率はNYU全体で、80.0%。聴覚障害学生は、1人を除き、全員が卒業している。

### 3. 障害学生支援

#### 1) 支援を行うセンター

名称: 障害学生支援センター (Henry and Lucy Moses Center for Students with Disability) 以降、センター。

設立年: 1978年。

学習障害や精神障害も支援の対象である。

障害学生支援センターが設立されてからも、聴覚障害学生の入学者数にとくに影響はなかったとのことである。

図1. NYUのガイドブック



#### 2) 提供するサービス

- ・手話通訳
- ・ノートテイク
- ・C-Print
- ・CART
- ・その他 (FM システム、お知らせパトライト、電話リレーサービス機器)

支援対象の障害ごとに、必要な支援と理解などをまとめたハンドブックを作成し、インターネット上から閲覧できるようにしている。

#### 3) スタッフ

スタッフは 10 名 (7 名フルタイム勤務、3 名パートタイム勤務)。

【フルタイム勤務】

- ・ディレクター 1 名
- ・コーディネーター 5 名
- ・管理スタッフ 1 名

【パートタイム勤務】

- ・学生ボランティア 3 名

コーディネートを担当するスタッフは 5 人おり、うち 2 人が聴覚障害関係のコーディネートを担当する。



写真2. 説明を受けている様子

私たち視察団へ対しては、2 人のスタッフ、パン・ディナー氏とセラ・バードン氏が説明をして下さった(写真2)。ディナー氏はコーディネートを担当、バードン氏は聴覚障害学生に対するサービスを担当している。2 人とも手話通訳士の資格を所有しており、彼女たちの業務には手話通訳も含まれている。

#### 4) 支援内容

##### 手話通訳

登録人数：27 人

提供時間：71.5 時間/週。うちスタッフ 2 名。99.9%の提供率。

給 与：手話通訳業務を行うスタッフへの給与 3,800 ドル(月あたり)。時給に換算すると 48~50 ドル。

契 約：通訳の派遣については、フリーランスで契約を結ぶのと、手話通訳者が登録されている団体に派遣を依頼する 2 つの方法がある。ニューヨーク市には手話通訳者が多く住んでおり、彼らの技術を見て、直接依頼して契約を結ぶ。そうして契約された通訳者たちの中から、最終的に、手話通訳者は聴覚障害学生が選ぶ。通訳スキルに対する不満が多い。

##### ノートテイク

登録人数：17 名

提供時間：75 時間/週。

給 与：学期あたり 1 人に対して 100 ドル。

契 約：授業前にセンターからノートテイクカーにカーボン紙を渡しておく。そのカーボン紙を用いてノートテイクを行う。授業終了後、カーボン紙をコピーして聴覚障害学生に



渡す。あらかじめテイカーにはセンターのコピーカードを渡しておくので、コピー代はセンターの負担で支払われることになる。

ノートテイクに関する経費には限りがあるので、ノートテイクを利用できる時間も限られてくる。ノートテイクに対して支出できる費用の金額を、情報保障を受ける聴覚障害学生に伝え、学生がその金額内で、履修する講義へのノートテイクの割り当てを調整する。ノートテイカーの募集は、ポスター掲示や口頭で行う。

#### C-Print

登録人数、提供時間、給与は決まっていない。

C-Print は最近開発されたばかりの新しい技術である。C-Print を利用するためにはソフトの使い方などに習熟しなければならないため、人材の養成が急務だということであった。CART と併用して使用することもある。

#### CART

登録人数：7名（スタッフはなし）

提供される時間：38時間/週。

給 与：給与：一時間あたり90～100ドル。

CART は昔から使われてきているので、熟練した入力者を集めやすい。CART は特殊なキーボードを使って、その講義の発言内容をそのまま一字違わずに記録するシステムである。国会や裁判所の速記者が入力にあたることが多い。タイプライターは教室内に持ち込まれて入力が行われる。授業記録はCDなどにて保存され、電子データで受け取ることが出来る。CART の要望が増えてきているので、要望に対応できるよう、入力技術を持つ人の登録人数を増やさなければならないと言っていた。

### 5) 情報保障にかかる経費

#### 経費を負担する部署

情報保障にかかる経費は、情報保障の種類によって、かかる経費を負担する部署が違う(図2)。

ノートテイクに関する経費はセンターが負担する。手話通訳者、C-Print と CART の入力者への給与はその学生が在籍する学部の負担で支払われる。手話通訳者への給与はセンターを経由して、その聴覚障害学生が在籍する学部(大学)から支払われる。

図1. 情報保障にかかる経費





## 企業からの寄付

障害学生の学ぶ権利を保障するためにかかる経費には、州から大学に資金援助がある。しかし州からの援助だけでは、情報保障を全て保障することは金銭的に難しい。

そこでセンターは、大学で学ぶ聴覚障害学生に理解があり、資金援助をしてくれそうな見込みのある企業のリストを聴覚障害学生に渡す。その企業のリストの中から、聴覚障害学生本人が企業を選び、その選んだ企業に直接手紙やメールなどで資金援助を依頼する。依頼する企業の数、依頼をする・しないは本人に一任する。こうして州からの援助と企業からの寄付が、ノートテイクにかかる経費にあてられることになる。企業からの寄付がノートテイクの経費にあてられた残りは学生の学費に回される。聴覚障害学生への奨学金とも言うことができる。

企業からの資金は一年ごとにまとめて受給される。年度末に聴覚障害学生が、資金援助をしてくれた企業へ手紙などで一年間の学業報告をする。引き続き来年度も援助を依頼したいときは、その依頼も合わせて申請をする。その申請を受けて、その企業がまた資金を寄付するという形である。寄付金額と年数は決まっておらず、寄付が停止することもある。センターは、聴覚障害学生に企業から資金をいくらもらったかだけを伝え、実際の資金管理と運用はセンターが行う。実際に謝礼が支払われるのはセンターからであり、学生が直接給与を渡すなど資金の管理に関わることはない。(以上の資金の流れについては、図2参照)

図2. 情報保障の資金の流れ



## 6) 問題点

### 学生のモラル

聴覚障害学生の要望に合わせて、情報保障を用意したが、直前になって他の情報保障手段に変えてほしいと言ってくる学生がいる。その場合、調整することは難しく、不可能なことが多い。支援を受ける側である学生側のモラルと理解を求めていかなければならないと言っていた。

### 知的財産権

CART がつけられた講義には、講義で話された音声情報が文字となって残る。RIT では教官自身も講義記録のデータを受け取ることが出来るが、NYU では授業記録のデータが配布されるのは聴覚障害学生本人のみである。

知的財産権についての考えは大学でまちまちである。知的財産権の観点から、逐一記録された自分の講義内容が無償で聴覚障害学生に提供されることに抵抗を感じる教官もいる。またその記録データを欲しいという教官がいる。そのような教官たちに、理解を求めるのが大変だということであった。

## 7) キャンパスを越えた支援

NYU は海外にキャンパスがある。キャンパスがある国は以下の通り。イギリス、フランス、スペイン、ドイツ、ガーナ、ハンガリー、イタリア。

ある聴覚障害学生が必修科目を履修するため、一学期だけパリに留学したとき、パリへの留学生には、パリの手話通訳者をつけた。ADA (障害をもつアメリカ人法) などの、障害者の権利を保障する法律はもちろんアメリカの国外には効力がない。しかし、NYU の学生である以上、学生が学ぶ場が外国であっても支援を行うべきであるという考えに立ち、国外での学生のサポートは受け入れ先のキャンパスと相談して進める。イタリアから留学してきている聴覚障害学生がおり、その学生にも、その学生が必要とする支援を行う。

## 8) センター以外による支援

### 図書館

図書館が所蔵するほとんどの CD には字幕がつくが、字幕付きのビデオは全体の 50% だそうである。字幕無しビデオを教材として使用する際には、通訳などの情報保障をつけるか、字幕つけを字幕作成を行う会社に依頼する。

#### 4 . NETAC との関わり

NYU が NETAC から受けている援助は以下のような内容がある。

- ・ NETAC からの資源・資金提供 (C-Print を使う人材の養成など)
- ・ PEPNet が主催する全米レベル、地域レベルでの会議への出席に関する費用

他に、C-Print の人材については NETAC が開発したオンライントレーニングでの養成を検討中だということである。また衛星通信 (SCS) 会議で各地と通信し、情報や意見を交換しあっている。

NYU では、過去約 30 年間にわたり、障害学生の支援を行ってきた実績がある。例えば NETAC で作っている TIP シートは NYU でもオリジナルのものを独自で作っている。NYU で独自に作られた TIP シートは NETAC が作ったものと内容はほぼ同じものもあるのではないだろうかということであった。NETAC へは、NYU の方からも、長年の実績や NYU 独自の取り組みなどを紹介したりして情報を交換・共有していることが分かった。

---

## ．ラガーディア大学における聴覚障害学生サポートサービスの概要

倉谷 慶子（関東聴覚障害学生サポートセンター）

---

ここでは第2回海外視察9日目のラガーディア大学（LaGuardia Community College）のサポートサービスについて、サポートスタッフとのディスカッション、キャンパス内の見学、資料を整理し報告する。

### 1．ラガーディア大学の概要

19の大学、学生数21万8千人を擁するニューヨーク市立大学の中の1校が報告するラガーディア大学である。2年制のコミュニティーカレッジで、12の学科があり、卒業と同時に準学士号を取得できるコースのほか、4年制大学へ編入するためのプログラム、生涯教育のコースも備えている。

学生数（2004年度、以下に記すデータに同じ）は、準学士コース9千人、生涯教育コース2万5千人。このうち、聴覚障害学生数は、準学士コース31人（ろう者18、難聴者13）、生涯教育コース101人（ろう者80人、難聴者21）である。

学生の多くが移民者で、その出身は159カ国に及び、110もの言語が使用されている。大学内ではそれぞれのコミュニティと同様に、ろう者のコミュニティが保たれるよう配慮していると説明があった。

1971年の大学設立から間もなく1975年にPDA（Program for Deaf Adults、成人ろう者向けプログラム）が作成されていて、障害学生のサポートの歴史は長い。

ラガーディア大学の特色である、サポートサービス、生涯教育、手話通訳養成科、NETAC、を順に述べる。

### 2．サポートサービス

ラガーディア大学に学ぶ学生が、大学内のどのサービスにも平等に参加できる環境を整えることを理念とし、ろう学生、難聴学生、盲ろう学生を対象に様々なサポートサービスを提供している。項目は他の大学と共通しているが、ラガーディア大学に特徴的な内容を表1にまとめた。スタッフは19人（常勤12、非常勤7）。

### 3．生涯教育

ろう・難聴者だけでなく聞こえる学生も対象に、内容は 学習能力の向上、筆記・読解力などの技術を向上させるもの 自己能力を向上させるもの 手話プログラム、の三つに分けられる。

例えば学習能力向上のためのプログラムでは、他国からアメリカに来てコミュニケーション障害に直面している学生に対して、必要なサービスを提供し、大学に入学できる能力を身に付けるように指導している。また、高校を卒業していない学生のためには、高校卒業のテストを再受験し、合格すると大学に入学できるようなプログラムを提供している。

自己能力の向上のためには、タイピング、コンピュータ技術、運転技術など幅広い内容に加え、市民権を得るための指導も行っている。

ろう者には州からの助成金で学ぶことができる制度がある。また聞こえる者でも他に障害がある人（例えばアルコール中毒のような科学物質の中毒者）には州から助成金が支払われることがある。

#### 4．手話通訳養成科

ニューヨーク市内にある大学で、通訳養成に最も力を入れているラガーディア大学における手話通訳養成科の選考から卒業までの養成課程の特徴を、表2にまとめた。

#### 5．NETAC

NETACのサイトコーディネーターのオフィスがここラガーディア大学内に設置されている。コーディネーターと秘書がニューヨーク州南部の大学に対するサポートを担当しながら、ラガーディア大学にも情報を提供し、NETACと連携を図っている。最近ではノートイクのためのオンライントレーニングを採りいれている。

#### 6．まとめ

ディスカッションに先立ち、キャンパス内を見学した。二つの劇場（定員200人と250人）は、オリエンテーションや授業に利用されるほか、講演会や学生演劇部の公演、外部の演劇公演が行なわれる際にも手話通訳、字幕や文字によるサポートサービスを提供しているとのことである。廊下の公衆電話にはTTY（Teletypewriter、文字伝送装置）が取り付けられている。掲示板は勿論のこと、あちらこちらにサービスを目にすることが出来た。また見学の最中に、子供を持つ学生のために設置された保育園の子供たちの集団

に出会い、学外の人たちに解放されている地下のプールでは、年配のご婦人の姿も見受け  
た。出身国だけでなく、年齢も様々な人たちが行き交うキャンパスであった。

学長は私たちに、現在のサポートシステムやスタッフについて誇りを持って紹介される  
言葉の中にも、「ろう・難聴学生が聞こえる学生と等しく成功しているかと言われれば、そ  
うではない。私たちが期待するほどにはまだ成功していない。だから私たちの理想を実現  
するために、いろいろと働きかけを行っている」と語られたことを心に留めておきたい。

表1 ラガーディア大学におけるサポートサービスの特徴

サービス	特徴
相談	長期的な目標や履修科目等の相談を行う。スタッフの中にはろう者がいて、面談をより有効なものにしている。
基礎英語	読解力を問うCUNY (City University of New York) の試験結果65点以下の学生は、英語の基礎的な読解力・筆記力を学ぶ授業の履修が義務付けられる。基礎学力を身につけながら、学生の積極性・自主性に重点を置いた指導が行われている。
手話通訳	通訳の必要性を重視し、授業は勿論のこと、教員と1対1で話をするとき、グループ学習、キャンパス内で行なわれる様々なイベント等通訳が必要と思われる場面にサービスを提供している。 実績：スタッフ通訳者 4人、登録通訳者 12人、年間 5,540時間
ノートテイク	ノートテイクを担当するのはろう学生と同じ授業を受講する学生。2004年夏から、NETACのオンライントレーニングを採り入れて、ろう学生やろう文化に関する知識を習得したのちにノートテイクを行っている。担当学生には報酬を支払う。 実績：ノートテイク 9人、年間 165時間
C-Print と CART	サービスの提供量をみると、CARTよりもC-Printが利用されている。CARTは、教員が話した全ての内容が文字化されることから、より専門的な講義を受ける学生が好んで利用している。一方C-Printは要約されているので、打ち出された内容を読むにも時間を取らず、2年制大学である本学学生の学習能力に合っている、との説明。 C-Printの入力者が少ないので、将来的にはその数を増やしサービスを拡大する予定。 実績：C-Print入力者 2人、年間 64時間
チュータリング	学生が担当者と相談のうえサービスを提供する。チューターを担う人は、手話を習得しそれぞれの分野に長けている。殆どは学士を持ち、様々な分野のチューターが存在する。
API (Academic Peer Instruction)	特別なチュータープログラムとして用意されている。このプログラムは健聴学生にも提供されていて、その場合のAPIは、優秀な成績をとっている学生がリーダーとなるが、ろう学生APIの多くは学外から雇用している。それぞれの分野の知識に長けた人が担当し、もちろんコミュニケーション

試験の際の配慮	<p>ヨンは手話である。A P I を活用した学生は落第することなく授業に参加している。</p> <p>時間延長など、申し出ることで提供するサービス。</p> <p>聴覚障害以外に学習障害を持つ学生に対して、一般学生の2倍の試験時間を設けた例が紹介された。</p>
FM システム	<p>難聴学生に対しては、教員が話している内容が、ジャケットの襟に付けた小さなマイクを通して学生のレシーバーに大きな音になって伝わる補助的な機器を利用している。</p>
字幕	<p>教室内で必要とされるものは、ビデオテープ、DVDなど。</p> <p>字幕はろう・難聴学生だけでなく、英語を第二言語とする大勢の留学生にも有効。</p>
就職支援	<p>卒業後の求職の方法や履歴書の書き方などを指導している。</p>

表2 ラガーディア大学手話通訳科の特徴

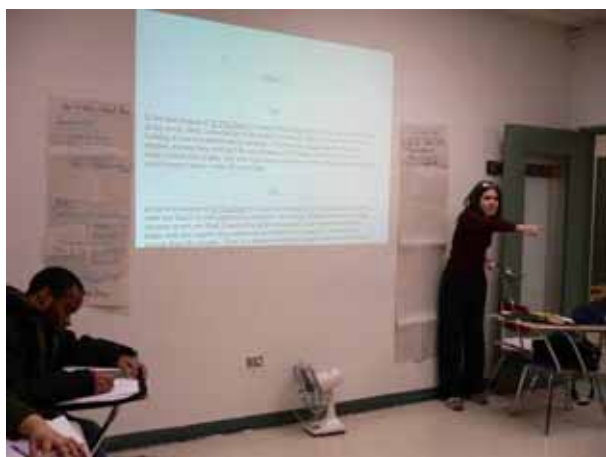
選考	<p>出願：書類、小論文、手話表現をしている場面を撮影したビデオ、の提出。</p> <p>スクリーニング：ろう者と聴者による提出物の審査。</p> <p>実技試験：例えばビデオを見て同時通訳をする、立体的な絵を見てそれを手話で現わす。</p> <p>手話通訳技術だけでなく、手話能力、英語能力も評価する。特にろう者文化・手話に対してどのような姿勢をもっているかを重視している。志願者は50～60人、最終合格者は10～12人。</p>
設備	<p>州の拠出金でつくられたラボは、ASL、英語通訳の訓練に使われている。</p> <p>ASL（視覚的言語）と英語（音声的言語）の相互の変換訓練のために工夫された設備である。</p> <p>例えば手話のビデオやDVDの画面を見ながらヘッドホンを使い、声を録音し通訳の練習をする。別のオリジナルテープに組み込まれた通訳者の見本と、学生が通訳した内容と比べることが出来る。同様にASLのビデオを見て、学生の自分の声や映像を記録したあとに再生をして見直すこと、通訳者が行う見本のビデオと比べることが出来る。机や照明の配置、パソコンソフト等についても学習の効果をあげるように工夫している。</p>
資格	<p>手話通訳科の学生は、先ず準学士の取得が必要。資格については二つの選択肢がある。</p> <p>一つは、通訳養成科で2年間学び資格を取得、もう一つは、2年間の学習後に提携しているエンパイヤーステイトカレッジに編入し学士を取得。</p> <p>学生はRID (The Registry of Interpreter for the Deaf) が実施する資格試験を受験する。その際の実験料は大学が負担し、卒業後も職業として手話関係に携わっていくことが出来るように配慮している。</p>
学費	<p>州の援助により学費は無料。</p> <p>通訳のトレーニングは主に教育現場（幼稚園から高校3年まで）で行なわれている。卒業後は、在籍年数1年につき年間1,200時間の病院など通訳を必要とする場へ派遣され働くことが義務づけられている。</p>



ラボ。ビデオやDVDを利用した学習ができる。ブースを仕切る壁は可動式になっている。



掲示板の一角にろう者に呼びかける情報コーナーがある。



基礎英語。壁に投影されているのはテキスト。

TTY付きの公衆電話





---

## ．ハンター大学における聴覚障害学生サポートサービスの概要

藤井 克美（日本福祉大学）

---

### 1．はじめに

2005年3月22日（火）に、ハンター大学を訪問し、聴覚障害学生のサポートサービスについて見学したので、その概要を報告する。これは、担当者の資料やパワーポイントを使用しての説明、当大学のパンフレット、学長の挨拶、学内見学の説明、質疑応答の内容などを整理したものである。

### 2．ハンター大学の概要

当大学は、1870年に創立された。現在、18歳から87歳までの2万人の学生が在学し、そのうちに約600名の障害学生が含まれている。また、100語の母語をもつ140カ国からの留学生が在学している。この障害学生のうち、ろう学生が17名。難聴学生が15名在学している。これは、ラガーデニア大学に次ぐろう学生の多い大学だということである。

芸術や科学部門の55の学部学科がある。健康分野の専門職、ソーシャルワーカーが育っている。70以上の修士課程がある。

障害学生支援は、オフィス フォア アクセス アンド アコモデーションのサポート活動によってなされている。

### 3．あいさつの中から

ディーン学長、エイア アラブライアー副学長、シュリーディレクターの3人の方々からあいさつがあった。3人のあいさつに共通するのは、ともに、このオフィス フォア アクセス アンド アコモデーションの活動を、とてもほこりにしているということであった。大学としても、積極的に障害学生を受け入れ、一般学生と同じように学生生活を送ることができるように取り組んでいることに自信があふれていた。さらに印象的だったことは、学長が、まず、問題点の一番に、コスト問題をいわれたことでした。市立大学のシステムの中で、目指すサービスをしようとする、予算が必要になります。助成金の額をあげるため、資料や情報を集め、そのための活動をしているというのです。日本では、どちらかというと、理念や障害学生に対する思いなどが先行することが多く、コスト問題を後

回しにして、結果、予算が無いからできないという議論になってしまいがちなのを、学長が先頭切って財源獲得に動いていることに、本気でこの活動を充実させようとしている姿勢がうかがえた。

また、障害学生へのサービスといっても、一律のことはしておけばよいということではなく、障害学生一人ひとりに合わせた多様なサービスを提供していることが強調されていた。大学が提供するサービスに学生があわせるのではなく、障害学生一人ひとりのニーズにあったサービスを提供していて、そのことは、学内をめぐってみれば、障害学生が、一般学生となんらかわることのない学生生活を送っていることがわかるというのである。

大事なことは、ろう学生にかかわっていくということは、単に通訳のサービスをおくというだけではなく、その背景にある文化的なことも踏まえてあたるということだと強調された。このことを大切に取り組むためには、個人のプレーではなく、グループで個々の問題にあたるということです。たとえば、ひとりで得た情報をみんなにシェアすることだと。それは、一般学生、教職員に対して、ろう学生に対する理解を深めるために教育することの内容として重要であるとのべられ、ニューヨークのコーディネーターたちは、そのようにして、いつも、情報交流しているという。

さらに、今後とも、支援内容やトレーニングについて情報交換をしましょうと、提案された。

#### 4．オフィス フォア アクセス アンド アコモデーションのサポート活動

障害学生のサービス提供は、オフィス フォア アクセス アンド アコモデーション (Office for Access & Accommodations) の活動として行われている。

#### 5．障害学生の登録

障害学生は、証明書（機関からの推薦状など）や診断書（セラピストの証明書、薬の副作用があればその対処法など）を添えて、サービスを利用するために登録をする。

#### 6．ろうおよび難聴学生に対するプログラム

1980年代は、ろうおよび難聴の学生は、2～5名であった。この説明をされているコーディネーターのダナーさんは、当時、ろう学生のカウンセラーというより、障害学生全体を担当するカウンセラーとして雇われていた。手話通訳やノートテイクは、当時、学内

にはいなかったのので、外部に依頼していた。

1997年になり、聴覚障害学生が7名になった。手話通訳派遣を依頼していた。ADA法に基づき、ハンター大学として手話通訳の料金を支払うようになった。このとき、パートタイムのカウンセラーがいた。

1997年～現在に至っては、29名の聴覚障害学生が在籍している。フルタイムのスタッフが2名。3名の手話通訳スタッフが20～25時間勤務し、16名の手話通訳が派遣されている。シュリーさんは、その管理やお金を動かす仕事をしている。1997年にはお金はなかった。ダナーさんはレギュラーカウンセラーとして雇われたがアクセス&アコモデーションで、自分の能力を提供することで働くことができたという。ニューヨーク市から出される予算の3倍のお金を手話通訳派遣に使っている。3名の通訳はベネフィットをつけて雇っている。同じ金額で3倍の手話通訳を付けることができた。

ろう学生が増えるのは、口コミでハンター大学は、ろう学生がサービスを受けられるとうわさが広がり、よいということが増えている。その人たちがリクルートしているわけではないが、ろう学生が集まってきているということである。大学としては学生募集に制限を設けていない。スタッフとして手話通訳者を雇ったときは、ハンター大学として一般会計から支出する。

## 7. 派遣

聴覚障害学生が、全ての教育に対して平等にアクセスできることを旨としている。聾や難聴の学生が教育的環境にスムーズに統合できるようにするために、彼らが教育を受けるすべての場所に手話通訳やノートテイクを派遣する。そして、大学、一般学生に対して、ろう文化とは何かを教育する事を進めている。

## 8. サービス内容

基本的には、聴覚障害学生に対して、クラスゼミや講義、試験などに対してサービスを用意し、また、必要に応じて種々のサービスを行う。クラス登録が優先的に登録できるようにし、12単位がフルタイムになっている履修登録は2ヶ月前にできるように手配する。第一言語が英語でない聴覚障害学生に対しては、テストの代替え処置や時間延長などを行う。手話通訳費用も安くできるように働きかけることもする。個人的なことや就労などに関してはカウンセラーサービスを行う。特別な援助として、手話通訳やノートテイクの他

に、求職者への推薦、チューターサービス等もしている。

ろうおよび難聴学生のサービス内容は NETAC からのものである。トレーニングやワークショップについての情報、最新のリサーチ情報やテクノロジーについては提供してもらっている。

## 9．求職者紹介

求職に関しては、タイプ別の対応をしている。ろう学生、難聴学生、中途失聴、人工内耳のそれぞれに応じて、カウンセラーサービスを行っている。

## 10．財政基盤

財政基盤は3つである。1つは国からの配分、2つには州からの職業的リハビリテーション( VESID )予算からで年間4万ドルの配分、3つにはハンター大学からの支出である。

## 11．卒業後の進路

卒業までは、社会学、メディア関係、哲学関係、マスコミ関係、歴史学、英語などの学習をする。そして、卒業後は、ソーシャルワークやろう教育の職に就いている。卒業生20%が修士課程へ進学し、80%が、社会的なサービス、教育分野、マスメディア関係の仕事をしている。

## 12．将来展望

海外で勉強できるプログラムを手話通訳を派遣することも含めてすすめる。また、ろうや難聴のクラブを100作り交流会やパーティを開催することを考えている。

### < 質疑応答の中から >

(質問) Office for Access & Accommodations は、学生サービスセンターに組み込まれているのか？

本学には、2万人の学部学生と、大学院生が在学していて、その学生すべてに対して、このフロアーが担当していて、アクセス・アコモデーションというのは、学生サービスセンターに組み込まれている。その障害学生に対するサービスというのは、600人から700人の障害学生に対して行われている。そして、その600ないし700人の障害学生の

内 29 人の聴覚障害学生に対して、サービスをおこなっている。

（質問）一般の学生に対しては、どのようなサービスがあるのか？

一般の学生に対するサービスは、アカデミックアドバイス、個人的なカウンセリング、そのほか、職業関連のアドバイスや新入生、編入生に対するオリエンテーションなどがある。学生センターほかに、キャリアセンター、健康に関するオフィスもある。そのほか、成績が良くない学生、進級や卒業が危ぶまれる学生に対して支援をするコーディネーターがいる。

（質問）過去 10 年ぐらいの聴覚障害学生数の変化は？

上記、当オフィスの活動の記述。当初よりは数倍に増えている。聴覚障害学生に対するサービスはラガーディア大学に次いでこの規模でサービスを行っている。

（質問）もし、日本人がこの学生になったとすると、一つの Semester でどのくらい費用がかかるのか？

留学生の学費は 74 ドルである。

（質問）予算獲得はどうしているか？

ニューヨーク市の 29 の大学が CUNY という組織を作り、それぞれの大学から代表者が出てオフィスで協議し、州に要求する。獲得した予算の配分についても協議する。障害学生の意見も尊重する。毎年約 11 万ドルの予算である。CUNY スクールに属している大学はそれぞれ特徴を持っている。たとえば、ガダーディア大学では聴覚障害学生に対するサービスに力を入れている。それぞれの大学は、その大学の特色を生かして州に訴える。そのようにして市のほうから予算を配分される。これを各大学でどのように配分するかは、それぞれ、特徴を出し合い、各大学の計画の中でどのように予算を使うのかを話し合って決める。また、前述のように州のほうからと国からの配分がある。その他、本大学から財政支援をしてもらっている。

（質問）ノートテイクのサービスは、学生がやっているのか？

学生がやっている。その学生は、4 段階評価の 3.5 以上の成績のものである。視覚障害

やその他も含めて約600人の障害学生がいる。そこで、クラスの中でボランティアを雇っている。大学院生もいる。学業成績が3.0以上とり続けている学生ということになっている。

(質問) 自分の障害をあらわさない学生に対してはどうしているのか?

まず、私達がやっていることは、アウトリッチプログラムをやり、自分達から話せる様にする。そして、私達がどんなことをやっているのか知らせることが重要である。私達がやっている任務やオフィスがあることを手紙で知らせる。障害に対してデリケートな学生に対しては、この大学には100人も登録している障害学生がいることも知らせ、孤独感を感じなくてもよいことを知らせる取り組みをしている。質問にあったようなことは、目に見えない障害を持っている学生に見られる。たとえば、聴覚障害学生の中でも、手話のわからない学生だとか、うつ病、学習障害の場合、アメリカの場合50%ぐらいがうつになっているともいるが、よくみられることである。目が悪くなった場合お医者さんに行くようにというような感じでアドバイスをする場合もある。学内ツアーで見られた健康フェアーのような感じで、私達も、私達の活動をわかってもらえるようにしている。そのようなことを通して、そのような学生に対して対応している。

(質問) 養成はどのようにしているか? また、オンラインでトレーニングしているのか?

養成はしていないが、学生に対してはノートテイクについてオリエンテーションをしている。オンライントレーニングは、まだできたばかりなので、まだ導入していないが、これから導入することを考えている。

(質問) コーディネーションをうまくやっていくための、情報源や資源についてはどうしているのか?

あらゆる情報を求めて会議に参加する。NITAC などから必要な情報を得ることもしている。そして、障害学生本人からの情報を大切にしている。

(質問) 聴覚障害学生が在学しているクラスの教員に対する働きかけはどうしているか?

ろう文化について、NITAC のものやあらゆる情報を元に伝えている。

<学内ツアーから>

ろう者劇団の公演もある舞台付講堂やトレーニングルーム、体育館などを、アルバイト学生の案内で学内ツアーをした。あちこちにコンピューターサービスがある。視覚障害者用のマイクロソフトコンピューターもある。ここ以外にキャンパスがあって、そこでは社会福祉学部がある。テクノロジーセンター 1 日 1 0 0 名ほどの学生が利用している。ワークショップを開くこともある。

### 13 . おわりに

当オフィスの障害学生に対するサービスを充実させようという意気込みと、それをすすめているほこりを感じさせられた。ADA 法が大きな役割を果たしていること、連邦政府や州などからの財源があること共に、NITAC など各方面と連携をとりつつ、ここで働いているスタッフの心意気に感動した。日本でも取り組みたい展望を見いだせた思いであった。

## ・ ニューヨーク州 4 大学で学ぶ聴覚障害学生の声

倉谷 慶子（関東聴覚障害学生サポートセンター）

ニューヨーク州内 4 大学の在学学生・卒業生 6 名によるパネルディスカッションでは、サービスを利用する立場から、現状や課題を語ってくれた。



\* パネラー(上写真、左から順に)

ミノルさん / R I T 卒業。日本出身。

ケリーさん / N T I D からラガーディア大学に編入。ジャマイカ出身。15歳の時にアメリカへ。法律関係を専攻

エマニエルさん / ニューヨーク大学卒業。ヨーロッパ史専攻

ジョーンさん / N T I D からラガーディア大学に編入。両親は中国からの移民者でアメリカ生まれ。ろう学校卒業。コンピュータ科学専攻。

スラバニアさん / ハンター大学卒業。ロシア出身。社会学専攻心理学副専攻。

リチャードさん / ハンター大学院生。ろう者と難聴者のためのプログラムに所属。

司会 : ディズリーさん / NETAC サイトコーディネーター (右写真中央左に立っている女性)





\* ディスカッションの様子(司会の左側2人が日本手話通訳者、その手前の2人がASL通訳者、一番手前の後ろ向き2人が英語・日本語音声通訳者)

司会 / これまで皆さんが受けてきたサポートサービスについて話してください。

リチャード / 以前マーフィーカレッジで、通訳などのサービスを使って行動科学を学び、その後現在の大学院に移りサポートサービスを受けている。

スラバニア / ロシアから初めてアメリカに来たとき、私には言語がなかったので助けが必要だった。ラガーディア大学に入り、2年間で準学士を取得する間にチューターの使い方、ノートテイクの使い方、通訳の使い方なども学んだ。その後ハンター大学で学士の勉強をした。卒業後に仕事を得ることもできて、すばらしい経験をした。

司会 / アメリカに来たときに言語がないといていたが、それは正しいこと？

スラバニア / ロシア語とロシア語の手話は知っていたが、英語とアメリカ手話は知らなかったもので、いってみれば言語がなかった。

ミノル / 手話通訳の場合、講義内容だけでなく、文字だけでは伝わらない先生の表情や感情が伝わってきた。

エマニエル / ニューヨーク大学では、チューターや通訳、ノートテイクなどのサービスを受けた。私の場合特別なコースでパリに行くことになり、フランス語とASLが出来る通訳者が必要になった。ろう学生一人一人のニーズは異なっていると思う。

ケリー / 私の場合、大学に入学してクラスの中でろう者は私一人という立場になり、初めて情報が間接的に伝わってくる状況に置かれた。そこで初めて通訳の使い方を学び、サービスを受けるようになった。

ジョーン / 高校を卒業後まずNTIDに入ったが満足できなかった。ラガーディア大学はろう者に対するサポートプログラムがしっかりしているので満足している。

司会 / メインストリーミングの大学で学ぶにあたり、最大の課題、チャレンジは何ですか？

エマニエル / 直接的なコミュニケーションが取れるか取れないかが一番のチャレンジ。

通訳を介して外国語を学ぶこと。

スラバニア / ロシアの大学ではファッションを学んだが、サポートはなく孤独だった。アメリカに来ていろいろなサービスがあることを初めて知った。健聴の学生と一緒に参加できるようになり、平等になったことが一番大きなこと。

ミノル/RITにはろう学生が大勢いるので安心できると思っていたが、通訳を頼むことが差別的に見られることがあった。

ケリー/ジャマイカの手話はBSLだが、アメリカに来てASLを2カ月で習得することでサービスを受けることが出来るようになった。

リチャード/聴覚障害のことを教員に理解してもらうためには、私が説明しなければならなかった。

ジョーン/ラガーディア大学では、手話を知らない先生とのコミュニケーションが問題。早口であったり、通訳の際のタイムラグなど、通訳者、教員、皆忍耐が必要だ。

司会/クラス以外のカリキュラムなどで、ろう学生同志が交流する機会はありますか？

ケリー/大学内のろう者のASLクラブに参加している。

スラバニア/大学時代は組織の代表だった。

エマニエル/手話を知らない教員や友人にASLを教えた。

リチャード/地域貢献をするクラブで活動し、またASLを教えている。

ミノル/昨年「ろう国際学生協会(DISA)」を立上げた。

ジョーン/メトロポリタンろう協会に参加。

司会/それぞれの大学で一番良いところは？

ケリー/チャレンジ、多様性。

スラバニア/健聴者と平等であること。

ジョーン/通訳を介して健聴者とコミュニケーションが出来て、学んだことは多い。

エマニエル/ギャローデット大学で自分自身が成長、ニューヨーク大学で学力が成長した。

リチャード/ギャローデット大学。手話の様々なスタイルを知った。NTID。テクニカルの勉強をして、世の中を知った。マーシー大学、「ろう文化」や自分のことについて講演をした。

ミノル/学力を高めること、ろう学生との交流、卒業後のネットワーク作り、を実現した。

ケリー/ろうであることを講演すること。

司会/サポートサービスを始めた大学に対するアドバイスは？

ジョーン/通訳を多数雇ってほしい。通訳の質の向上、柔軟性をもってスケジュール

対応をしてほしい。音声認識などの技術で情報を補うこと。

ミノル/ろう学生が満足しているのかどうか確認していく必要がある。

ケリー/通訳をしっかり評価すること。数の増加と同時に質の向上。

スラバニア/ASL通訳やチューターだけでなく、点字やテキストの拡大など、盲ろう学生に対応したサポートサービスが必要。

エマニエル/コミュニケーションの促進やろう学生のニーズに合わせた通訳との適合。皆、多様な経歴を持っているので文化への配慮やニーズに対応していくことが重要だと思う。

また、問題が生じたときの通訳者の役割。

スラバニア/通訳の派遣はコーディネーターに依頼したので、通訳と学生が授業にスムーズに入れるように配慮してくれた。

リチャード/ いろいろな障害者がアクセス出来るサービスがあることが必要ではないか。

大学にろうプログラムを設けているところでは教員の人選に配慮が必要。例えばハンター大学にはろうプログラムがあるので「ろう教員」を雇用すること。また通訳が足りない事態にはきちんと雇用することを要望する。

司会/ありがとうございました。引き続きピザパーティーで情報交換をしましょう。



ピザパーティーの様子





## 付録



PEPNet パンフレット

NETAC パンフレット

全視察日程（第 2 回分）

ロチェスター工科大学の位置

ロチェスター工科大学構内地図

### PEPNet Provides

- Technical Assistance
- Training
- Biennial Conferences
- Distance Learning Opportunities
- Publications
- Training Materials
- Financial Aid Information
- Consultations
- Faculty/Staff Development
- Administration Development
- Enhancement of Support Services
- On-line Learning Opportunities
- Transition Services



PEPNet ...  
Taking higher and higher the  
postsecondary education  
of students who are  
Deaf and Hard of Hearing.  
Call your Regional Center  
Today.

PEPNet is a national collaborative effort.  
For more information, contact your  
Regional Center.

### Midwest Center for Postsecondary Outreach (MCPO)

*St. Paul Technical College*  
235 Marshall Avenue  
Saint Paul, MN 55102  
(651) 846-1550(V)  
(651) 846-1527(TTY)  
(651) 221-1339 (Fax)  
Email: [patty.brill@spc.mnscu.edu](mailto:patty.brill@spc.mnscu.edu)  
Raymond Olson, Director

### Northeast Technical Assistance Center (NETAC)

*National Technical Institute for the Deaf,  
a college of Rochester Institute of Technology*  
52 Lomb Memorial Drive  
Rochester, NY 14623-5604  
(585) 475-6433 (V/TTY)  
(585) 475-7660 (Fax)  
Email: [netac@rit.edu](mailto:netac@rit.edu)  
Dianne K. Brooks, Director

### Postsecondary Education Consortium (PEC)

*The University of Tennessee*  
Claxton Complex A507  
Knoxville, TN 37996-3400  
(865) 974-0607 (V/TTY)  
(865) 974-3522 (Fax)  
Email: [pec@utk.edu](mailto:pec@utk.edu)  
Donnell Ashmore, Director

### Western Region Outreach Center & Consortia (WROCC)

*California State University Northridge*  
18111 Nordhoff Street  
Northridge, CA 91330-8267  
Toll Free (888) 684-4695 (V/TTY)  
(818) 677-4899 (Fax)  
Email: [wrocc@csun.edu](mailto:wrocc@csun.edu)  
Dr. Merri C. Pearson, Director

<http://www.pepnet.org>  
PEPNet is funded through the Individuals with Disabilities  
Education Act (IDEA), US Department of Education,  
Office of Special Education and Rehabilitative Services.



### Postsecondary Education Programs Network



Providing Technical Assistance to  
Postsecondary Institutions Serving  
Individuals Who Are  
Deaf and Hard of Hearing

### PEPNet Mission

The mission of PEPNet is to promote coordination and collaboration among the four Regional Postsecondary Centers for Individuals Who Are Deaf and Hard of Hearing. PEPNet's goal is to provide technical assistance to postsecondary educational institutions providing access and accommodations to individuals who are deaf or hard of hearing.

### PEPNet Objectives

- To improve postsecondary access and transition opportunities for individuals who are deaf or hard of hearing.
- To develop a national design for technical assistance and outreach service delivery to assure that postsecondary institutions and the students they serve will benefit from PEPNet's collaboration and coordination efforts.
- To expand the knowledge and skill of postsecondary institutions related to the provision of educational support services for deaf and hard of hearing students.
- To cooperate with secondary and postsecondary institutions in developing outreach strategies and disseminating information to individuals who are deaf to enhance their awareness of available postsecondary opportunities.
- To increase the postsecondary enrollment, retention, graduation, and employment rates of students who are deaf and hard of hearing.

### PEPNet Stakeholders

The four PEPNet Regional Centers provide technical assistance and facilitate a collaborative network of communication and consortia among two and four-year colleges, vocational training and rehabilitation programs, adult education programs, private and public community service agencies, secondary education personnel, deaf and hard of hearing individuals, consumer and professional organizations, state and national organizations and clearinghouses.





Saint Paul Technical College is the site of the Midwest Center for Postsecondary Outreach (MCPO). For over 30 years St. Paul Technical College

has been a leader in providing technical education and assisting deaf and hard of hearing students from across the U.S. to successfully complete career training and become gainfully employed.

MCPO serves the Midwest Region which includes the states of Illinois, Indiana, Iowa, Kansas, Michigan, Minnesota, Missouri, Nebraska, North Dakota, Ohio, South Dakota and Wisconsin.



The Northeast Technical Assistance Center (NETAC) is located at Rochester Institute of Technology in Rochester, New York. NETAC is supported by one of RIT's colleges, the National Technical Institute for the Deaf, the world's first and largest technological college for deaf and hard of hearing students. NTID's mission is to provide deaf and hard of hearing students with outstanding state-of-the-art technical and professional education programs, complemented by a strong liberal arts and science curriculum that prepares them to live and work in the mainstream of a rapidly changing global community and enhances their lifelong learning. NETAC's region includes the states and territories of Connecticut, Delaware, District of Columbia, Maine, Maryland, Massachusetts, New Hampshire, New Jersey, New York, Pennsylvania, Puerto Rico, Rhode Island, Vermont and the Virgin Islands.

est technological college for deaf and hard of hearing students. NTID's mission is to provide deaf and hard of hearing students with outstanding state-of-the-art technical and professional education programs, complemented by a strong liberal arts and science curriculum that prepares them to live and work in the mainstream of a rapidly changing global community and enhances their lifelong learning. NETAC's region includes the states and territories of Connecticut, Delaware, District of Columbia, Maine, Maryland, Massachusetts, New Hampshire, New Jersey, New York, Pennsylvania, Puerto Rico, Rhode Island, Vermont and the Virgin Islands.



# PEPNet



Midwest Center for Postsecondary Outreach



Postsecondary Education Consortium



Western Region Outreach Center and Consortia



Northeast Technical Assistance Center



The Southern Region is served by the Postsecondary Education Consortium (PEC) located in the Center on Deafness at the University of Tennessee, Knoxville. PEC has a long history of providing technical assistance to postsecondary institutions across the region and currently serves Alabama, Arkansas, Florida, Georgia, Kentucky, Louisiana, Mississippi, North Carolina, Oklahoma, South Carolina, Tennessee, Texas, Virginia and West Virginia.



WESTERN REGION  
OUTREACH CENTER & CONSORTIA  
California State University, Northridge

The Western Region Outreach Center and Consortia (WROCC) is located at the National Center on Deafness at California State University, Northridge. Since 1963, the National Center on Deafness has been a leader in the development and delivery of innovative support services to the largest number of deaf and hard of hearing students enrolled in a mainstream university in the region. WROCC serves the states and territories of Alaska, American Samoa, Arizona, California, Colorado, Guam, Hawaii, Idaho, Montana, Nevada, New Mexico, Northern Marianas Islands, Oregon, Utah, Washington and Wyoming.

## We've got experience

The Northeast Technical Assistance Center (NETAC) was established in 1996 by the U.S. Department of Education, Office of Special Education and Rehabilitative Services (OSERS), to help improve existing postsecondary education support services or to establish new services for students who are deaf and hard of hearing.

The other regional centers are the Midwest Center for Postsecondary Outreach at St. Paul Technical College in St. Paul, Minnesota; the Postsecondary Education Consortium at the University of Tennessee, Knoxville; and the Western Region Outreach Center and Consortia at California State University, Northridge. The common goals of these four centers are:

- To increase access and transition opportunities for students who are deaf and hard of hearing
- To expand the knowledge and skills of those who work with students who are deaf and hard of hearing
- To enhance resources and increase the amount of information available to institutions who want to improve their support services
- To increase enrollment, retention, and graduation rates for postsecondary students who are deaf and hard of hearing



NETAC  
serves:



# Northeast Technical Assistance Center



## Contact us today

For more information about NETAC, please visit us on-line at <http://netac.rit.edu> Or contact us at:

**Northeast Technical Assistance Center**  
Rochester Institute of Technology  
National Technical Institute for the Deaf  
52 Lomb Memorial Drive  
Rochester, NY 14623-5604  
(585) 475-6433 (V/TTY)  
(585) 475-7660 (Fax)  
[netac@rit.edu](mailto:netac@rit.edu)  
<http://netac.rit.edu>

One of four regional centers dedicated to working with secondary and postsecondary institutions to improve educational access and enhance educational opportunities for students who are deaf and hard of hearing.

Located at the National Technical Institute for the Deaf, one of eight colleges of Rochester Institute of Technology, Rochester, New York

This publication was developed under a grant from the U.S. Department of Education, Office of Special Education and Rehabilitative Services (OSERS) and produced through a cooperative agreement between RIT and USIBH (R13ED00016). The contents do not necessarily represent the Department of Education's policy nor endorsement by the Federal Government.

VI800-12-05 Printing Methods, Inc.



## We've got connections

NETAC works with two- and four-year colleges, proprietary programs, secondary schools, vocational training programs, adult education programs, private and public community service agencies, consumer and professional organizations, state and national organizations, and individuals.

## We've got a long-range plan

NETAC has been funded through 2006. This means that those needing information and support can contact us at our central office, located at RIT, or can contact a NETAC-designated "site coordinator" directly. NETAC serves Connecticut, Delaware, District of Columbia, Maine, Maryland, Massachusetts, New Hampshire, New Jersey, New York, Pennsylvania, Puerto Rico, Rhode Island, U.S. Virgin Islands, and Vermont.

## We've got information you can use—in print or on the Web

NETAC offers a variety of free publications on topics related to working with students who are deaf and hard of hearing, including an extensive *Teacher Tipsheet* series; an informational guide, "Financing Your

Education"; a training package, "ACCESS: How Best to Serve Postsecondary Students Who Are Hard of Hearing"; a Proprietary Schools resource directory; and lots of other information that's current. All of NETAC's written publications are available on our Web site at <http://netac.rit.edu>.

## We've got C-Print™

The nationally acclaimed C-Print™ project, begun at NTID in 1990, is an important resource available through NETAC. This speech-to-print classroom transcription system is one of the country's premier accommodation strategies. C-Print™ is one of several technological innovations available through NETAC.

## We've got workshops, internships, and "tips" galore

NETAC offers local and regional workshops on cutting-edge topics such as how to help students plan for life after high school; how vocational rehabilitation and colleges can work together to assist students who are deaf and hard of hearing; and how to assimilate employees who are deaf and hard of hearing into the workplace. NETAC offers internships that allow professionals who work with deaf and hard-of-hearing students

to visit various sites within the NETAC region to hone their skills in areas such as teaching, grant writing, and providing support services to students.

Finally, NETAC offers more than two dozen free *Teacher Tipsheets* that offer concise information on topics relevant to deaf education.

## We've got tomorrow's issues today

NETAC has information on "hot" topics such as transitioning to college, assistive listening devices, on-campus accessibility, voice recognition technology, interpreting, legal issues involving deaf and hard-of-hearing students, and more.

## We've got time...for you

NETAC's staff members pride themselves on being able to respond quickly to inquiries relevant to our mission. If we don't have the answer, we'll find it...and soon. NETAC has a national network of professionals who usually can respond to questions within just a few days. NETAC staff members are real persons with real solutions!



**Faculty Development  
PEN-International/NETAC/NTID  
14-23 March 2005**

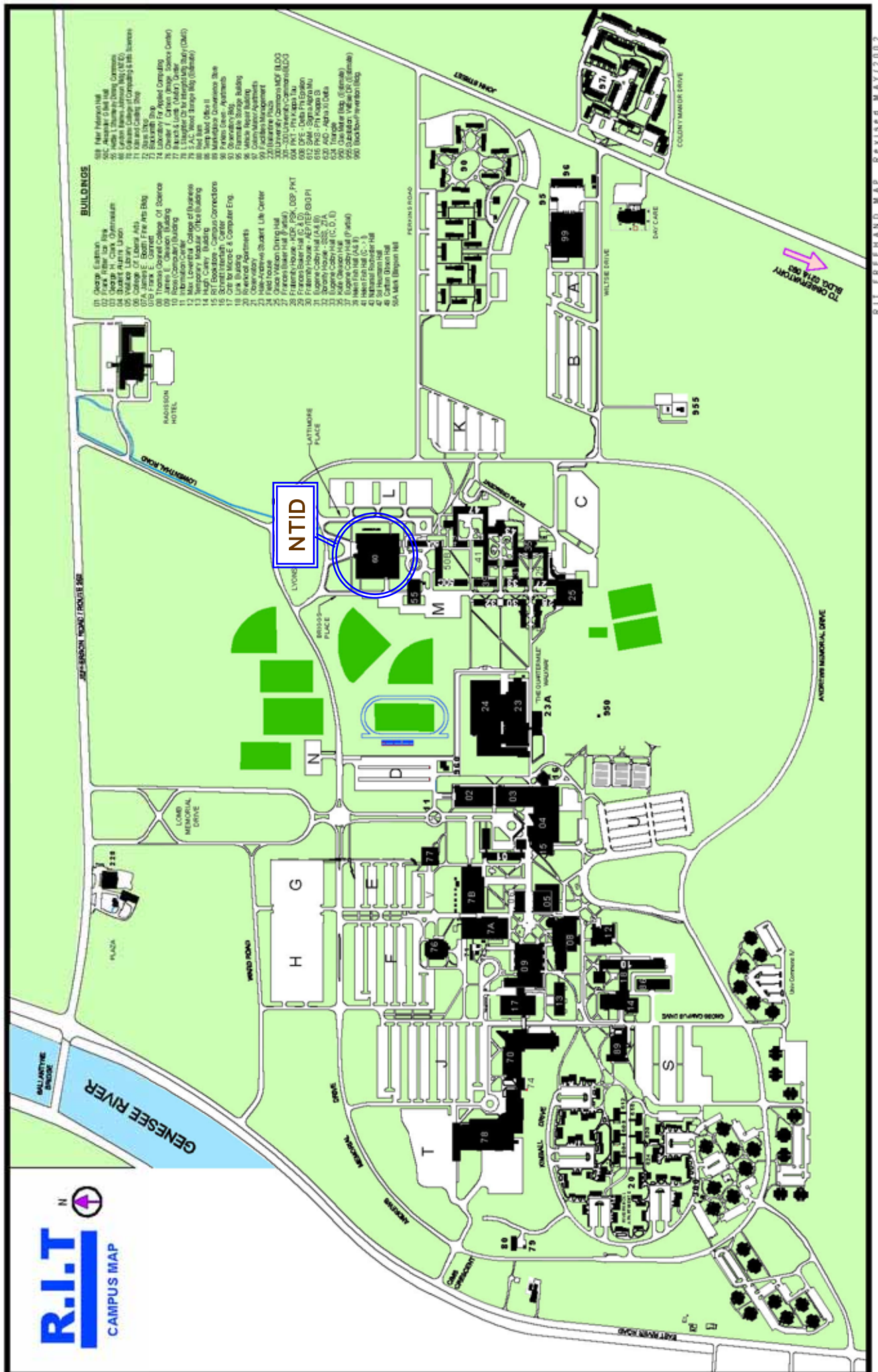
	Sunday 13 March	Monday 14 March	Tuesday 15 March	Wednesday 16 March	Thursday 17 March	Friday 18 March	Saturday 19 March	Sunday 20 March	Monday 21 March	Tuesday 22 March	Wednesday 23 March
7:00											
7:30		Welcome Breakfast & PEN overview PEN-Int'l Training Room	Breakfast @ Hotel	Breakfast @ Hotel	Breakfast @ Hotel						
8:00											
8:30		<b>Jim DeCaro</b> <b>Bill Clymer</b>									Depart for JFK
9:00		NETAC/PEPNet Discussions	NTID Support Services	NTID Office on Employment	C-Print						
9:30											
10:00		LBJ 2590	Tutoring			<b>New York University</b>			<b>LaGuardia Community College</b>	<b>Hunter College</b>	
10:30		<b>Pat Billies,</b> <b>Jane Nunes,</b> <b>Desiree Duda</b> (NETAC)	Interpreting		Notetaking	Orientation and Tour			Orientation and Tour	Orientation and Tour	
11:00		<b>Denise Kavlin</b> (PEN-Int'l)									
11:30							<b>New York City Tours</b>				
12:00		Lunch break (2590)	Lunch	Lunch	Lunch	Lunch			Lunch	Lunch	Depart for Narita NW 017 (11:50)
12:30											
1:00											
1:30											
2:00	Arrive JFK NW018 (1:55)	Continued Discussions	NTID Student Life	NTID Counseling Services		Discussions		Business Meeting w/ Jim DeCaro	Discussions	Discussions	
2:30				NTID Advising	Depart for airport (RSE bus)						
3:00		Wrap-up				Adjourn			Adjourn Student Panel	Adjourn	
3:30											
4:00											
4:30											
5:00	Depart JFK JB 38 (5:20)				Depart ROC JB 33 (5:15)				Dinner/Pizza Party		
5:30											
6:00	Arrive ROC (6:25) RSE bus to hotel				Arrive JFK (6:25)						
7:00											

## ロチェスター工科大学の位置





ロチェスター工科大学構内地図





## 聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして 第2回 アメリカ視察報告書

発行：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク  
PEPNet-Japan : The Postsecondary Education Programs Network of Japan

〒305-0005

茨城県つくば市天久保 4-3-15

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター

支援交流室 聴覚系 WG 内 PEPNet-Japan 事務局 白澤麻弓

PEPNet-Japan は日本財団の助成による PEN-International (本部：ロチェスター工科大学 NTID 内) の事業の一部です。